

上ノ原横穴墓群 I

一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(2)

1989年3月

大分県教育委員会

序 文

この報告書は、大分県教育委員会が建設省大分工事事務所の委託を受けて、昭和56年から昭和60年にかけて実施した下毛郡三光村上ノ原横穴墓群の発掘調査の記録であります。

この地に横穴墓が存在することはかねてから周知されており、その一部は地元篤志家によって保存されておりましたが、今回の発掘調査で紀元5～6世紀の横穴墓が予想をはるかに上回る規模で発見されたものであります。特に当遺跡は墓道部を含む遺構が良く保存されており、年代的にも全国で最も古い横穴墓群の一つとして学術的に極めて重要な価値を有していることが判明し、また九州大学解剖学教室との共同作業によって、古代の家族構成を探る重要な問題提起がなされるなど、全国的に注目される遺跡となりました。

この間、遺跡の保存については鋭意努力を重ねたところでありますが、最終的には工法変更により一部を保存することとし、他は記録保存をもって対応することのやむなきに至りました。ただ遺跡の重要性に鑑み、調査はとくに慎重かつ周到に行われ、調査が五か年の長きにわたったのもその結果であります。

この上は、本書が我が国と郷土の考古、歴史学の研究と埋蔵文化財保護の啓発、認識と理解の一助となれば幸いと思います。

なお、発刊にあたり、調査に対して御協力いただきました建設省、地元の方々をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成元年3月

大分県教育委員会

教育長 嶋津文雄

例 言

1. 本書は一般国道10号線中津バイパス建設に伴う事前調査のうち昭和55年から昭和60年まで調査した下毛郡三光村上ノ原横穴墓群の発掘調査報告書である。
2. 調査は建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 遺構実測は調査参加者全員がおこない、図版は村上久和、吉田寛、吉武牧子、瀧野玲子の討議により作製し、浄書は吉武、瀧野、清原史代がおこなった。なお人骨の実測、浄書は、九州大学医学部第二解剖学教室、田中良之、土肥直美両助手に依頼した。
4. 遺物実測は土器を村上、清原、瀧野、吉田、小林昭彦、原田昭一、吉留秀敏が、鉄器を瀧野、村上、行時志郎、江田豊、江藤和幸、池邊千太郎が、装身具を瀧野、村上がおこない、浄書は吉武、瀧野、今泉正子、長野とよみがおこなった。
5. 出土遺物のうち土器の復原は村上の指導のもとに佐藤厚子、東圭子、神屋富美子、田上幸子、渡辺広美がおこない、接合関係については主に村上、神屋、渡辺がおこなった。
鉄器処理については、山田拓伸の指導のもとに県立宇佐風土記ノ丘歴史民俗資料館でおこなった。
6. 出土人骨の鑑定については九州大学医学部第二解剖学教室永井昌文教授（当時）、田中、土肥両助手にお願いし、玉稿を賜った。
7. 本書の執筆はⅠを渋谷忠章が、Ⅱを村上、吉留が、Ⅲ遺構については調査担当のうち土層観察を主にした者が、土器観察表については清原が、鉄器・装身具観察表については村上、瀧野がおこなった。なお、人骨についての全ての記述は九州大学医学部第二解剖学教室、田中、土肥両助手に依頼した。
8. 本書に使用した方位は磁北である。真北との偏差は西偏 $06^{\circ}0'$ （1982年）である。
9. 上ノ原横穴墓群出土遺物と記録類の資料は大分県教育委員会文化課に保管している。
10. 本書の編集は渋谷・村上・田中・土肥・吉留が協議し、主として村上が吉武の協力を得て行った。なお、上ノ原横穴墓群の報告については3分冊とし、本書はその遺構、遺物編Ⅰにあたる。来年度以降、遺構・遺物編Ⅱおよび写真図版編Ⅰを刊行予定である。

本文目次

I. はじめに	
1. 発掘調査の経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の組織	2
II. 調査の概要	
1. 遺跡の立地と歴史的環境	4
2. 調査の方針及び方法	10
(1)発掘調査の方針と方法	10
(2)横穴墓番号の変更と各部の名称	10
(3)土器観察の説明	10
3. 本報告における古墳時代後期土器の編年	12
III. 上ノ原横穴墓群の調査	14
1号横穴墓	14
2号横穴墓	20
3号横穴墓	29
4号横穴墓	39
5号横穴墓	49
6号横穴墓	55
7号横穴墓	60
8号横穴墓	72
9号横穴墓	80
1号石蓋土墳墓	87
10号横穴墓	87
11号横穴墓	89
12号横穴墓	98
13号横穴墓	115
14号横穴墓	116
15号横穴墓	129
16号横穴墓	133
17号横穴墓	149
18号横穴墓	157
19号横穴墓	166

20号横穴墓	173
21号横穴墓	194
22号横穴墓	205
23号横穴墓	225
24号横穴墓	229
25号横穴墓	244
26号横穴墓	257
27号横穴墓	276
28号横穴墓	291
29号横穴墓	300
30号横穴墓	312
31号横穴墓	324
32号横穴墓	335
33号横穴墓	340
34号横穴墓	353
35号横穴墓	358
36号横穴墓	375
37号横穴墓	389
38号横穴墓	393
39号横穴墓	401
40号横穴墓	406

挿 図 目 次

第1図	山国川下流域遺跡分布図	5
第2図	山国川下流域古墳時代遺跡分布図	7
第3図	上ノ原横穴墓群周辺古墳分布図	8
第4図	上ノ原横穴墓群分布図	9
第5図	横穴墓各部の名称	11
第6図	土器観察表説明例図	11
第7図	土器調整例図	11
第8図	上ノ原横穴墓群坏差・身福年表	12
第9図	1号横穴墓平・断面図	15
第10図	1号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	16
第11図	1号横穴墓出土遺物実測図	17
第12図	2号横穴墓平・断面図	21
第13図	2号横穴墓縦断土層図	22
第14図	2号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	23
第15図	2号横穴墓出土遺物実測図(1)	24
第16図	2号横穴墓出土遺物実測図(2)	25
第17図	2号横穴墓出土土器ヘラ記号	25
第18図	3号横穴墓テラス平面図	29
第19図	3号横穴墓平・断面図	30
第20図	3号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	31
第21図	3号横穴墓玄室内人骨出土状態	33
第22図	3号横穴墓出土遺物実測図(1)	35
第23図	3号横穴墓出土遺物実測図(2)	36
第24図	3号横穴墓平・断面図	40
第25図	4号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	42
第26図	4号横穴墓出土遺物実測図(1)	43
第27図	4号横穴墓出土遺物実測図(2)	44
第28図	4号横穴墓出土遺物実測図(3)	45
第29図	4号横穴墓出土土器ヘラ記号	45
第30図	5号横穴墓テラス平面図	49
第31図	5号横穴墓平・断面図	50
第32図	5号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	51
第33図	5号横穴墓出土土器ヘラ記号	51
第34図	5号横穴墓前庭部遺物出土状態	51
第35図	5号横穴墓玄室内人骨出土状態	52
第36図	5号横穴墓出土遺物実測図	53
第37図	6号横穴墓平・断面図	56
第38図	6号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	57
第39図	6号横穴墓縦断土層図	57
第40図	6号横穴墓玄室内人骨出土状態	59

第41図	6号横穴墓出土遺物実測図	59
第42図	7号横穴墓平・断面図	61
第43図	7・8号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	63~64
第44図	7号横穴墓出土遺物実測図(1)	65
第45図	7号横穴墓出土遺物実測図(2)	66
第46図	7号横穴墓出土遺物実測図(3)	67
第47図	7号横穴墓出土土器へラ記号	71
第48図	8号横穴墓テラス平面図	72
第49図	8号横穴墓平・断面図	73
第50図	8号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	74
第51図	8号横穴墓出土遺物実測図(1)	76
第52図	8号横穴墓出土遺物実測図(2)	77
第53図	8号横穴墓出土土器へラ記号	77
第54図	9号横穴墓平・断面図	81
第55図	9号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	82
第56図	9号横穴墓出土遺物実測図(1)	83
第57図	9号横穴墓出土土器へラ記号	83
第58図	9号横穴墓出土遺物実測図(2)	84
第59図	1号石蓋土墳墓平・断面図	87
第60図	10号横穴墓平・断面図及び縦断土層図	88
第61図	11号横穴墓テラス平面図	89
第62図	11号横穴墓平・断面図	90
第63図	11号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	91
第64図	11号横穴墓玄室内人骨出土状態	92
第65図	11号横穴墓出土遺物実測図(1)	96
第66図	11号横穴墓出土遺物実測図(2)	97
第67図	12号横穴墓平・断面図	99
第68図	12号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	101
第69図	12号横穴墓玄室内人骨出土状態	102
第70図	12号横穴墓出土土器へラ記号	103
第71図	12号横穴墓出土遺物実測図(1)	104
第72図	12号横穴墓出土遺物実測図(2)	105
第73図	12号横穴墓出土遺物実測図(3)	106
第74図	12号横穴墓出土遺物実測図(4)	107
第75図	12号横穴墓出土遺物実測図(5)	108
第76図	12号横穴墓出土遺物実測図(6)	109
第77図	13号横穴墓平・断面図	115
第78図	14号横穴墓平・断面図	117
第79図	14号横穴墓出土土器へラ記号	118
第80図	14号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	119
第81図	14号横穴墓出土遺物実測図(1)	121
第82図	14号横穴墓出土遺物実測図(2)	122

第83図	14号横穴墓出土遺物実測図(3).....	123
第84図	15号横穴墓周辺平面図.....	129
第85図	15号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	130
第86図	15号横穴墓前庭部遺物出土状態.....	130
第87図	15号横穴墓平・断面図.....	131
第88図	15号横穴墓出土遺物実測図.....	132
第89図	16号横穴墓平・断面図.....	135
第90図	16号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	136
第91図	16号横穴墓出土土器ヘラ記号.....	137
第92図	16号横穴墓出土遺物実測図(1).....	138
第93図	16号横穴墓出土遺物実測図(2).....	139
第94図	16号横穴墓出土遺物実測図(3).....	140
第95図	16号横穴墓出土遺物実測図(4).....	141
第96図	17・19号横穴墓テラス平面図.....	149
第97図	17号横穴墓平・断面図.....	151
第98図	17号横穴墓縦断土層図.....	152
第99図	17号横穴墓玄室内人骨出土状態.....	152
第100図	17号横穴墓出土遺物実測図.....	154
第101図	18号横穴墓平・断面図.....	158
第102図	18号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	160
第103図	18号横穴墓出土遺物実測図(1).....	161
第104図	18号横穴墓出土遺物実測図(2).....	162
第105図	19号横穴墓平・断面図.....	167
第106図	19号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	168
第107図	19号横穴墓玄室内人骨出土状態.....	169
第108図	19号横穴墓出土遺物実測図.....	171
第109図	20号横穴墓平・断面図.....	174
第110図	20号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	176
第111図	20号横穴墓出土土器ヘラ記号.....	178
第112図	20号横穴墓出土遺物実測図(1).....	179
第113図	20号横穴墓出土遺物実測図(2).....	180
第114図	20号横穴墓出土遺物実測図(3).....	181
第115図	20号横穴墓出土遺物実測図(4).....	182
第116図	20号横穴墓出土遺物実測図(5).....	183
第117図	20号横穴墓出土遺物実測図(6).....	184
第118図	21号横穴墓テラス平面図.....	194
第119図	21号横穴墓平・断面図.....	195
第120図	21号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図.....	196
第121図	21号横穴墓前庭部遺物出土状態.....	196
第122図	21号横穴墓玄室内人骨出土状態.....	198
第123図	21号横穴墓出土遺物実測図(1).....	202
第124図	21号横穴墓出土遺物実測図(2).....	203

第125図	22号横穴墓平・断面図	206
第126図	22号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	208
第127図	22号横穴墓玄室内人骨出土状態	209
第128図	22号横穴墓出土遺物実測図(1)	210
第129図	22号横穴墓出土遺物実測図(2)	211
第130図	22号横穴墓出土遺物実測図(3)	212
第131図	22号横穴墓出土遺物実測図(4)	213
第132図	22号横穴墓出土遺物実測図(5)	214
第133図	22号横穴墓出土遺物実測図(6)	215
第134図	22号横穴墓出土遺物実測図(7)	216
第135図	22号横穴墓出土土器へラ記号	224
第136図	23号横穴墓平・断面図	226
第137図	23号横穴墓前庭部1号土壇墓平・断面図	228
第138図	23号横穴墓出土遺物実測図	228
第139図	24号横穴墓平・断面図	231
第140図	24号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	233
第141図	24号横穴墓出土遺物実測図(1)	234
第142図	24号横穴墓出土遺物実測図(2)	235
第143図	24号横穴墓出土遺物実測図(3)	236
第144図	24号横穴墓出土遺物実測図(4)	237
第145図	24号横穴墓出土土器へラ記号	238
第146図	25号横穴墓テラス平面図	244
第147図	25号横穴墓平・断面図	245
第148図	25号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	247
第149図	25号横穴墓玄室内人骨出土状態	249
第150図	25号横穴墓出土遺物実測図(1)	251
第151図	25号横穴墓出土遺物実測図(2)	252
第152図	25号横穴墓出土遺物実測図(3)	253
第153図	25号横穴墓出土土器へラ記号	253
第154図	26号横穴墓平・断面図	258
第155図	26号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	260
第156図	26号横穴墓出土遺物実測図(1)	261
第157図	26号横穴墓出土遺物実測図(2)	262
第158図	26号横穴墓出土遺物実測図(3)	263
第159図	26号横穴墓出土遺物実測図(4)	264
第160図	26号横穴墓出土遺物実測図(5)	265
第161図	26号横穴墓出土遺物実測図(6)	266
第162図	26号横穴墓出土遺物実測図(7)	267
第163図	26号横穴墓出土土器へラ記号	268
第164図	27号横穴墓テラス平面図	276
第165図	27号横穴墓平・断面図	277
第166図	27号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	279

第167図	27号横穴墓玄室内人骨出土状態	281
第168図	27号横穴墓出土遺物実測図(1)	284
第169図	27号横穴墓出土遺物実測図(2)	285
第170図	27号横穴墓出土遺物実測図(3)	286
第171図	27号横穴墓出土土器ヘラ記号	286
第172図	28号横穴墓縦断土層図	292
第173図	28号横穴墓平・断面図	293
第174図	28号横穴墓出土遺物実測図(1)	295
第175図	28号横穴墓出土遺物実測図(2)	296
第176図	28号横穴墓出土土器ヘラ記号	299
第177図	29号横穴墓平・断面図	301
第178図	29号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	302
第179図	29号横穴墓出土遺物実測図(1)	304
第180図	29号横穴墓出土遺物実測図(2)	305
第181図	29号横穴墓出土遺物実測図(3)	306
第182図	29号横穴墓出土土器ヘラ記号	306
第183図	30号横穴墓平・断面図	313
第184図	30号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	314
第185図	30号横穴墓玄室内人骨出土状態	315
第186図	30号横穴墓出土遺物実測図(1)	320
第187図	30号横穴墓出土土器ヘラ記号	320
第188図	30号横穴墓出土遺物実測図(2)	321
第189図	31号横穴墓平・断面図	325
第190図	31号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	326
第191図	31号横穴墓出土遺物実測図(1)	328
第192図	31号横穴墓出土遺物実測図(2)	329
第193図	31号横穴墓出土遺物実測図(3)	330
第194図	31号横穴墓出土土器ヘラ記号	334
第195図	32号横穴墓縦断土層図	335
第196図	32号横穴墓平・断面図	336
第197図	32号横穴墓出土遺物実測図(1)	337
第198図	32号横穴墓出土遺物実測図(2)	338
第199図	33号横穴墓平・断面図	341
第200図	33号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	342
第201図	33号横穴墓出土遺物実測図(1)	344
第202図	33号横穴墓出土遺物実測図(2)	345
第203図	33号横穴墓出土遺物実測図(3)	346
第204図	33号横穴墓出土遺物実測図(4)	347
第205図	34号横穴墓平・断面図	354
第206図	34号横穴墓縦断土層図	355
第207図	34号横穴墓出土遺物実測図	356
第208図	35号横穴墓縦断土層図	358

第209図	35号横穴墓平・断面図	359
第210図	35号横穴墓玄室内人骨出土状態	361
第211図	35号横穴墓出土遺物実測図(1)	367
第212図	35号横穴墓出土遺物実測図(2)	368
第213図	35号横穴墓出土遺物実測図(3)	369
第214図	35号横穴墓出土遺物実測図(4)	370
第215図	35号横穴墓出土遺物実測図(5)	371
第216図	36号横穴墓平・断面図	376
第217図	36号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	378
第218図	36号横穴墓出土遺物実測図(1)	379
第219図	36号横穴墓出土遺物実測図(2)	380
第220図	36号横穴墓出土遺物実測図(3)	381
第221図	36号横穴墓出土遺物実測図(4)	382
第222図	37号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	389
第223図	37号横穴墓平・断面図	390
第224図	37号横穴墓出土遺物実測図	391
第225図	38号横穴墓平・断面図	394
第226図	38号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	396
第227図	38号横穴墓出土遺物実測図(1)	397
第228図	38号横穴墓出土遺物実測図(2)	398
第229図	39号横穴墓テラス平面図	401
第230図	39号横穴墓平・断面図	402
第231図	39号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	403
第232図	39号横穴墓出土遺物実測図	404
第233図	40号横穴墓平・断面図	407
第234図	40号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図	409
第235図	40号横穴墓出土遺物実測図(1)	410
第236図	40号横穴墓出土遺物実測図(2)	411

表 目 次

第1表	新・仮横穴墓番号対照表	10
第2表	1号横穴墓出土土器観察表	18
第3表	1号横穴墓出土鉄器観察表	19
第4表	2号横穴墓出土土器観察表	26
第5表	2号横穴墓出土鉄器観察表	28
第6表	2号横穴墓出土玉類計測表	28
第7表	3号横穴墓出土土器観察表	36
第8表	3号横穴墓出土鉄器観察表	37
第9表	3号横穴墓出土玉類計測表	38
第10表	4号横穴墓出土土器観察表	41

第11表	4号横穴墓出土鉄器観察表	48
第12表	5号横穴墓出土土器観察表	54
第13表	5号横穴墓出土鉄器観察表	54
第14表	6号横穴墓出土鉄器観察表	59
第15表	7号横穴墓出土土器観察表	68
第16表	8号横穴墓出土土器観察表	78
第17表	8号横穴墓出土鉄器観察表	79
第18表	9号横穴墓出土土器観察表	85
第19表	9号横穴墓出土鉄器観察表	86
第20表	11号横穴墓出土土器観察表	97
第21表	11号横穴墓出土鉄器観察表	98
第22表	12号横穴墓出土土器観察表	110
第23表	12号横穴墓出土鉄器観察表	114
第24表	12号横穴墓出土装身具計測表	114
第25表	14号横穴墓出土土器観察表	124
第26表	14号横穴墓出土鉄器観察表	128
第27表	15号横穴墓出土土器観察表	132
第28表	15号横穴墓出土鉄器観察表	132
第29表	16号横穴墓出土土器観察表	142
第30表	16号横穴墓出土鉄器観察表	146
第31表	16号横穴墓出土装身具計測表	146
第32表	17号横穴墓出土土器観察表	155
第33表	17号横穴墓出土鉄器観察表	156
第34表	18号横穴墓出土土器観察表	163
第35表	18号横穴墓出土鉄器観察表	165
第36表	19号横穴墓出土土器観察表	172
第37表	19号横穴墓出土鉄器観察表	172
第38表	20号横穴墓出土土器観察表	185
第39表	20号横穴墓出土鉄器観察表	190
第40表	20号横穴墓出土耳環計測表	191
第41表	20号横穴墓出土玉類計測表	191
第42表	21号横穴墓出土土器観察表	201
第43表	21号横穴墓出土鉄器観察表	204
第44表	21号横穴墓出土玉類計測表	204
第45表	22号横穴墓出土土器観察表	217
第46表	22号横穴墓出土装身具計測表	223
第47表	22号横穴墓出土鉄器観察表	224
第48表	23号横穴墓出土土器観察表	227
第49表	23号横穴墓出土鉄器観察表	227
第50表	23号横穴墓出土石器観察表	227
第51表	24号横穴墓出土土器観察表	238
第52表	24号横穴墓出土鉄器観察表	241

第53表	24号横穴墓出土装身具計測表	242
第54表	25号横穴墓出土土器觀察表	254
第55表	25号横穴墓出土鉄器觀察表	255
第56表	26号横穴墓出土土器觀察表	269
第57表	26号横穴墓出土鉄器觀察表	275
第58表	26号横穴墓出土耳環・石器計測表	275
第59表	27号横穴墓出土土器觀察表	287
第60表	27号横穴墓出土鉄器觀察表	290
第61表	27号横穴墓出土玉類計測表	290
第62表	28号横穴墓出土土器觀察表	297
第63表	28号横穴墓出土鉄器觀察表	299
第64表	28号横穴墓出土玉類計測表	299
第65表	29号横穴墓出土土器觀察表	307
第66表	29号横穴墓出土鉄器觀察表	311
第67表	30号横穴墓出土土器觀察表	322
第68表	30号横穴墓出土鉄器觀察表	323
第69表	31号横穴墓出土土器觀察表	331
第70表	31号横穴墓出土鉄器觀察表	334
第71表	32号横穴墓出土土器觀察表	339
第72表	32号横穴墓出土鉄器觀察表	339
第73表	33号横穴墓出土土器觀察表	348
第74表	33号横穴墓出土鉄器・耳環觀察表	352
第75表	34号横穴墓出土土器觀察表	357
第76表	34号横穴墓出土鉄器觀察表	357
第77表	34号横穴墓出土石器觀察表	357
第78表	34号横穴墓出土骨角器觀察表	357
第79表	35号横穴墓出土土器觀察表	372
第80表	35号横穴墓出土鉄器觀察表	373
第81表	35号横穴墓出土石器觀察表	374
第82表	36号横穴墓出土土器觀察表	383
第83表	36号横穴墓出土鉄器觀察表	388
第84表	37号横穴墓出土土器觀察表	392
第85表	37号横穴墓出土鉄器觀察表	392
第86表	38号横穴墓出土土器觀察表	399
第87表	38号横穴墓出土鉄器觀察表	400
第88表	39号横穴墓出土土器觀察表	405
第89表	40号横穴墓出土土器觀察表	412
第90表	40号横穴墓出土鉄器觀察表	414

I. はじめに

1. 発掘調査の経緯

中津バイパスは、一般国道10号線の改良工事として計画された北大道路（北九州市一大分市）のうちの一つで、大分県の北部にあたる下毛郡三光村大字佐知から宇佐市大字山下に至る総延長9.9kmである。この北大道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和40年代後半から工事主体者である建設者と、大分県土木部及び大分県教育委員会の間で協議がすすめられ、先ず大分県教委は路線決定前と決定後の二度にわたり予定路線内の分布調査を詳細に実施した。その結果、中津バイパス予定路線内で28ヶ所の遺跡及び遺跡推定地を確認し、昭和55年度より建設省九州地方建設局との委託契約により本格的な対応を行うこととなった。

上ノ原横穴墓群は、昭和30年頃に行われた土地造成によって発見され、このうち一基（20号横穴墓）は土地所有者によって上層を架け保存されていた。また玄室内より出土した須恵器・馬具類は土地所有者によって所有されていたが、6世紀初頭に位置づけられ、馬具を出土した横穴墓であるにもかかわらず、研究史の上ではほとんど注目されることはなかったのである。しかし調査の進展に伴い、長い墓道をもつ横穴墓や5世紀代に位置づけられる横穴墓が相次ぎ発見され、一躍注目される遺跡となった。そして最終的には、80基の横穴墓を調査し、5年の歳月を費やすこととなり、この間、横穴墓の調査方法や遺跡の保存などについての問題も多く論議されてきたのはいうまでもない。

2. 調査の経過

昭和56年度、土地所有者により保存された横穴墓（20号）の周辺約1200㎡を対象に10m×10mのグリッドを設定し遺構の検出を行った。その結果、24基の横穴墓を確認したが、その多くは盗掘などの二次的な破壊からまぬがれ、墓道等の保存状態は良好なものであった。

このため調査は、墓道あるいは前庭部の土層観察と、土器の出土状況を詳細に検討することに主眼を置いた。これにより、土器の出土状況は(1)配列埋置、(2)一括埋置、(3)破砕散布の三類型に分けられた。例えば16号横穴墓では、墓道埋上を概ね5層に分けられるが、第2層は一括埋置（6世紀後半）、第5層は一括埋置・破砕散布（6世紀末葉）に分類され、4回に及ぶ何らかの祭祀行為のあったことが推定された。しかも2～4段階の遺物群とその遺構は、閉塞部には達しておらず本横穴墓の埋葬に伴うものではないことも明らかとなった。即ち、1段階の遺物のみが埋葬に直接関連するものと考えられ、墓道の詳細な調査が重要な意義をもつことが指摘された。また、玄室内の人骨は保存状態の良いものが多いことも明らかとなり、その調査については九州大学医学部第二解剖学教室へ依頼することとした。

昭和57年度は、前年度にひきつづき本線部分の確認と本調査を実施し、また本線に取りつく渠道付け替え工事部分でも新たに6基の横穴墓が検出され、調査が長期化する可能性が強くなった。当年度は西地区の完掘に努めたが、前年度とあわせて32基の横穴を調査した。その結果、横穴墓は大きく三期に時期を区分することが可能となり、次のような特徴を見出すことができた。

Ⅰ期 5世紀後半を中心とした横穴墓で、特定個人（熟年～成年男性）の埋葬を主流とするが、追葬の可能性も残す。また玄室内では、土器を使用しない食物供献儀礼の行われていたことも指摘された。

Ⅱ期 5世紀～6世紀初頭を中心とした横穴墓で、玄室内では土器を使用した食物供献儀礼の行われたことが明らかにされた。また追葬はほとんどの横穴で確認されるが、初葬はⅠ期と同じく熟年～成年男性を埋葬しており、被葬者集団の性格のある程度とらえることが可能になった。

Ⅲ期 6世紀の中頃～後半を中心とした横穴墓で、長い墓道をもつ玄室内にはほとんど礫石が敷かれている。またⅠ・Ⅱ期横穴墓とはほぼ対をなすように築造され、墓前祭祀を含めて密接な関係が認められた。

昭和58年度は、前年度に継続して中央部付近と西側斜面部を調査した。新たにⅠ・Ⅱ期の横穴墓10基とⅢ期の横穴墓13基を確認し、これまでと同様に墓前祭祀の事実関係と、またⅠ期横穴墓も6世紀後半代まで継続して墓

前祭祀の行われたことが判明した。

昭和59年度は調査最終年度にあてられていたが、Ⅰ・Ⅱ期横穴墓14基、Ⅲ期横穴墓13基が新たに発見され調査したが、その他にも北備地区で10基が確認され、この部分については地元の要請もあって現状保存の措置がとられた。一方、一部ではあるが人骨の調査結果も明らかになり、被葬者の親族関係により横穴墓には父系の血縁者が葬られ、配偶者は同一横穴墓に葬られていないという事実関係が判明し、古代の埋葬原理の上で重要な結論が導きだされた。

昭和60年度は、旧泉道下にあった5基の横穴墓と前年度未掘の2基、それに新たに検出された1基の調査を行った。周辺ではすでに工事がすすめられ、今年度をもって調査区で検出された約80基の調査を完了した。

3. 調査の組織

昭和56年度

調査指導員 賀川光夫(別府大学教授・文化財保護審議会委員)、小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹・文化財保護審議会委員)、白木原和美(熊本大学文学部教授)、西谷正(九州大学文学部助教授)

調査員 田中良之(九州大学医学部第二解剖学教室)

大分県教育委員会

総括 友田享史(教育長)、藤澤清(管理部長)、原尻実(文化課課長)

庶務 堂園徳昭(文化課課長補佐)、嶋田博之(同施設専門員兼庶務係長)、橋本勝見(同庶務係主査)

調査主任 後藤宗俊(文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査員 清水宗昭(同埋蔵文化財係主任)、村上久和(同主事)、吉留秀敏(同嘱託)、佐藤良二郎(同嘱託)、水松みゆき(同嘱託)

調査補助員 茂和敏・土居和幸(以上別府大学学生)、北条芳隆(岡山大学学生)

昭和57年度

調査指導員 賀川光夫(別府大学教授・文化財保護審議会委員)、小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹・文化財保護審議会委員)

調査員 田中良之(九州大学医学部第二解剖学教室)

大分県教育委員会

総括 手嶋誠一(教育長)、藤澤清(教育次長兼管理部長)、原尻実(文化課課長)、堂園徳昭(同主幹兼課長補佐)

庶務 橋本淳一(文化課主幹兼庶務係長)、橋本勝見(同主査)

調査主任 後藤宗俊(文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査員 清水宗昭(同埋蔵文化財係主任)、村上久和(同主事)、西哲弘(同主事)、吉留秀敏(同嘱託)、橋本孝生(同嘱託)

調査補助員 木村明史・土居和幸(以上別府大学学生)、北条芳隆・田中裕介・藤井克昌(以上岡山大学学生)、吉田寛(山口大学学生)、松永幸男(九州大学学生)

昭和58年度

調査指導員 賀川光夫(別府大学教授・文化財保護審議会委員)、小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹・文化財保護審議会委員)、水野正好(奈良大学教授)、西谷正(九州大学助教授)

調査員 田中良之(九州大学医学部第二解剖学教室)

大分県教育委員会

総括 手嶋誠一(教育長)、藤澤清(教育次長)、秋吉辰郎(文化課課長)、後藤光(同主幹兼課長補佐)

庶務 橋本淳一(文化課主幹)、伊藤正行(同主任)

調査主任 後藤宗俊(文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査員 清水宗昭(同埋蔵文化財係主任)、村上久和(同主任)、西哲弘(同主事)、小林昭彦(同主事)、
城戸誠(同嘱託)、橋本孝生(同嘱託)、友岡信彦(同嘱託)
庶務 橋本淳一(文化課主幹兼庶務係長)、伊藤正行(同主任)
調査補助員 土居和幸・前田達男(以上別府大学学生)、吉田寛(山口大学学生)

昭和59年度

調査指導員 賀川光夫(別府大学教授・文化財保護審議会委員)、小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹・
文化財保護審議会委員)、水野正好(奈良大学教授)、西谷正(九州大学助教授)
大分県教育委員会
総括 手嶋誠一(教育長)、佐藤典雄(教育次長)、高塚至(文化課課長)、塔鼻勝人(同主幹兼課長補佐)
庶務 橋本淳一(文化課主幹兼庶務係長)、伊藤正行(同庶務係主査)
調査主任 後藤宗俊(文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)
調査員 清水宗昭(同埋蔵文化財係主査)、村上久和(同主任)、西哲弘(同主事)、江田豊(同主事)、橋
本孝生(同嘱託)、友岡信彦(同嘱託)
調査補助員 田中裕介(岡山大学大学院生)、吉田寛・高下洋一・柏本秋生(以上山口大学学生)、原田昭
一(同志社大学大学院生)、平島文博(別府大学OB)、杉本和子(京都府立大学学生)

昭和60年度

調査指導員 賀川光夫(別府大学教授・文化財保護審議会委員)、小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹・
文化財保護審議会委員)
大分県教育委員会
総括 藤井義美(教育長)、岡部直人(管理部長)、高塚至(文化課課長)、塔鼻勝人(同主幹兼課長補佐)
庶務 阿部正博(文化課主幹兼庶務係長)
伊藤正行(同主査)、岩坂邦子(同主任)
調査主任 後藤宗俊(文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)
調査員 清水宗昭(同主査)、村上久和(同主任)、西哲弘(同主事)、江田豊(同主事)、友岡信彦(同嘱託)

上記関係者のほか任孝宰(ソウル大学副教授)、近藤義郎(岡山大学教授)、横山浩一(九州大学教授)、郷澄元、
申敬徹(釜山大学)、佐田茂(東海大学委嘱助教授)、池上悟(立正大学専任講師)、八賀晋(京都国立博物館)、
春成秀彌(国立歴史民俗博物館)、石野博信、今尾文昭(奈良県立橿原考古学研究所)、高倉洋彰(九州歴史資料館)、
武末純一(北九州市立歴史博物館)、足立克己(八雲立つ風土記の丘資料館)、河原純之、伊藤稔(文化庁)、
佐原眞、西弘海(奈良国立文化財研究所)、広瀬和雄(大阪府埋蔵文化財センター)、長嶺正秀、草場敬一(行橋
市下樽田遺跡調査会)、小倉正五(宇佐市教育委員会)、田代健二(竹田市教育委員会)、甲斐忠彦、真野和夫、
岩本仁蔵、山田拓伸、宮内克己、段上達雄(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館)の諸氏には現地指導およ
び有益な御助言をいただいた。(渋谷忠章)

II. 調査の概要

1. 遺跡の立地と歴史的環境

周防護に面する豊前平野は、主として山国川、駅館川の堆積作用によって形成された洪積世の低位台地と沖積平野で構成されている。上ノ原遺跡群は、この豊前平野の東部（中津平野）に位置し、山国川を眼下に見おろす海拔30m余を測る洪積世台地上（通称、下毛原丘陵）に立地する。

山国川流域沿には極めて濃密な遺跡の分布がみられるが、特に本遺跡を含む山国川下流域における密集度には著しいものがある。時代別には原始から古代、中世全般にわたっており、従来、群集墳（主体部は横穴式石室・横穴墓）が目立っていたが、近年調査例が多くなるにつれ、そのほかの時代または時代の複合した遺跡が多く知られるようになってきている。遺跡の性格としては、河岸段丘あるいは自然堤防上に住居跡等の生活遺跡、丘陵上に墳墓が多い傾向が認められる。

本遺跡周辺の歴史的環境を概観すると（第1・2図）、まず旧石器時代では、今のところ大平村池田池遺跡、三光村コマツメ遺跡、中津市洞ノ上遺跡、大池南遺跡などと上ノ原遺跡で石器が出土している。石器石材は姫高産安山岩、大野川流域産ホルンフェルス、腰岳産黒曜石、針尾烏産黒曜石とバラエティに富んでいるのが特徴である。しかも遺跡は小規模なものが多く、製品供給地としての特徴を示していると考えられる。縄文時代になると、早・前期に本那馬浜町粉洞穴、豊前市古木遺跡、中津市勘助野地遺跡、黒水遺跡などが知られ、そのうち粉洞穴では早・前期の縄文人骨が良好な状態で、勘助野地、黒水の両遺跡では陥穴がそれぞれ発見されている。中期の様相は今のところ不明であるが、後期においては大平村原井三ッ江遺跡、梶屋遺跡、下岸原遺跡、新吉富村垂水遺跡、三光村佐知遺跡、諫山遺跡、中津市上万田遺跡、高瀬遺跡、高畑遺跡、ボウガキ遺跡、榎野貝塚など特に鐘ヶ崎式期を中心とした時期に遺跡は増大するようである。なお、遺跡と高畑遺跡においては三万田式一御領式の土器とともに土偶が発見されている。晩期になっても大平村川下遺跡、新吉富村矢頭田遺跡、中津市上万田遺跡、高瀬遺跡などに引き続いて集落を形成している。これらの遺跡から刻目土文土器とともに扁平打製石器の出土はあるが、大形琢磨製石器は認められず、晩期水田農耕は現在までのところ認められない。しかしながら豊前平野における初期農耕文化を考えるうえでこの地域は最も重要なフィールドの一つである。弥生時代になると前期末～中期初頭にかけての遺跡としては大平村重古遺跡、新吉富村中桑野遺跡、垂水遺跡、三光村佐知遺跡、本上ノ原遺跡、諫山遺跡、中津市高瀬遺跡、森山遺跡などがあり遺跡の立地に下流域の自然堤防上の低地と丘陵部上との二相に分けられる。中期においても同様な傾向がうかがわれる一方沖代小学校校庭遺跡では水田に伴う水路跡が発見されており低湿地部の開発が行われている。後期終末期では大平村川の遺跡、三光村諫山遺跡、中津市上万田・高瀬遺跡などがあるが、土器の散布範囲が広く集落が集中し大規模化していくようである。埋葬遺構は中期では森山遺跡、後期～終末期（一部古墳時代初頭）では上万田遺跡が調査され、主体部としては土壌墓、石蓋土壌墓、木棺墓が主で一部小児用甕棺墓が認められる。しかしながら箱式石蓋墓は現在までのところ終末期～古墳時代初頭に採用される。なお、青銅器は佐知遺跡において細形銅剣の切先が、大平村東下遺跡で中広銅矛が、上万田遺跡において小型仿製鏡が出土している。

古墳時代になると中津平野には前期の大型古墳はほとんど存在しない。これは、九州最古級の前方後円墳である石塚山古墳や赤塚古墳の所在する京都・行橋地域、宇佐地域に比べると対称的なことである。このなかで唯一中津市池水にあった亀山古墳は全長70m前後の前方後円墳といわれるが、昭和38年の国道建設時に破壊消滅し実態は不明である。前期の中・小規模墳には吉富町楡生古墳（主体部竪穴式石室で円筒埴輪出土）と当横穴墓群と同・丘陵上に勘助野地1～3号墳、幣旗部1～2号墳などがある。後期になると大規模古墳こそないが中小の群集墳は多数出現する。地域的にみると、山国川西岸（福岡県側）では穴ヶ葉山古墳群、上ノ熊古墳群、巨石塚古墳を中心とする横穴式石室墳と百留横穴墓群に代表される横穴墓群が混在し、石塚墳は200余基、横穴墓は100余基が丘陵部一帯を埋めつくすかのように分布する。この地域の墳墓の特色は穴ヶ葉山1号墳、山田1号墳に見られるように木ノ葉文・水鳥・人物などを甕壁に線刻するもの百留横穴墓群に見られるように赤色顔料で円文・木



- | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|
| 1 洗見池遺跡(縄文) | 8 梶尾遺跡(縄文-古墳) | 15 森山遺跡(弥生) | 22 中桑野遺跡(弥生-奈良) | 29 高畑遺跡(縄文-古墳) |
| 2 コマノツノ遺跡(旧石器) | 9 池田池遺跡(旧石器) | 16 ボウガキ遺跡(縄文) | 23 垂水庵寺(奈良) | 30 皇后石遺跡(古墳) |
| 3 原井遺跡(縄文) | 10 重吉遺跡(弥生-古墳) | 17 川上遺跡(弥生-古墳) | 24 友枝瓦葺(奈良) | 31 佐知遺跡(縄文-中世) |
| 4 白木遺跡(縄文-古墳) | 11 上ノ原横穴墓群 | 18 川下遺跡(縄文) | 25 山田麻跡(古墳-奈良) | |
| 5 岡崎遺跡(縄文-古墳) | 12 熊水遺跡(縄文) | 19 相原庵寺(奈良) | 26 八瀬田遺跡(縄文) | |
| 6 塔ノ熊野寺(奈良) | 13 大坪遺跡(古墳) | 20 上万田遺跡(縄文-中世) | 27 沖代小学校校庭遺跡(弥生) | |
| 7 瀧山遺跡(縄文-中世) | 14 種多田遺跡(縄文-古墳) | 21 高瀬遺跡(縄文-中世) | 28 金子遺跡(弥生-古墳) | |

第1図 山国川下流域遺跡分布図

ノ葉文などを描いた装飾古墳が見られることである。山国川東側では相原古墳群、臼木古墳群などの横穴式石室墳と当横穴墓群、城横穴墓群などの横穴墓があるが圧倒的に横穴墓が多いことが特徴である。集落跡は弥生時代以来自然堤防あるいは河岸段丘上にあり大平村柵屋遺跡、重吉遺跡、下唐原遺跡、三光村佐知遺跡、中津市上万田遺跡、高瀬遺跡、高畑遺跡などがある。このうち佐知遺跡では、5世紀末の須恵器を伴する竪穴住居跡が検出されており、当横穴墓群の被葬者の集落の一つとすることができよう。生産遺跡としては、須恵器窯跡が新吉富村山田窯跡群、中津市伊藤田窯跡群がある。現在までのところ尚窯跡とも6世紀後半までさかのぼり9世紀前後まで採窯されている。

奈良・平安時代に入ると、この地域には九州島内でも古い時期に属する寺院、火葬墓が出現する。

寺院では、新吉富村垂水庵寺、三光村塔ノ熊庵寺、中津市相原庵寺がある。三寺院ともに百濟系・新羅系等の朝鮮系瓦が出土しているのが特徴である。火葬墓は大平村東下火葬墓群、当横穴墓群の斜面上にある勘助野地火葬墓群などがある。寺院は7世紀末頃、火葬墓は8世紀後半に出現する。また、文献史料では、正倉院文書の大宝二年戸籍残簡に、大平村唐原付近と推定される「上三毛郡塔里」のものがあり、その戸籍中に渡来系氏族として捉えられるものがある。

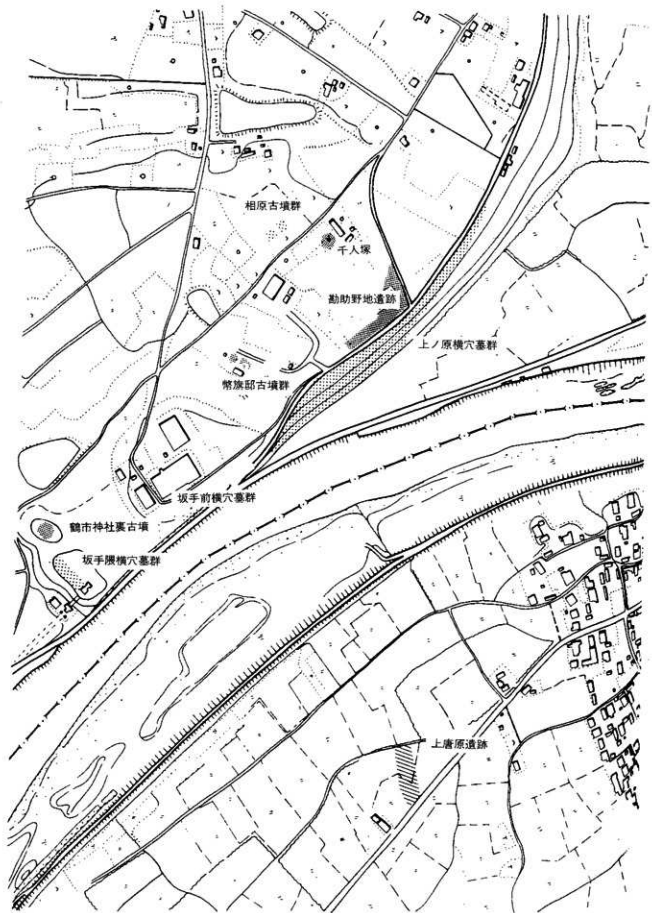
以上、山国川下流域周辺の先史—古代遺跡を概観してきたが、この地域は古墳時代後期以降にめざましい発展をとげ、奈良時代には豊前地域でも先進的な地域の一つとなる。これは少なくとも文献上にあらわれる渡来系氏族との関係によるものと考えられる。(村上久和)

- | | |
|---|---|
| 註1 三光村誌刊行会『三光村誌』1988 | 註19 新吉富村教育委員会『中桑野遺跡』1976 |
| 註2 中津市教育委員会『洞ノ上遺跡群Ⅰ』1988 | 註20 新吉富村教育委員会『垂水庵寺』1976 |
| 註3 別府大学考古学研究室「大分県份洞穴発掘調査概報」
〔考古学論叢4Ⅰ〕1977 | 註21 大分県教育委員会『森山遺跡調査概報』1988 |
| 註4 福岡県文化課、小池史哲氏より御教示 | 註22 1983年中津市教育委員会調査 |
| 註5 大分県教育委員会「勘助野地遺跡」
〔中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ〕1988 | 註23 註11に同じ |
| 註6 大分県教育委員会「黒水遺跡」〔同上〕1988 | 註24 大平村誌編集委員会『大平村誌』1987 |
| 註7 1987年福岡県文化課調査 | 註25 発掘調査に参加した近秋敏氏（当時、中津市高郷土部員）より御教示 |
| 註8 福岡県文化財調査員、宮本正氏より御教示 | 註26 註14に同じ。なお、渡辺重名の『豊前志』（1899）
には、この古墳は茶臼塚とある。 |
| 註9 1987年福岡県文化課調査 | 註27 九州古文化研究会「岡爲造考古資料集成」
〔古文化談叢11Ⅰ〕1982 |
| 註10 九州古文化研究会「福岡県築上郡垂水遺跡調査報告」
〔古文化談叢11Ⅰ〕1982 | 註28 註5に同じ |
| 註11 1988年大分県文化課調査、坂本富弘氏より御教示 | 註29 中津市教育委員会『幣旗部古墳』1984 |
| 註12 註1に同じ | 註30 大平村教育委員会『穴ヶ葉山古墳群』1985 |
| 註13 中津市教育委員会『上万田遺跡』1970 | 註31 大平村教育委員会『上ノ熊古墳群』1977 |
| 註14 中津市史刊行会『中津市史』1965 | 註32 註11に同じ |
| 註15 1980年中津市教育委員会調査 | 註33 註20に同じ |
| 註16 註14に同じ | 註34 中津市教育委員会『城山窯跡』1985 |
| 註17 九州考古学会「山国川下流域の縄文晩期遺跡」
〔九州考古学59Ⅰ〕1984 | 註35 三光村教育委員会『三光村の遺跡』1988 |
| 註18 同上 | 註36 福岡県教育委員会「九州の火葬墓」
〔九州縦貫自動車道発掘調査報告Ⅰ〕1976 |

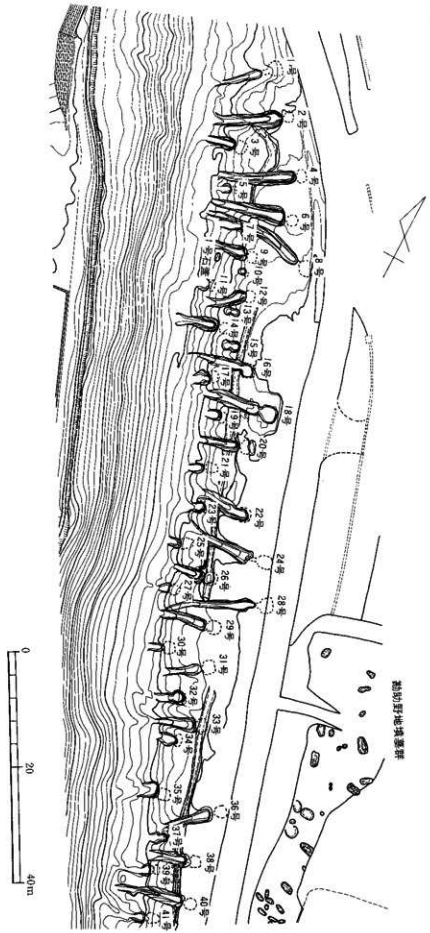


- | | | | | | |
|-------------|--------------|------------|------------|------------|------------|
| 1 黒川古墳 | 16 庵ノ尾横穴墓群 | 31 生山古墳 | 46 桑野古墳 | 61 小山田1号墳 | 76 四ツ塚山2号墳 |
| 2 城山古墳 | 17 野崎横穴墓群 | 32 藤塚山古墳 | 47 宇野古墳 | 62 小山田2号墳 | 77 石室横穴墓群 |
| 3 洞ノ上横穴墓群 | 18 平原横穴墓群 | 33 大熊原古墳 | 48 若木山2号墳 | 63 新池西古墳 | 78 城の百木古墳 |
| 4 三ツ塚1号墳 | 19 神出横穴墓群 | 34 大熊原1号墳 | 49 若木山1号墳 | 64 新池南古墳 | 79 白木古墳 |
| 5 三ツ塚2号墳 | 20 坂手前横穴墓群 | 35 日熊山2号墳 | 50 山田村1号墳 | 65 穴ヶノキ古墳 | 80 佐知古墳 |
| 6 三ツ塚3号墳 | 21 船手神社横穴墓群 | 36 日熊山1号墳 | 51 山田村2号墳 | 66 カケノ山古墳 | 81 佐古墳 |
| 7 天神原横穴墓群 | 22 坂手限横穴墓群 | 37 浅熊原古墳 | 52 寺塚古墳 | 67 鳴向山古墳 | 82 上唐原古墳 |
| 8 野辺田横穴墓群 | 23 相原1号墳 | 38 浅熊原古墳 | 53 鬼塚古墳 | 68 鳴向山2号墳 | 83 上高瀬古墳 |
| 9 野辺田横穴墓群 | 24 相原2号墳 | 39 向山古墳 | 54 徳並井横穴墓群 | 69 向原2号墳 | 84 高瀬古墳 |
| 10 倉迫二ツ塚1号墳 | 25 坂手の隈古墳群 | 40 桑野古墳群 | 55 徳並井横穴墓群 | 70 新谷古墳 | 85 高瀬古墳 |
| 11 倉迫二ツ塚2号墳 | 26 帯原部(孤塚)古墳 | 41 能満寺横穴墓群 | 56 カネツカ古墳群 | 71 新谷古墳 | 86 ガラメノ古墳 |
| 12 大平横穴墓群 | 27 上ノ原横穴墓群 | 42 能満寺古墳群 | 57 上ノ熊古墳群 | 72 丸無古墳 | |
| 13 洗原横穴墓群 | 28 廣連寺古墳 | 43 能満寺古墳群 | 58 上ノ熊古墳群 | 73 平山1号墳 | |
| 14 森山横穴墓群 | 29 天仲寺古墳 | 44 下池古墳群 | 59 上原横穴墓群 | 74 平山2号墳 | |
| 15 亀山古墳 | 30 鈴熊山古墳 | 45 小 | | 75 四ツ塚山1号墳 | |

第2図 山国川下流域古墳時代遺跡分布図 (国土地理院50,000の1使用)



第3図 上ノ原横穴墓群周辺古墳分布図



第4図 上ノ原儀穴墓群分布図 (本報告掲載分)

2. 調査の方針及び方法

1) 発掘調査の方針と方法

上ノ原横穴墓群の調査にあたって我々は次のような調査方針で発掘調査を進めることにした。

1. 本横穴墓群から得られる考古学的情報をもれなく収集し、活用することにつとめる。例えば、全般に横穴墓の保存状態が良いことから横穴墓築造と葬送および祭祀儀礼に関する諸事実を最大限把握する。特に玄室、墓道内はほとんど荒されてないので、墓道内埋土や閉塞施設各所における遺物出土状態などの観察から追葬の回数や送葬儀礼の形態を復元する。

2. 玄室内に埋葬人骨が遺存する場合は埋葬順位および年齢性別を明らかにした上で周辺の副葬品との帰属関係を把握し、被葬者の性格を検討する。また、埋葬された人骨の形質的特徴（たとえば、渡来人的かどうか）と複数埋葬時における個々の関係を明らかにし、本横穴墓群の被葬者の集団構成と社会的政治的性格を検討する。

3. 横穴墓周辺においても関連する遺構の検出に努め、そこで行われた種々の造墓活動および葬送儀礼などの復元を通じて本横穴墓群を経営する集団の歴史的動態の具体相を探る。

以上困難とも思える課題であったが、次のような調査（遺物整理も含む）方法と作業で取り組んだ。

(1) 竹並横穴墓群の調査以来確認されるようになった横穴墓斜面上の墳丘等の有無を確認する。また墳丘の土層観察は横穴墓の構築とどう関係するかを検討しながら進める。

(2) 墳丘、閉塞施設および墓道内埋土は連続的に捉え、特に墓道埋土の腐植土層不整合面の観察と把握を行う。

(3) 横穴墓およびその周辺から出土した遺物は全て出土地点、出土状態、出土層位を記録し、その帰属と性格を検討する。特に横穴墓相互の遺物の接合関係を明らかにして個々の横穴墓の関係を探る。また、個体識別を通じて横穴墓に関する一回の祭祀行為で使用された器種を明らかにするとともにその処理行為の復元を通じて葬送儀礼の復元をはかる。

(4) 埋葬人骨に関しては九州大学医学部第二解剖学教室に取り上げ、鑑定等を依頼した。前述の調査方針の解決のために現地調査を行った田中・土屋岡助手と吉留・村上是真摯な討議を行い問題意識を深めていった。

2) 横穴墓番号の変更と各部の名称

上ノ原横穴墓群の調査は買取等の関係上北支那北側中程より開始した。横穴墓は保存状態が非常に良かった為表面での確認はできなかったため調査順に仮Noを付け遺物等の取り上げを行った。その為にランダムな番号となっていた。今回報告にあたり横穴墓群の北端部を検出したので改めて北側から南に向けて通し番号をつけた。旧Noとの対称は第1表のとおりである。

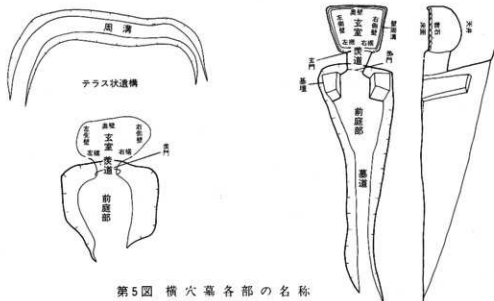
なお、横穴墓各部の名称および本報告で使用する土器表現は第5～7図に示した。（村上久和・吉留秀敏）

3) 土器観察の説明

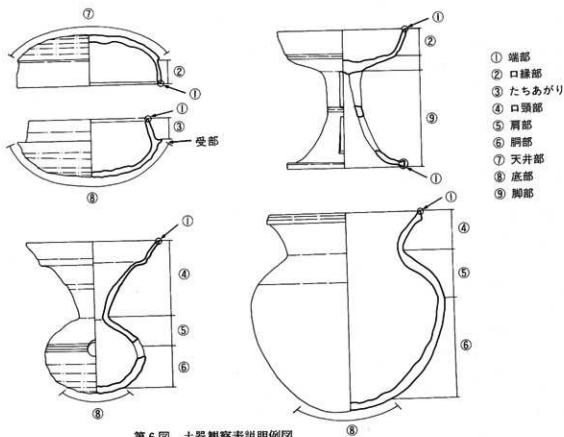
当該報告書における土器観察表の各部位についての説明は、第6図のように定めた。①の端部とは、口縁部、受部、脚部等の先端をさす。②の口縁部とは、坏蓋、高坏、堀を説明する場合に用いたものである。③のたちあがりとは、主として坯身を説明する場合に用いたものである。④の口頸部とは、本来口縁部と頸部に分かれるものを一括して、壺、壺等を説明する場合に用いたものである。（清原史代）

新No	仮No	新No	仮No	新No	仮No	新No	仮No	新No	仮No	新No	仮No
1	23	16	4	31	38	46	32	61	59	76	74
2	22	17	3b	32	51	47	27	62	60	77	75
3	12	18	3a	33	39	48	31	63	61	78	72
4	11	19	2	34	50	49	26	64	62	79	76
5	19	20	1	35	40	50	30	65	63	80	77
6	10	21	18	36	41	51	25	66	69	81	80
7	9a	22	13	37	42	52	28	67	64		
8	9b	23	15b	38	43	53	29	68	65		
9	17	24	15a	39	44	54	53	69	66		
10	8	25	20	40	45	55	54	70	67		
11	24	26	14	41	52	56	55	71	68		
12	7	27	34	42	46	57	56	72	79		
13	6	28	35	43	47	58	73	73	70		
14	16	29	36	44	48	59	57	74	71		
15	5	30	37	45	49	60	58	75	78		

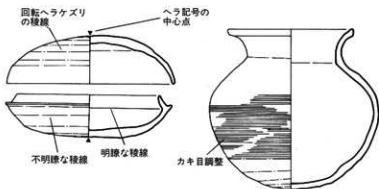
第1表 新・仮横穴墓番号対照表



第5図 横穴墓各部の名称



第6図 土器観察表説明例図



第7図 土器調整例図

3. 本報告における古墳時代後期土器の編年

上ノ原横穴墓群の時期決定には当横穴墓から出土した土器が最も有効である。土器は須恵器が主体でそれに若干の土師器も認められる。今回は須恵器を主体に編年を組み立てるがセット関係を含めた詳細な検討は次編で行う予定であり、ここでは坏壺身のみで概要を記し横穴墓築造の一応の目安とした。

豊前地域における須恵器の編年的研究は小田富士雄氏によって体系的に行われており基本的大綱となっている。また村上竹並横穴墓群の報告において5世紀後半から7世紀末までの須恵器・土師器の編年をまとめた。その後AD 600年前後の須恵器について絶対年代の優位な畿内編年と対比しつつ、吉田・村上によって中津市伊藤田窯跡群出土須恵器について検討を行い、竹並編年を若干改め今日に至っている。

本報告では基本的には上記の編年に対応させるとともに須恵器坏壺身における時間的屬性変化を検討し、さらに九州小田編年および畿内田辺・中村編年とも対応させて見る。

I 段階 坏壺は口径12.5～13cmで天井部は比較的平らなものや丸味を持つものがある。天井部と体部との境の稜は明瞭である。口縁端部は内側に傾斜した凹面をもつ。

坏身は口径11cm前後で立ち上がりは内傾したものが多く、小敷ではあるが垂直に立ち上がるものもある。口縁端部は蓋同様である。体部から底部は丸くつくりられているものが多いが、扁平に仕上げるものも小敷認められる。

以上の特徴からI段階は小田編年I期Bに田辺編年TK 208新からTK 23段階に位置づけられよう。

II 段階 II段階坏壺は口径11cm前後と最小になり天井部は丸味を持つ。天井部と体部との境は明瞭であるが、稜はにぶくなり下端は沈線をめぐらす。口縁端部は内側に傾斜した段状をなす。坏身は口径9.5～10cmで立ち上がりは若干短くなり内傾する。口縁端部は蓋同様である。体部から底部は丸くつくりられ境は区別できない。

以上の特徴からII段階は小田編年I期Bに田辺編年TK 47段階に位置づけられよう。

III 段階 III段階はa・bの2小期に分けられる。III a段階の坏壺は口径12～

上ノ原	九州	畿内	図		
I 段階	小田I期B	田辺TK208 新-TK23			
		中村I-3 4			
22号					
II 段階	小田I期B	田辺TK47			
		中村I-5			
66号					
III 段階	a	田辺MT15			
		中村II-1			
	41号				
	b	田辺TK10			
中村II-2					
62号					
IV 段階	a	小田II-3B			
		村上・吉田 山形3号東部	田辺TK43		
	2号				
	b	小田II-4A	田辺TK209		
村上・吉田 山形1号東部		中村II-4			
67号					
V 段階	小田II-4A	田辺TK217 古			
60号					

第8図 上ノ原横穴墓群坏壺・身編年表

13cmとやや大型となる。天井部は丸味を持ち、天井部と体部との境は沈線で区画するが若干稜を持つものもある。口縁端部が強く外反し内面は段状の面を持つがシャープさに欠けるようになる。坏身は口径10~11cm前後で立ち上がりは1.3cmで内傾し、口縁端部はにぶい段状をなしているがほとんど痕跡程度である。

Ⅲb段階の坏蓋は口径13~14cm前後の大型のものである。天井部は丸味を持ち天井部と体部との境は沈線で区画する。口縁端部は段状の面を持つがシャープさに欠ける。坏身は口径13.5cm前後で立ち上がりは1.3cmで内傾し、口縁端部は丸くおさめる。

以上の特徴からⅢa段階は小田編年Ⅱ期、田辺編年MT15段階に、Ⅲb期は小田編年Ⅱ-3A期、田辺編年TK10段階にそれぞれ位置づけられよう。なおこのa・bの2小期は一括資料として混在する場合は当横穴墓例では多い。

Ⅳ段階 Ⅳ期もa・bの2小期に分けられる。Ⅳa段階の坏蓋は口径12.5~14cm前後と大型になる。天井部は丸味を持ち、基本的には天井部と体部との境はなくなり湾曲しながら口縁部へのびるものが主体であるが、少量浅い沈線で天井部と体部を区画するものも残る。口縁端部は丸くおさめるのを特徴とするが内側に沈線を施すものも若干ある。坏身は口径13cm前後のものを主体とし、立ち上がりは1cm前後で強く内傾し、口縁端部を丸くおさめている。坏蓋身とも浅くなるのを特徴とする。Ⅳb段階の坏蓋は口径12.5~14cm前後で天井は丸味を持ち、天井部と体部との境はなくなり湾曲しながら口縁部へのびる。口縁部は内側へ屈曲し端部を丸くおさめる。杯身は口径12~13cm前後のもので立ち上がりは0.5~1cmと短く内傾し、口縁端部を丸くおさめる。

以上の特徴からⅣa段階は小田編年Ⅱ-3B期、田辺編年TK43段階に位置づけられ、村上・吉田編年山田3号竈並行期に、Ⅳb段階は小田編年Ⅲ-4A古期、田辺編年TK209段階に位置づけられ、村上・吉田編年瓦ヶ追竈並行期に相当する。

V段階 坏蓋は口径12~13cmとⅣ段階のものに比べ若干小型化する。天井部はやや扁平となり天井部と体部との境は全くなくなり湾曲しながら口縁部へのびる。口縁部は内側へ屈曲し端部を丸くおさめる。この時期の最大の特徴は頂部のヘラ切り離し技法の出現である。坏身は口径10.5~12.5cmで、立ち上がりは0.3cm~0.8cm前後に短く内傾し口縁端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り離し技法のものが認められ、やや扁平なものが出現する。

以上の特徴からV段階は小田編年Ⅱ-4A新期、田辺編年TK217古段階に、村上・吉田編年草場竈並行期に相当する。

最後に実年代の比定について触れておきたい。須恵器の実年代については、埼玉県稲荷山古墳、千葉県稲荷山古墳、兵庫県箕谷古墳などで在銘太刀と共存する須恵器が発見されており、実年代の定点となりつつある。このうち稲荷山古墳については、都出比呂志氏は鉄剣銘の辛亥年をAD471年として出土須恵器をTK47型並行期としている。この年代観についてはほぼ肯定されるものと考えられ、上ノ原Ⅱ段階を5世紀末頃と比定しうる。またⅢa段階のものは、528年に誅せられた筑紫国造磐井墓に比定される岩戸山古墳出土須恵器並行期と想定されるが、この土器は若干時期幅もあると考えられ今後の検討が待たれる。Ⅳb段階とした土器は奈良県牧野古墳とほぼ同一の器種構成をなしこの段階をAD600年前後に比定しうるものとする。(村上久和)

註1 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集2・日本古代』1979
。『須恵器の源流—九州』『日本陶磁の源流』1984

註2 村上久和「竹並横穴墓出土の須恵器」『竹並遺跡』1979

註3 村上・吉田寛・宮本工「壱前における初期瓦の—様相」古代化談叢 1987

なお、大分県文化課小林昭彦、高橋徹氏によって同一の竈資料を使用して編年を組み立てている。山田3号竈と瓦ヶ追1号竈を同一期としているが、口径、坏蓋の口縁内面の処理法、同口縁部の処理法、坏身立ち上りの高さで違いが認められ、瓦ヶ追1号竈が新出のものとする。

註4 都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4 1982

註5 小林、高橋「考古学における個体識別法」第64回古文化研究会発表要旨 1988

註6 河上邦彦「史跡 牧野古墳」1987

Ⅲ. 上ノ原横穴墓群の調査

1号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

1号横穴墓は北支群の北端に位置し、ほぼ南西方向に開口する横穴墓である。この横穴墓より北側は斜面カーブが西方向に変化することと地質が軟弱になることの二つの要素で横穴墓の築造は認められない。当横穴墓が上ノ原横穴墓群の北端のものである。斜面の上方、標高30.5m付近に設けられている。全長は12.14mを測り、主軸をN-26.5°-Eにとる。保存状態は10数年前の造成によって天井付近は大きく土砂採掘が行われていた。なお、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設、玄室内の調査等を行った。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長8.24m、幅は入口で上部幅1.5m、羨門部で上部幅2.1m、底面幅1.70mを測る。側壁高は羨門部で約1.5mを測る。墓道床面は若干凹凸を持ちながらも約5°のゆるやかな傾斜で羨門に向って上る。なお、墓道入口から約6.5m羨門方向へ進んだ位置までは墓道幅が狭く、その後羨門まで広がり逆台形状を呈し、いわゆる前庭部をつくる。この部分の中央には玄室からの排水溝が約1.15m掘られており、その溝の端部付近が床面上で約10cmのゆるい段となっている。排水溝には人頭大の河原円礫を4個蓋石として使用している。墓道の最奥部は70°前後の傾斜とほぼ直角に接している。側壁の傾斜は65~70°で立ち上がる。羨門→玄室にかけての天井部は掘削により崩壊が激しく旧状を大きく損っており羨門高は復元できない。幅は0.73mを測る。

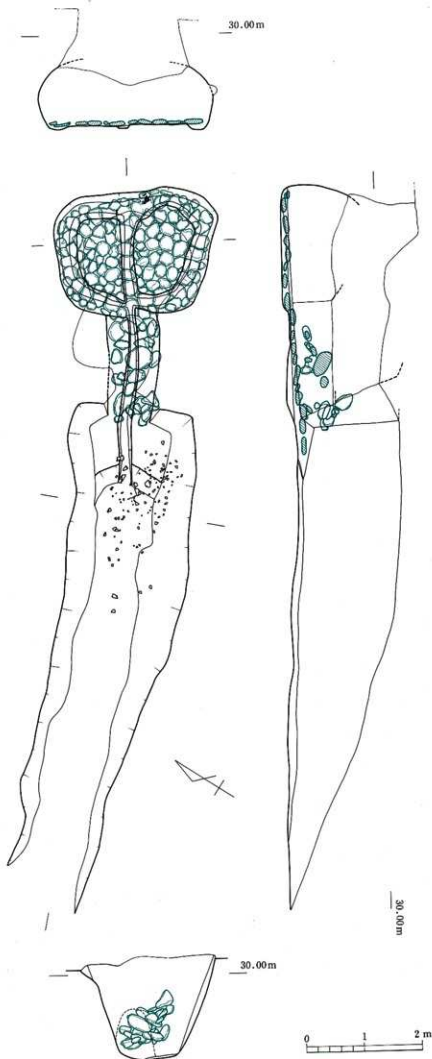
閉塞施設は天井部崩壊時に破壊された可能性が高く旧状を留めていない。現状では人頭大よりやや大型の河原円礫を積み上げて閉塞部としているが、その構築過程は不明である。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で3層群9層に分層できた。以下堆積順に説明する。

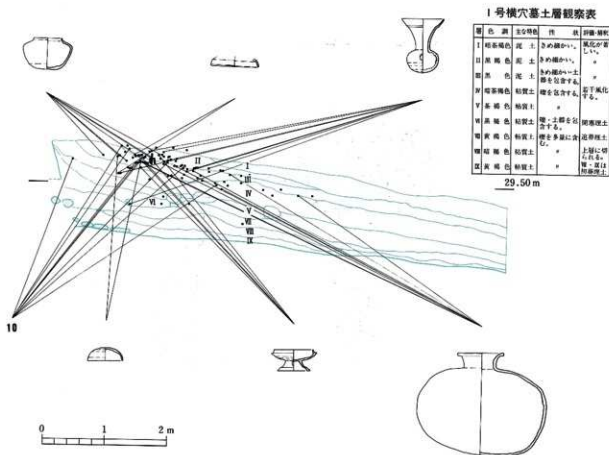
第1層群(Ⅷ~Ⅸ層)は、閉塞石下面から墓道先端付近まではほぼ水平に最も深い所で40cm堆積している。本層群はさらに2層に分層される。下層は基盤層の2次堆積土で溝の蓋石を覆う。上層は閉塞石下面から0.5m墓道先端によった所から約4m程レンズ状に堆積しており、性状は下層と変わらないが風化が進んでいる。下層とは漸移的な変化しか認められない。本層群は初葬時の埋土と考えられる。遺物等は認められない。

第2層群(Ⅵ~Ⅶ層)は、閉塞石上面から墓道先端付近まで約15°の傾斜で堆積している。最も深い所で40cm前後を測る。本層群もさらに2層に分層される。下層は基盤層の2次堆積土で下位層とは明瞭に区分できる。上層はクロボク質の風化土層で下層とは漸移的に変化する。本層群は第1次追葬時の埋土と考えられる。遺物は下層下面に須恵器数片、上層下面→上面に須恵器片がそれぞれ破砕散布された状態で検出された。上層の風化土層の遺物は第3層群の遺物群と接合する。

第3層群(Ⅰ~Ⅴ層)は、羨門壁上端から墓道先端付近まで約15°の傾斜で堆積している。最も深い所で70cmを測る。本層群はさらに5層に細分され下位から(1)基盤層の2次堆積層、(2)性状は(1)と同様であるが風化が若干進んだ層、(3)クロボク質の腐植土層、(4)やや基盤土を含む腐植土層、(5)クロボク質の腐植土層の順にそれぞれレンズ状に堆積している。遺物は(3)層から(4)層内に須恵器の破砕散布が集中して認められた。一部(1)層上面にも同様な須恵器片が認められた。これらの遺物は2層群上層の遺物群と接合が認められ、これらの層群は直接的には埋葬に関わる層群とは考えられず、埋葬後の墓前祭祀に関わるものとする。以上の観察結果から、本横穴墓は2回の埋葬とその後の墓前祭祀に関わる行為が認められた。なお第3層群中の遺物が隣接する2号



第9圖 1号横穴墓平·断面図



第10図 1号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

横穴墓の第4層群中の須器長頸壺と接合しており、隣接する横穴墓で共同の墓前祭祀が行われたことが判明した。

2) 羨道、玄室

羨道は長さ1.8m、羨門、玄門幅はほぼ同規模で0.75mを測り、羨道が長いことが特徴である。玄室は長さ2.1m、裾部幅2.0m奥壁幅2.85mを測る平入り隅丸逆台形状を呈し、床面には幅約20~30cm、深さ5~10cmの排水溝が周壁および中央に設けられ、中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行っている。天井はドーム形を呈すと推定され、床面からの高さは中央付近で1.2m前後と考えられる。

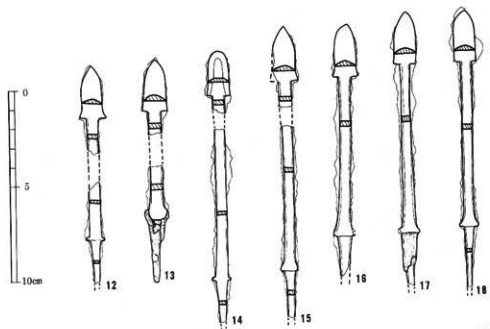
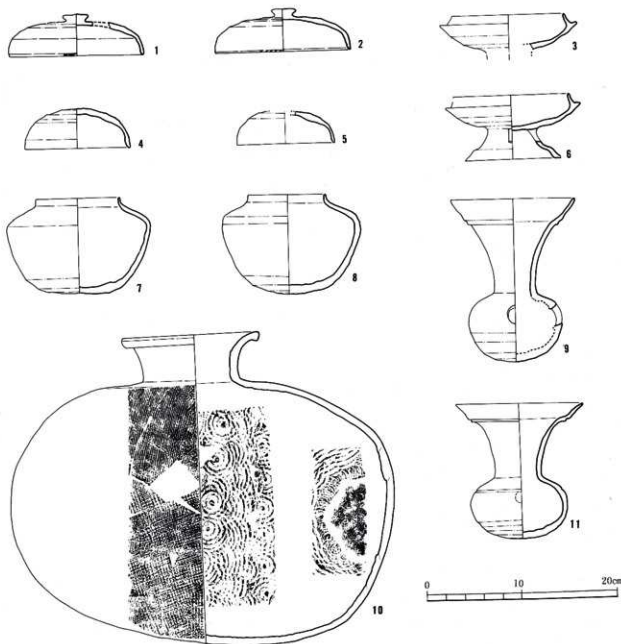
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には多量の土砂が流入していたが清掃後奥壁周辺に鉄器類が検出された。玄室中央奥壁ぎわに奥壁に平行して先端を右側壁方向に向けて鉄線群が、それより30cm左側の敷石下で鉄線2本をそれぞれ検出した。敷石下の鉄線は1本は敷石間より落ちたと考えられるが、中央溝より出土のものは溝の最下面より出土しており敷石を置く以前に埋置したものと考えられる。

2) 墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。遺物は、墓道内全体に散漫ではあるが破砕散布されていた。いずれも小片になっておりかろうじて形態の分かるのは匙(第11図9)のみである。(村上久和)



第11图 1号横穴墓出土遗物实测图

第2表 1号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・14.8 ・2.5+ ϕ ・一	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸く、内面はわずかに段をなす。	回転ナデ	回転ナデ カキ目状工具による文様を口縁外面に施す	青灰色	石英、長石粒を含む	良好	反転復元 口縁部に削み目文	
2	坏蓋	・14 ・3.5+ ϕ ・一	口縁部はやや外反しながらのび、端部は段をなさない。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ カキ目状工具による文様を口縁外面に施す	青灰色	1-2mmの石英粒を含む	良好	口縁部に削み目文	
3	有蓋高坏	・11.7 ・3.8+ ϕ ・14.4	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はやや肥厚しながら水平にのび、端部は丸い。底部は浅い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	2mm前後の石英粒を含む	良好		
4	坏蓋	・11.1 ・4.2 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、内側はやや肥厚する。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	明青灰色	1-2mmの石英粒を含む	良好		
5	坏蓋	・10.4 ・3.5+ ϕ ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高くやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	1-2mmの石英粒を含む	良好		
6	有蓋高坏	・12.2 ・6.8 ・14.2	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部はやや肥厚しながら水平にのび、端部は丸い。底部は下方にのび、端部はさらに外反し平らな面をなす。長方形のスカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 茶褐色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
7	短頸壺	・8.8 ・10 ・15.1	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部最大径は上方にあり、底部は深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 灰黒色	石英、黒色砂粒をやや多量を含む	良好 堅緻	外面に重ね焼きの痕跡あり	
8	短頸壺	・8.2 ・10.4 ・14.5	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部最大径は上方にあり、底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英、長石粒等を含む	良好		
9	甕	・13.1 ・17 ・9.9	口頸部は外反しながらのび、端部付近で、さらに外反し、外面には沈線をなす。端部は丸い。胴部は、だ円形を呈し中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ヨコナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英粒を多量を含む	良好 堅緻		
10	横瓶	・13.4 ・14.3 ・10.2	口頸部は、外反しながらのび、端部付近でさらに外反し、外面には凹面をなす。胴部はだ円形を呈し、上方に一本の沈線あり。底部は丸みをおびる。穿孔部欠損。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色-黒灰色	石英、長石粒の微細粒を含む	良好	反転復元	

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
11	皿	・14.6 ・32.4 ・40.4	口頭部は外反しながらのび、胴部はやや肥厚し丸い。胴部は、だ円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ 同心円のク タキ	回転ナデ 胴部上半は タタキ状の 上にキキ目 調整 下半～右部 は平行タタ キ状	青灰色	石英、長石 粒を含む	良好		

第3表 1号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器 種	全 長	胴部長 (刀部)	刃 幅	胴 幅	刃部厚	胴 厚	備 考
12	鉄鏃	9.8以上	2.9	1.1	0.6	0.25	0.2	
13	同上	9.8以上	2.8	1.2	0.6	0.3	0.3	本質残存
14	同上	13.4以上	2.4	1.1	0.6	0.2	0.25	
15	同上	15.3以上	2.9	1.1	0.6	0.3	0.25	
16	同上	13.2以上	2.6	1.1	0.6	0.3	0.25	
17	同上	14.2以上	2.7	1.1	0.6	0.3	0.25	本質残存
18	同上	14.5以上	2.7	1.1	0.6	0.25	0.25	

2号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

2号横穴墓は北支群の北端部、1号横穴の南東5.5mの所に位置し、1号横穴墓同様南西方向に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高32.3m付近に設けられている。全長は13.61mを測り、主軸をN-43°-Eにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討（縦、横土層断面の作成）閉塞部、玄室内の調査等を行った。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長10.65m、幅は入口で上部幅1.5m、羨門部で上部幅3.5m、底面幅1.85mを測る。側壁高は羨門部で約1.54mを測る。墓道床面は凹凸を持ちながらも約10°のゆるやかな傾斜で羨門部に向って上る。なお、墓道入口から約8m羨門部方向へ寄った位置までは墓道幅が狭く、その後羨門まで広がる逆台形状を呈し、いわゆる前庭部をつくる。この部分の中央には玄室からの排水溝が約1.57m掘られており、その溝の端部付近が床面上で約5cmのゆるい段となっている。排水溝には人頭大の河原円礫を5個蓋石として使用している。羨門壁は70°前後の傾斜をもち、側壁とほぼ直角に接している。側壁は75°前後の傾斜で立ち上がる。羨門部分は天井部分が若干崩れているが、推定の羨門高は0.6m前後、幅0.82mを測る。

閉塞施設は最終埋葬時に取り壊されており、現状では人頭大の河原石が1個のみ残っている。最終埋葬時の木蓋等の根石と考えられる。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土層はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で6層群20層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群（Ⅰ層）は、閉塞石下面から墓道入口方向7m付近まではほぼ水平に15cm前後堆積している。墓道形成直後に床面に堆積した基盤層の二次堆積物である。上面は固く締っている。上層とは区分が明瞭である。

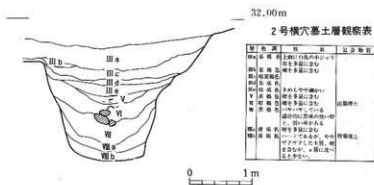
第2層群（Ⅱ層）は、羨門より入口方向へ0.8m行った所から入口付近まで堆積している。堆積状況は羨門付近は20°の傾斜で2.5m深さ50cm程積り、他はほぼ水平に深さ30cm程である。羨門付近は上層の閉塞埋土によって完全に削平される。本層はさらに上下2層に区分される。(1)下層は基盤層の二次堆積層である。上層とは漸移的变化をする。(2)上層は下層とほぼ性状は同じであるが風化が進んでおり軟質である。本層中に遺物B群（第15図4～8）が一括埋置された状態で検出された。本層群は第1次埋葬時の墓道内埋土および風化土と考えられる。

第3層群（Ⅲ層）は、羨門より墓道入口付近まで、ほぼ水平に深い所で50cm程堆積している。本層は7層に細分される。羨門付近の下位から(1)クロボク質の粘質土、(2)同じく基盤層を含むクロボク質の粘質土、(3)ほぼ1層と同様な層である。以上が最終埋葬時の閉塞埋土であり本層は旧表土の再利用と考えられる。(5)は羨門より2mの所から入口方向へ4.5mレンズ状に20cm平均堆積した基盤層の2次堆積土である。(6)は(5)層の風化土層で本層中に遺物群A群が配列埋置の状態で検出された。(7)は(5)・(6)層にはさまれた層であり若干風化の進んだ層である。本層群は最終埋葬時にかかる埋土および風化土と推定される。

第4層群（Ⅳ層）は羨門壁から墓道入口付近まではほぼ水平に深い所で50cm程堆積している。本層はさらに4層に細分される。下層より(1)は羨門壁から1.5mの所より入口方向へ約4m程レンズ状に堆積した基盤層の二次堆積土で本層上面に須恵器甕、同長頸壺の破砕散布が検出された。(2)は焼土混りの炭灰層で(1)層に密閉された状態で検出され上面に須恵器の破砕散布が集中して検出された。(3)は(1)層の風化土層でクロボク質であり本層中にも甕等の破砕散布が検出された。(4)は(3)層にはほぼ類似した層であるが、より風化の進んだ層であり本層中にも甕等の破砕散布が検出された。本層群は埋葬後の墓前祭にかかる墓道埋土とその風化土と推定される。なお、本層群中の遺物には当横穴墓の中で最も古式に属する須恵器片が検出されており墓道埋土が掘り返されている状況が確認できた。また本層中の甕片と4号横穴墓第3層群中の甕片が接合しており1・2・4号横穴墓において4号横



第12图 2号横穴墓平·断面图



第13図 2号横穴墓横断土層図

の略隅丸方形を呈し、床面には幅15~25cm、深さ5cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。周壁溝は部分的にとぎれているが、中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に拡げられるように行っている。なお、奥壁・左側壁部コーナー部分と中央右側壁ぎわに人頭大の河原石を1個積み重ねて石枕としている。天井は崩落が激しいがドーム形を呈すと推定され、床面からの高さは中央付近で1.1m前後と考えられる。玄室と羨道とは段で境界を設けていると推定される。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には若干の土砂が流入していたが、清掃後に土器片、鉄器類が検出された。まず玄室右側壁ぎわに土器片と刃先を奥壁方向に向けた鉄鏃群、10cm中央に寄った所で刃先を逆方向にした鉄鏃群、それより20cm裾部側で刃先を中央に向けた刀子、鉄鏃および馬具を、中央奥壁ぎわで刃先を羨道方向に向けた鉄鏃を、中央左側壁ぎわ石枕の左側で馬具を、右側壁の奥壁ぎわ石枕辺で刃先を側壁方向に向けた鉄鏃をそれぞれ検出した。

2) 墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状態について述べる。

墓道（前庭部）左側コーナー付近において遺物A群を検出した。A群は須恵器壺蓋・身3セット、同壺、刀子2個（第15図1~3・9・11）で構成され、配列厘置状態で検出された。まずコーナー付近に壺蓋身（上→身・下→蓋）を1個体置き斜め下方に隣接して壺蓋身（上→身・下→蓋）を1個体置き刀子を羨門方向に向け刀子を1本、その下方に若干のせるようにして壺蓋身（上→身・下→蓋）を1個体置きその上に刀子の刃先を側壁方向に向けてのせている。それより約10cm下方で壺が1個体正置した状態で検出された。

この遺物A群の約20cm下層で遺物B群を検出した。B群は須恵器壺蓋身の一括厘置状態で壺身5個体、壺蓋4個体（第15図4~8）が身は正置し蓋は内面を上にして重ね合わせている。

遺物C群は、墓道中央の羨門より1mから3.5mの所で幅0.3mの範囲で須恵器壺、長頸壺、甕、坏等が破砕散布状態で検出した。なお、須恵器壺の底部は墓道内では発見されなかった。（村上久和）

穴墓の埋葬時に同一の共同祭祀行為が行われたことを示している。

第5層群（II層）も基盤層の2次堆積土で上下2層に分けられる。下層は粘質で鏃を含まず、土層は鏃を多く含む層である。造成時の流入土と考えられよう。

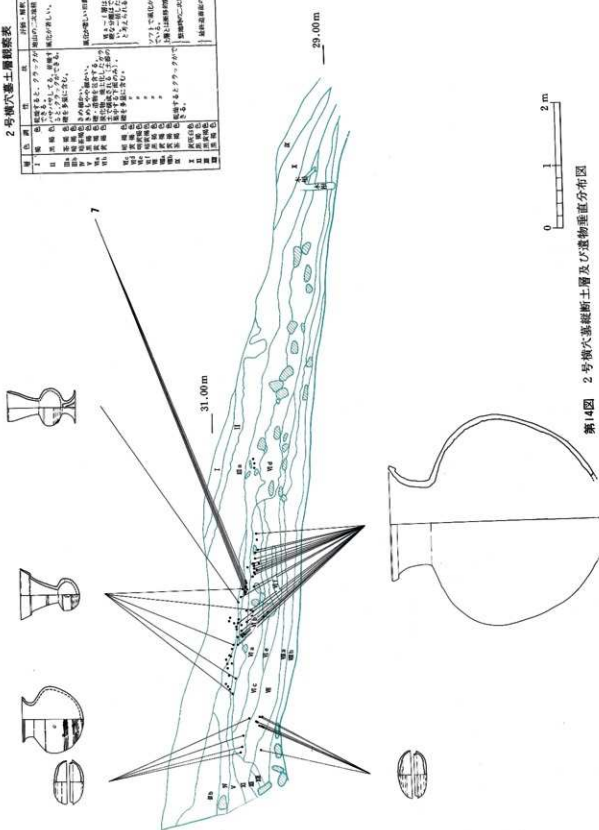
第6層群（I層）も基盤層の2次堆積土で上部に小砂利層を含んでいる。造成時の流入土と考えられる。

2) 羨道、玄室

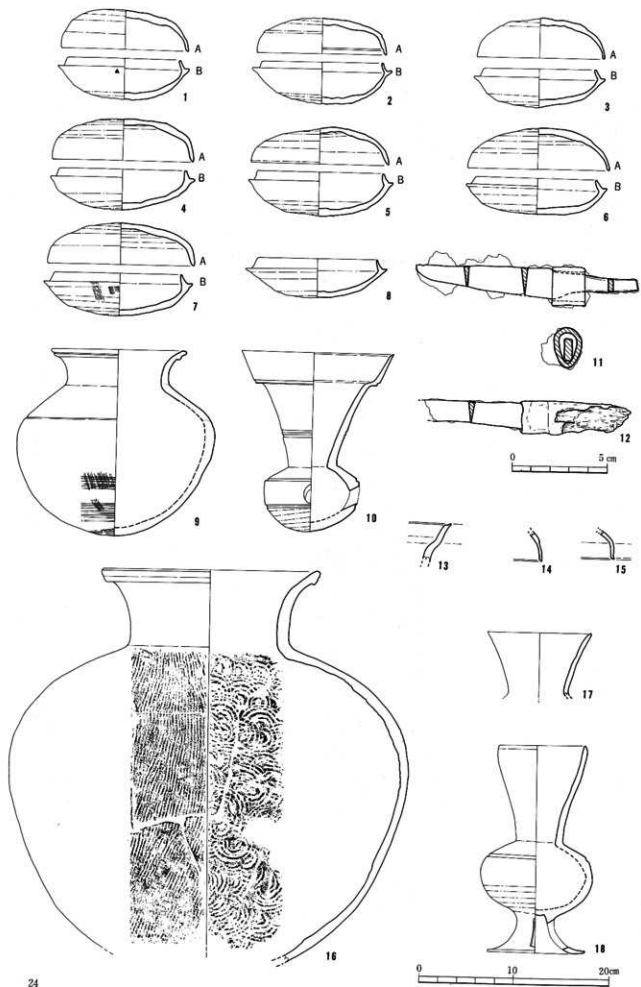
羨道は長さ1.11m、玄門幅0.7mと羨門に比べ若干狭い。玄室は長さ1.85m、裾部幅1.42m、中央幅2.1m、奥壁幅1.9m

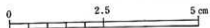
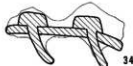
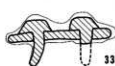
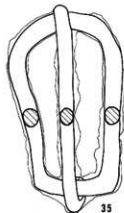
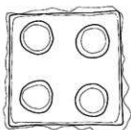
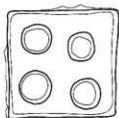
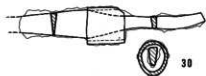
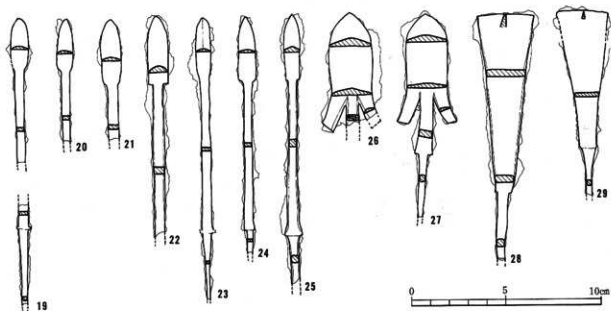
2号横穴墓土層観察表

層	色	質	厚	特徴・説明
I	黄褐色	粘質	約10cm	最上層、クワツクが散在し、風化が著しい。
II	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
III	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
IV	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
V	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
VI	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
VII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
VIII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
IX	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
X	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XI	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XIII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XIV	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XV	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XVI	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XVII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XVIII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XIX	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XX	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXI	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXIII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXIV	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXV	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXVI	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXVII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXVIII	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXIX	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。
XXX	黄褐色	粘質	約10cm	クワツクが散在し、風化が著しい。

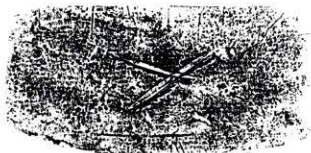


第14図 2号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図





第16図 2号横穴墓出土遺物実測図(2)



15図-1B

第17図 2号横穴墓出土土器へラ記号

第4表 2号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口徑 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	1 A	・13.6 ・4.1 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm前後の石英粒を少量含む	良好	1-3・9が一括	
1	1 B	・12.1 ・4.3 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はやや上方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 明青灰色	1-2mmの石英粒を少量含む	良好 堅緻		受部外面にへう記号「X」あり
2	2 A	・13.8 ・3.7 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は細くなるが丸い。内面口縁部付近は一本の沈線をめがらす。天井部は低く平らで外面にはうすい稜がみられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡緑褐色 白灰色の部分あり	1-2mmの角閃石粒を多量に含む。0.5-4mmの石英粒を少量含む	良好、一部分温度差によって生じた部分あり		
2	2 B	・12.9 ・4.4 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3.5mmの石英粒を少量含む	良好		
3	3 A	・13.5 ・4.1 ・一	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部はやや低く、やや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 頂部未調整	青灰色 自然釉のため黒色部分がみられる	1-3mmの石英粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
3	3 B	・11.8 ・4.1 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、やや上方にのび丸い。底部は、やや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色 外面は自然釉のため黒色の部分がみられる	1-2mmの石英粒を少量含む	良好 堅緻		
4	4 A	・15 ・4.3 ・一	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は、とがりぎみで丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-2mm大の石英、長石粒を含む	良好	4-8が一括	
4	4 B	・13.5 ・4.3 ・一	たちあがりは短く、ほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は肥厚しながら水平にのび丸い。底部は浅く、やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡茶褐色	1-6mmの石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
5	5 A	・14.5 ・3.8 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-2mm大の石英、長石粒を含む	良好 堅緻		
5	5 B	・13.4 ・4.6 ・一	たちあがりは内傾しやや外反しながらのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのびる。底部はやや深く丸味をおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-2mm大の石英、長石粒を含む	良好 堅緻		
6	6 A	・15 ・4.3 ・一	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-2mm大の石英、長石粒を含む	良好		
6	6 B	・12.8 ・3.8 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
7 A	坏 蓋	・15.8 ・4.3 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
7 B	坏 身	・13.5 ・4.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部はとがる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英、長石を含む	良好	外面にカキ目状痕跡あり	
8	坏 身	・12.6 ・4.2 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は細く鋭い。天井部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
9	壺	・14.2 ・19.7 ・—	口頸部は外反しなからのび、端部は外面に肥厚し一本の沈線を描す。胴部はよく張り、最大径のあたりにうすい沈線あり。底部は丸みをおびる。	ナデ	平行タタキの後回転カキ目	淡黄褐色	長石の微細粒を含む	やや不良	全体に磨減が非常に著しい	
10	甌	・15.8 ・18.7 ・—	口頸部は外反しなからのび、外面中央部に2本の沈線をなし、端部付近でさらに外側に屈曲し、屈曲部外面に凹面をなす。端部は内傾するうすい面をなす。胴部は、だ円形を呈し中央部の穿孔をはさむように2本の沈線あり。底部は丸い。	回転ナデ ナデ	ナデ、タテ方向の沈線 回転ナデ、 櫛描列点文 回転ヘラナズリ	青灰色	石英、長石の微細粒を少量含む	良好		
13	甌	・— ・— ・—	口縁部は外反しなからのび、端部付近でゆるく外方に屈曲し、端部は内傾する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英、長石の微細粒を少量含む	良好		
14	坏 蓋	・— ・— ・—	口縁部は外反しなからは直下にのび、端部は少々外方に屈曲し内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英、長石の微細粒を少量含む	良好		
15	坏 蓋	・— ・— ・—	口縁部はほぼ垂直に曲がり、端部が強く外反し、内面は段状をなす。体部と口縁部の境はうすい沈線を描す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を少量含む	良好		
16	壺	・23 ・41 ・—	口頸部は、いったん直立してのび、端部にいくにつれて外反し、端部は外面に面をなす。胴部はほぼ円形をなし、最大径は中央部よりやや上にある。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	灰色	精緻	良好 堅緻	口縁部一胴部まで半分のみ	
17	壺 ・平 瓶	・11 ・6.5+ ・—	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰-青灰色	石英、長石の微細粒を少量含む	良好	反転復元	
18	脚 付 長 頸 壺	・9.2 ・21.5 ・—	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部は、だ円形を呈し上方に1本の沈線をなす。脚部は、下外方にのび、端部は細くなり丸い。長方形スカシ窓が三方につく。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	微細な長石粒を少量含む	良好		

第5表 2号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
11	刀子	11.7	7.3	1.5	0.7	0.25	0.25	鞘口を有す。墓道より出土
12	同上	10.6以上	5.1以上	1.4	不明	0.3	不明	木質残存。墓道より出土
19	鉄鏃	12.7以上	2.7	0.95	0.5	0.2	0.2	
20	同上	6.4以上	2.7	0.8	0.45	0.2	0.2	
21	同上	6.3以上	3.4	1.0	0.55	0.2	0.2	
22	同上	11.5以上	3.6	1.1	0.6	0.3	0.3	
23	同上	14.8以上	3.3	0.8	0.55	0.2	0.2	
24	同上	12.3以上	3.4	0.9	0.55	0.2	0.25	
25	同上	14.1以上	3.5	0.9	0.5	0.3	0.35	
26	同上	6.3以上	6.3以上	2.2	0.6	0.45	0.3	
27	同上	10.6以上	5.9	2.2	0.8	0.4	0.35	
28	同上	12.8以上	9.45	3.1	0.5	0.4	0.4	
29	同上	9.7以上	7.3	2.8	0.35	0.2	0.3	
30	刀子	9.7以上	3.5以上	1.2	0.6	0.3	0.25	鞘口を残す
33	馬具							帯留金具
34	同上							同上
35	同上							銃具
36	弓付属金具?							

第6表 2号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
31	土製棒玉	土	黒褐	7	5.5	1.5	0.3	
32	同上	同上	同上	7.5	5	1.5	0.3	

3号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

3号横穴墓は北支群の北よりの斜面にあり、墓道主軸をN-66°-Eにとり、西方向に開口する。標高は約31mを測り斜面下位にある。全長は、5.08mを測る。1号横穴墓と2号横穴墓との間にテラス状遺構が検出されたため斜面下位を精査し発見された。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込みなどは認められなかった。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、横穴墓上部の「テラス状遺構」の検出、調査を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第2解剖学教室の協力のもとで玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

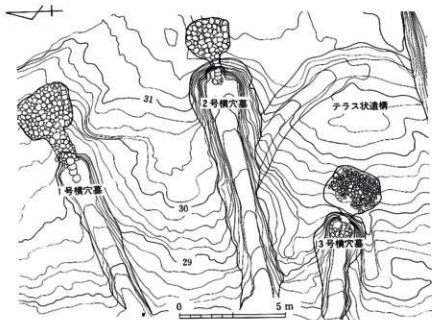
a) 規模、構造 前庭部は、長さ約2.46m、下幅は先端部で0.5m、羨門付近で1.25mを測る逆台形を呈している。斜面下位に立地する関係し旧表土は流失しており前庭部先端の切り込み面は明瞭でない。しかし地山礫を多量に含んだ基盤層からの切り込みは推定であるが認められ、切り込み部分から前庭部床面までの深さは0.2mを測る。前庭部床面は凹凸が若干あるがほぼ水平に羨門へ続き、先端より1.95m付近で約10cm程段落ちして羨門部に達する。側壁の傾斜は左右で若干違うが60°~70°を測る。羨門部壁の傾斜は約80°を測る。羨門部は左側天井部分が崩れているのみで旧状を留めている。羨門は高さ0.85m、幅0.5mを測る。

閉塞施設は板石と河原および地山円礫を使用し構築されているが、これは最終埋葬時の状態を示している。まず、前庭部下部に初葬時の埋土が約30cm程堆積し、その上に基底部をつくる。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の3工程に分けられる。第1工程は、安山岩製板石2枚で先の埋土を基底部として羨門を覆う。この板石2枚は羨門側の面にベンガラが塗布されている。第2工程は、人頭大の円礫7個前後からなり、埋土を基底部として第1工程の板石の下面の支えと隙間を覆う。第3工程は、人頭大の円礫10個前後からなり、第2工程の石を根石として第1工程の板石の中程までを覆う。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされているが、この埋土中に多量の円礫が含まれているところから初葬時には全体を覆うように配石がなされていたと考えられる。

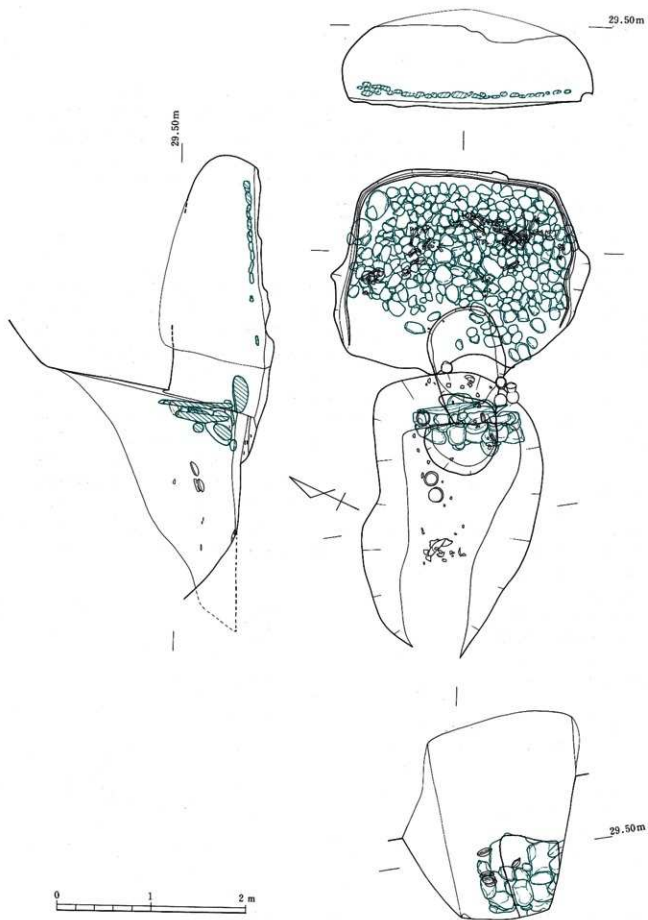
b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土は、その性状から、6層群11層に分層できたが当初前庭部の確認が不十分であり、土層観察面が右端によったため明確な土層が確認できなかった。以下堆積順に説明する。

第1層群(VIb層)は横穴墓形成時の基盤層で急斜面の為か上部にあったと考えられる旧表土は流失している。横穴墓はこの基盤層上面から掘り込まれている。

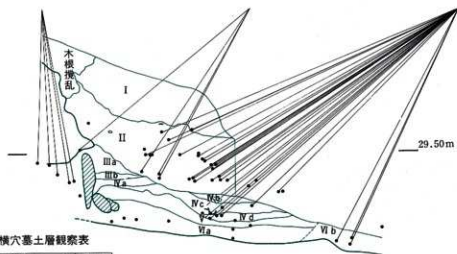
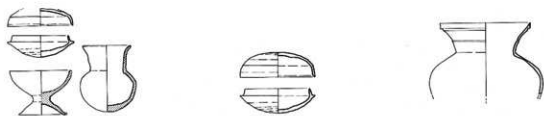
第2層群(VIa層)は閉塞石下面に約2.3m前後の範囲に約20°の傾斜を持ち



第18図 3号横穴墓テラス平面図



第19图 3号横穴墓平·断面图



3号横穴墓土層観察表

層	色	質	土色特色	注	説明・形状
I	暗茶褐色	瓦	土の縁が広い		黒い砂質土
II	黒褐色	粘質土	強粘質・土層が厚い		黒い砂質土
IIIa	暗茶褐色	粘質土	炭化物・土層が厚い		黒い砂質土
IIIb	暗茶褐色	粘質土	炭化物・土層が厚い		黒い砂質土
IVa	暗茶褐色	粘質土	*		黒い砂質土
IVb	暗茶褐色	粘質土	*		黒い砂質土
IVc	暗茶褐色	粘質土	*		黒い砂質土
IVd	暗茶褐色	粘質土	*		黒い砂質土
V	暗茶褐色	粘質土	*		黒い砂質土
VIa	暗茶褐色	粘質土	土層・砂を包含する		黒い砂質土
VIb	暗茶褐色	粘質土	砂を多く含む		黒い砂質土

第20図 3号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

堆積するが、先端部になるにしたがって水平堆積する。最も厚い部分で約30cmの堆積が認められる。性状は基盤層の二次堆積で、上面は第3層群によって削平されている。土器（第22図10-13）を包含する。初葬時の埋土と考えられる。

第3層群（IV層）は、閉塞石基部上面から約2.1mの範囲にほぼ水平に約20cm前後堆積している。本層群はさらに4層に細分される。下位から(1)基盤層の二次堆積で若干風化しているが固く締っている。炭化物を少量含む。(IVd層) (2)基盤層の二次堆積で1層に比べてやや風化が進んでいる。(IVc層) (3)同じく基盤層の二次堆積で(1)層と類似するがやや軟質層である。(IVb層) (4)は(2)層と類似するがやや軟質の層である。(IVa層) 本層群は円環および甕（第22図9）の大部分を含む。上面は第4層群によって削平されている。第1次追葬時の埋土であり、土器の接合状況から、初葬時埋土の再利用と考えられる。

第4層群（III層）は、閉塞板石下位から約1mの範囲で約20°の傾斜を持ち深い所で約60cm前後堆積している。本層群も下層群同様に基盤層の二次堆積で、風化のあまり進んでない固い層と若干風化の進んだ軟質の層の互層で構成されている。第2次追葬時の埋土である。本層群中より土器群A・Bが一括埋置された状態で検出された。

第5層群（II層）は、基盤層の2次堆積土で若干の土器小片を包含する。軟質な層で上部に設けられていたと推定される填丘流土と考えられる。

第6層群（I層）は、クロボク質土腐植土層で旧表土である。以上の観察結果から、少なくとも3回以上の埋葬が行われたと推定される。

2) 羨道、玄室

羨道・玄室の主軸は、墓道主軸に対して14°程南にふれている。羨道は床面で長さ0.55m、羨門幅0.5m、玄門幅0.95mの逆台形状を呈す。床面は約12°前後の傾斜で玄室に向かって下降している。天井部は若干崩落しているが、推定高0.8m前後ではほぼ水平に玄室天井に接続すると思われる。玄室天井部との境は弱い段を持つと推定される。玄室は平入り、略隅丸長方形を呈すると思われるが、右裾部から右側壁部にかけては岩盤が硬かった関係上弧状を呈し区切りが明確でない。長さ2.20m、幅2.65mを測る。天井は崩落が激しいが、ドーム状を呈すると推定され、高さは中央付近で0.85m前後と考えられる。床面は標高28.7mで、奥壁に向けて約5°の傾斜で高くなっていく。床面には5～20cm程度の基盤層起源の粘質土による埋土を羨道から玄室全面に行っている。また、両側壁から奥壁にかけての床面には幅10cm、深さ5cmの排水溝をめぐらす。玄門から奥へ約0.5mのところから奥壁にかけて南北長約2.4m、東西幅約1.4mの略長方形の範囲に人頭大から握拳大の河原円礫を敷きつめている。なお、礫床北側側壁と奥壁のコーナー付近に人頭大の扁平な円礫2個を置き石枕としている。羨道、玄室内の天井および壁部には全面にベンガラが塗布されている。

3) テラス状遺構

本横穴墓羨門頂部の斜面上約5m北東側に溝状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、弧状を呈し、南北長7.5mで両端は2・4号横穴墓墓道によって削平されている。溝は東側上端で標高32.8m、西側上端で32.03m、下端32.1mを測る。整形に直行する土層観察では溝内に流入した墳丘埋土は認められたが、西側では斜面が急傾斜の為に墳丘埋土等は認められなかった。遺物等は出土していない。(村上久和)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 少なくとも、成人の男性1体、女性2体と小児1体の、計4体が埋葬されていた。原位置を保つ個体は一つもなく、全て片付けられている。アミで示したものは明らかに男性と推定されるものであるが、他の人骨と同様に片付けられている。ただ、小児を除けば、玄室左側に頭や上肢の骨、右側には下肢骨という傾向が認められ、本来の頭位が羨門からみて左側を向いていたことがうかがえる。

玄室の羨門よりの部分は、落石と土砂の流入で人骨はほとんど残っていない。しかし、ガラス玉や歯等が認められることから、最後に埋葬された被葬者がこの部分に存在したことが考えられる。(田中良之)

b) 副葬品 玄室内の礫床上に北頭位で成人人骨3体と南頭位で小児1体分の人骨が乱れて遺存していた。遺物は、奥壁コーナー付近の石枕とその周辺でガラス製小玉23個が、それより西側25cm付近の石枕周辺で鉄鏃群および刀子が、それより西10cm付近でガラス製小玉17個がそれぞれ検出された。なお、鉄鏃および刀子は清掃中に原位置より遊離したため、刃先の方向等は明確でない。人骨との所属関係も不明である。

2) 前庭部内

前庭部内の遺物の出土層位については、埋土の状況の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。前庭部左側コーナー付近において遺物A群を検出した。A群は土師器高杯、同直口壺、須恵器坏蓋身(第22図4～8)の一括埋置状態で上に河原円礫を置いていた。

前庭部中央の羨門より0.6m入口方向へ行った所で遺物B群が検出された。B群は須恵器坏蓋身の一括埋置状態で坏身2個体、坏蓋1個体(第22図1～3)である。身は正置し、蓋は内側を上にして重ね、その上に河原円礫を置いていた。

他の遺物は単独あるいは破砕した状態で出土したが、これは追葬時の攪乱による可能性が強い。(村上久和)



第21图 3号横穴墓玄室内人骨出土状态

4. 3号横穴墓出土人骨の所見

残存している人骨片の量は比較的多いが、片付けられているために個体識別は困難である。被葬者の数については、成人の大腿骨が3体分、成人の下顎骨3体分、小児の頭蓋骨片が1体分識別出来たので、少なくとも4体以上が埋葬されていたことになる。

〈保存部位〉

頭蓋骨：奥壁に向かって左隅に成人の頭蓋骨片（前頭骨片、頭頂骨片、側頭骨片、下顎骨片および歯牙）、別個体に属する下顎骨2体分と歯牙、右隅に成人の上顎骨片と小児のものと思われる頭蓋骨片（頭頂骨片）が検出された。

体部骨：上腕骨片（右1、左2 いずれも細い）、尺骨片（左1）、大腿骨片（3対、1対は頑丈）、脛骨片（3対、1対は頑丈）、腓骨片（右1、左2）、踵骨片（右1、左2）、寛骨片（2）。

識別できた歯牙の歯式を以下に示す。上顎骨は咬耗の程度やう蝕の状態を考慮すると男性に属する可能性が高いと思われるが、確実とは言えないのでここでは別個体として記載する。

// // // // // // // // // X M ₁ P ₂ P ₁ C O O	// // // // // // // // O I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ //	(男性)
--	---	------

// O X O O C I' I' // // // // // // // //	O I' O Δ ? Δ O // // // // // // // // //	(不明)
---	--	------

// // // // // // // // M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C O //	// // // // // // // // X O O P ₁ P ₂ M ₁ //	(女性)
--	--	------

// // // // // // // // // O M ₁ Δ P ₁ O Δ O	// // // // // // // // O I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ O //	(女性)
---	---	------

X 歯槽閉鎖 O 歯槽開放 Δ 歯根のみ ・ 遊離歯
 ウ う蝕 / 破損不明 ? 不明

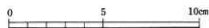
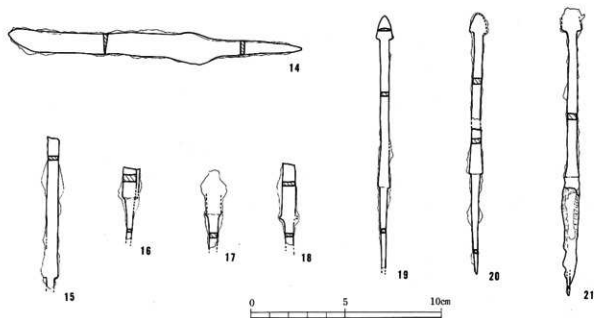
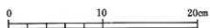
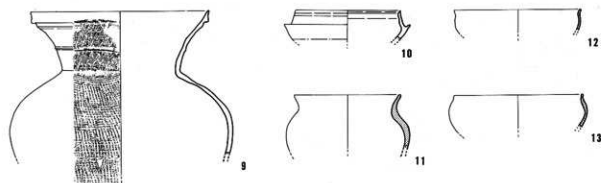
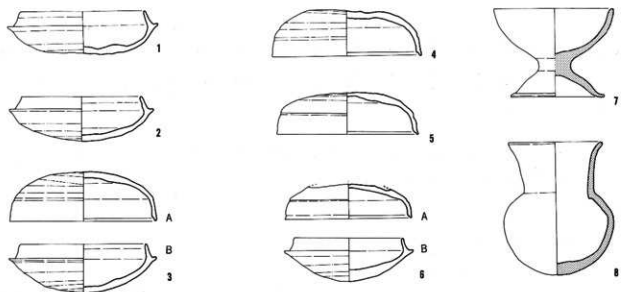
〈性別・年齢の推定〉

性構成：3対が識別された大腿骨と脛骨のうち、1対は頑丈で明らかに男性のものである。他の2対はいずれも細く、女性と考えられる。また、性別不明の小児が1体含まれるので、識別できた被葬者の性構成は、男性1体、女性2体、性別不明の小児1体と推定される。

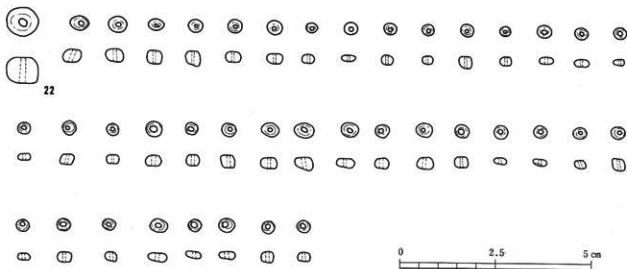
年齢構成：男性1体の年齢については、3体分の下顎骨のうち最も頑丈なものを男性とし、歯牙の状態から成年～熟年にかけての年齢と推定した。女性については、2個の下顎骨片に伴う歯牙の咬耗度（Brocaの2度）から推定すると、どちらも熟年に達した程度の年頃であったと推定される。小児については、頭蓋骨片の厚さや大きさから推定した。

〈形質〉

歯牙は比較的良く保存されているが、その他の形質については不明である。（土肥直美）



第22图 3号横穴墓出土遺物実測図(1)



第23図 3号横穴墓出土遺物実測図(2)

第7表 3号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	粘土	焼成		
1	坏身	・13 ・4.3 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く、やや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	青灰色	2~3mmの石英粒を少量含む	良好	1-3一括	
2	坏身	・12.5 ・4.7 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く、やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	0.5~2mmの砂粒を少量含む	良好		
3 A	坏蓋	・15.3 ・5.2 ・一	口縁部はわずかに内湾しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面にうすい稜がみとめられる。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~2.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
3 B	坏身	・13.2 ・5.3 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部はややとがる。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	0.5~4mmの石英粒を少量含む	良好		
4	坏蓋	・15.6 ・4.7 ・一	口縁部はやや外反しながら真下にのび、端部は内傾する段を有す。外面には稜がわずかにみとめられる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 明青灰色	1~3mmの白色砂粒を少量含む	良好	4-8一括	
5	坏蓋	・14.8 ・4.4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段をゆるく有す。外面には、うすい稜がみとめられる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	2~3mmの白色砂粒、黑色砂粒を微量に含む	良好		
6 A	坏蓋	・13.4 ・3.6 ・一	口縁部は内湾気味に下り、端部でわずかに外反し内傾する段を有す。外面にはうすい稜がみとめられる。外面天井部は割離している。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	明灰褐色 淡灰褐色	0.5~4mmの白色砂粒、黑色砂粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
6	坏身	・11.4 ・4.6 ・-	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はややとがりきみで丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラズリ	灰黒色	1mmの白色砂粒、黒色砂粒を微量に含む	良好		
7	高坏	・12.6 ・9.2 ・-	坏部は上外方に、やや内湾しながらのび、端部は丸い。胴部は、下外方に肥厚しながらのび、端部は細くなり丸い。	ヘラミガキ痕	器面が磨滅しているため調整不明	赤黄褐色	1-2mmの角四石、長石、石英粒を含む	不良	土師器	
8	長頸壺	・10.2 ・14 ・-	口頸部は、ほぼ直立しながらのび、端部にいくにつれて、わずかに外反し丸い。体部は丸い。	回転ナデ ヘラミガキ痕	ヘラミガキ痕 器面が磨滅しているため調整不明	赤褐色	2-7mmの白色透明砂粒を含む	やや不良	土師器	
9	甕	・18.6 ・- ・23.2	口頸部は、上外方にのび途中うすい突帯がつき、端部はやや肥厚しながらしまり面をなす。	回転ナデ 同心円タタキ後回転ナデ	回転ナデ 櫛櫛波状文平行印きの後、部分的に回転櫛ナデ	青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻	胴部中央部以下欠損	
10	坏身	・11.1 ・3.2+α ・-	たちあがりは長く内傾してのび、端部は内傾する段を有す。受部は上外方にのび、端部は細くとがりきみである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻 石英粒を少量含む	良好	底部欠損 反転復元	
11	甕	・11.2 (残存高) ・5.5 ・13	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、ややほる。	ナデ	ヨコナデ ヨコナデ後 ヘラミガキ	黒色 明茶褐色	角四石粒を多量に含む	良好	土師器 底部欠損 反転復元	
12	甕	・13.4 ・2.3+α ・-	口頸部は内湾しながらのび、端部付近でわずかに外反し丸い。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	茶褐色	石英、雲母粒を多量に含む	良好	土師器 反転復元	
13	甕	・13.6 ・3.4 ・14.6	口頸部は内湾しながらのび、端部はわずかに外反し丸い。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	茶褐色	石英、雲母粒を多量に含む	良好	土師器 底部欠損 反転復元 表面にひびが入っている	

第8表 3号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考	
14	刀子	15.5	10.0	1.3		0.8	0.2		
15	鉄鏃	7.9				0.5	0.2		
16	同上	3.7				0.3	0.1		
17	同上	4.0				0.4	0.2		
18	同上	4.2				0.6	0.2		
19	同上	13.2以上	1.2	0.85		0.4	0.1	0.2	
20	同上	13.1以上	1.0	0.9		0.4	不明	0.25	
21	同上	15.0	1.2	1.05		0.4	不明	0.3	桜樹皮巻き残存

第9表 3号横穴墓出土玉類計測表

(単位:mm, g)

番号	種類	材質	色調	孔径	短径	孔径	重量	備考
22	丸玉	ガラス	藍	8	6	2	0.5	
	小玉	*	*	5	3	1.5		
	*	*	*	3	*	1		
	*	*	*	3.5	2	*		
	*	*	*	4	2.5	*		
	*	*	*	3.5	*	*		
	*	*	*	4	3	*		
	*	*	*	3.5	4	*		
	*	*	*	3	2	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	3.5	*	*		
	*	*	*	3.5	2	1		
	*	*	*	3	*	0.5		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	*	*	1		
	*	*	*	4	*	*		
	*	*	*	3.5	3	*		
	*	*	*	3	2	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	青	4	3	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	3.5	2.5	*		
	*	*	*	4	3	1.5		
	*	*	*	*	2	1		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	3.5	3	*		
	*	*	*	4	2	1.5		
	*	*	*	*	2.5	*		
	*	*	*	*	3	1		
	*	*	*	*	2.5	1.5		
	*	*	*	3.5	3	1		
	*	*	*	4	2	*		
	*	*	*	*	3	*		
	*	*	*	*	*	*		
	*	*	*	3	2.5	*		
	*	*	*	*	2	0.5		

4号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

4号横穴墓は、北支群の北端部2号横穴墓の南東10mの所に位置し、2号横穴墓同様南西方向に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高33.11m付近に設けられている。全長は14.78mを測り、主軸をN-44°-Eにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没していた。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長11.93m、幅は入口で上部幅0.75m、羨門部で上部幅2.08m、底面幅1.40mを測る。側壁高は羨門部で約1.7mを測る。墓道入口から約10m羨門方向へ進んだ位置までは墓道幅は狭く、その後羨門壁まで広がる逆台形状を呈し前庭部をつくる。墓道床面は凹凸を持ちながらも約5°の緩やかな傾斜で羨門に向って上る。羨門壁は62°前後の傾斜をもち、側壁とはほぼ直角に接している。側壁は70°-80°の傾斜で立ち上がる。羨門部分は天井部分が大きく崩れているが推定羨門高は0.75m前後、幅0.64mを測る。閉塞施設は最終埋葬時に取り壊されており、現状では羨門左側に人頭大の河原石が6個残っており、最終埋葬時の木蓋等の根石と考えられる。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で5層群21層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群(Ⅷ・Ⅹ層)は、羨門下面から墓道入口付近まではほぼ水平に60cm前後堆積している。本層は上下2層に区分される。下層から(1)基盤層の二次堆積土であり、上層とは漸移的な変化をする。(2)上層は同様な性状をなすが風化が進んでいる。本層群中上面に甕(第27図31)を据え置いている。本層は初葬時の墓道埋土と考えられる。

第2層群(Ⅺ・Ⅻ層)は、羨門より0.5m程入口によった所から墓道入口まで40cm前後堆積している。本層も上下2層に区分される。下層は(1)基盤層の二次堆積土であり、上層とは漸移的な変化をする。(2)上層は下層とは同様な性状をなすが風化が進んでいる。本層群には須恵器提瓶、平瓶、甕等の破砕散布状態が検出された。本層は第1次追葬時の墓道内埋土と考えられる。

第3層群(Ⅼ層)は、羨門より約1.0m程墓道入口に寄った所から墓道入口付近まで深い所で約50cm堆積している。本層群はさらに3層に細分される。下位から(1)は羨門から1m程入口側の所から0.8m程入口部へもどった所で約30°の角度で堆積している。羨門方向の部分を第4層群によって削平されている。(2)は(1)層端部から墓道入口付近まで堆積した基盤層の二次堆積土で、(1)に比べやや風化が進んだ層である。(3)は(1)層上面から2m程レンズ状に堆積したもので炭化材を若干含む。本層は第2次追葬の墓道内埋土と考えられる。

第4層群(Ⅾ層)は風化の進んだクロボク質の層で6層に細分されるが、基盤層混入の土層と互層をなす。本層群中では須恵器甕小片が多量に出土した。

第5層群(Ⅱ-Ⅳ層)は、クロボク質土腐植土層で旧表土である。以上の観察結果から少なくとも3回の埋葬が行われたと推定される。

2) 羨道、玄室

羨道は長さ1.04m、羨門幅0.64mで玄門幅と同じである。玄室は長さ1.81m、裾部幅2.1m、奥壁幅1.4mの略台形を呈し、床面には幅15cm前後、深さ10cm前後の排水溝が玄室中央および周壁に設けられている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は玄室中央の排水溝の上から左右に広げるように玄室全体に敷きつめ、その後羨道部全体に河原石を敷きつめる方法がとられている。天井は崩落が激しいがドーム形を呈しており、床面からの高さは中央付近で1.0m前後と考えられる。羨道部とは段で境界を設けている。



第24图 4号横穴墓平·断面图

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には若干の土砂が流入していたが清掃後に土器片、鉄器類が検出された。特に土器片が目につく。まず、玄室左裾部で検出された甍片および甍片は、墓道第2層群以上の層で破砕散布していた甍片および甍片と接合する。なお、右裾部およびコーナー付近で検出された甍片もこれに接合する。これ以外にも玄室奥壁より右側で検出された高坏脚部片は、墓道第3層群で破砕散布されている高坏(第26図19)と接合する。以上の土器は接合しても完形とはならず、これらのものは他所で割られて当横穴墓に持ち運ばれ葬送儀礼に使用したものと考えられる。これ以外に右裾部と側壁部のコーナー付近に口縁部を一部打ち欠いた須恵器小壺(第27図32)が検出された。また鉄器は錆が激しく残片が多い中で右裾部で刀子が一点検出された。

2) 墓道内

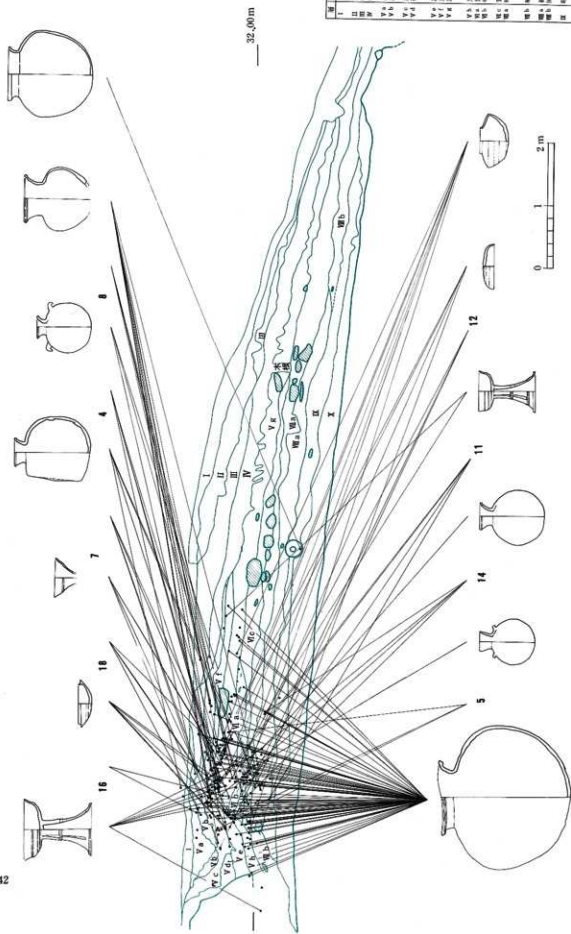
墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状態について述べる。

墓道においては、羨門より入口方向へ6mの所から8mの範囲で土器の破砕散布状態が検出された。土器片は数点を除いてほとんど細片に割られており、この細片中第4層群出土の甍(第28図35)は、12号横穴墓第6層群の甍片と接合する。(村上久和)

第10表 4号横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

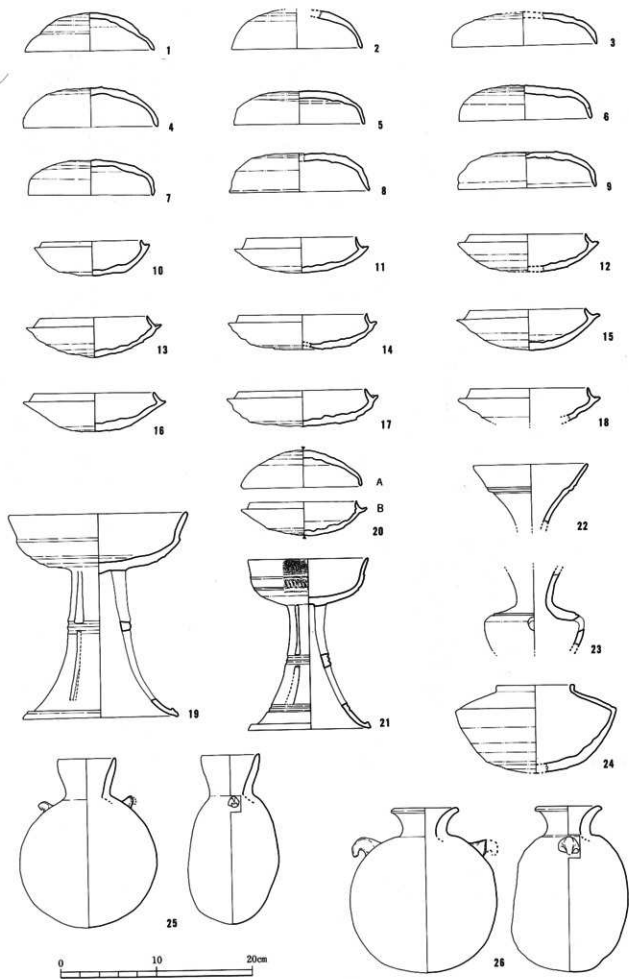
番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘリ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・13.8 ・4 ・—	口縁部は外側に開ききみにのび、端部は丸い。外面には棱がみとめられる。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰黒色	精緻、石英粒を微量に含む	良好 堅緻		
2	坏蓋	・13.9 ・4.0+ε ・—	口縁部は下外方にのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	
3	坏蓋	・15.2 ・3.5 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色 紫褐色 灰色	2mm以下の石英粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
4	坏蓋	・14.2 ・4.1 ・—	口縁部はほぼ外反しながら直下になり、端部は丸い。天井部は高くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻		
5	坏蓋	・13.8 ・3.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
6	坏蓋	・14.2 ・3.6 ・—	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色 黒色(釉のため)	石英粒を多量に含む	良好		
7	坏蓋	・13.2 ・3.6 ・—	口縁部はほぼ直下になり、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色 内灰色	石英粒を微量に含む	良好		
8	坏蓋	・14.8 ・4 ・—	口縁部はわずかに外反しながらのび、やや肥厚し、端部は細くなり、わずかに外反し丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色 青灰色	1mm以下の石英粒を含む	良好 堅緻		
9	坏蓋	・14.6 ・3.8 ・—	口縁部は肥厚しながら、ほぼ直下になり、端部は内傾する段を有す。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色 紫褐色 灰色	細かい石英粒を含む	良好 堅緻		



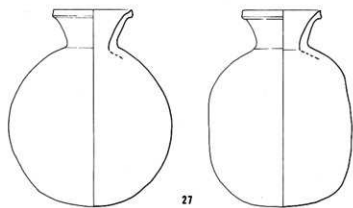
4号横穴墓土層剖絵表

層	土質	色	厚さ	特徴
I	赤土	赤	1.5m	赤土層、厚さ約1.5m、表面に若干の礫石を含む。
II	赤土	赤	1.0m	赤土層、厚さ約1.0m、表面に若干の礫石を含む。
III	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
IV	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
V	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
VI	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
VII	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
VIII	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
IX	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。
X	赤土	赤	0.5m	赤土層、厚さ約0.5m、表面に若干の礫石を含む。

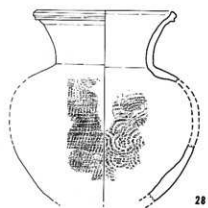
第25図 4号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



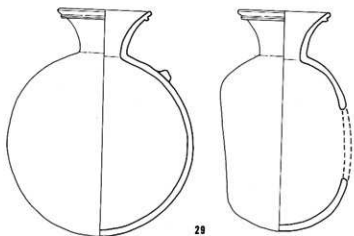
第26图 4号横穴墓出土遗物实测图(1)



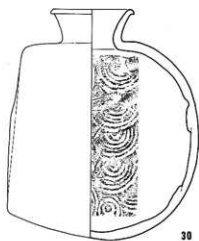
27



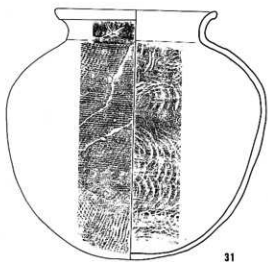
28



29



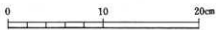
30



31



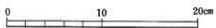
32

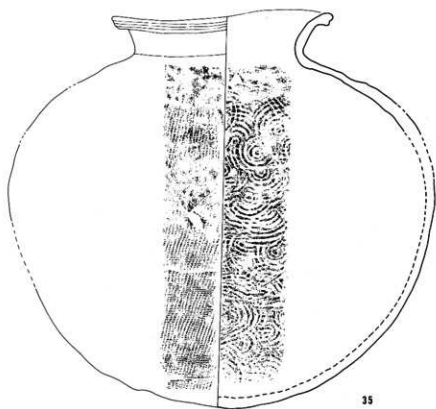


33

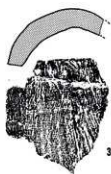


34





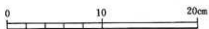
35



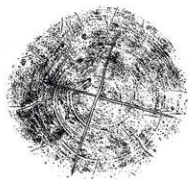
36



37



第28図 4号横穴墓出土遺物実測図(3)



26図-20 A



26図-20 B



27図-31

第29図 4号横穴墓出土土器ヘラ記号

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
10	坏身	・10.4 ・3.5 ・一	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部は短く、上外方にのび、端部はややとがる。底部はやや深く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色	精緻	やや良好		
11	坏身	・11.5 ・3.7 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は細くなりとがる。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	1mm以下の 石英粒を含む	良好 堅緻		
12	坏身	・12.2 ・3.9 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部はとがる。受部は肥厚しながら、水平にのび丸い。底部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	1mm程度の 石英粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
13	坏身	・11.2 ・4.2 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部はややとがる。受部は上外方にのび、ややとがる。底部は深く、とがり気味である。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 淡灰色	1-2mmの 石英粒を含む	良好 堅緻		
14	坏身	・13.5 ・3.6 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりきみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	1-2mmの 石英粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
15	坏身	・12.3 ・4.2 ・一	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部はやや長く、ほぼ水平にのび、底部はやや深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 後ナデ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好	受部が故意的に 破損された 痕がある (No.6の坏蓋と セットの可能性あり)	
16	坏身	・12.7 ・4 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや浅く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻 石英微砂粒を少量含む	良好		
17	坏身	・13.5 ・3.8 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm以下の 石英粒を含む	良好 堅緻		
18	坏身	・12.4 ・3.5+ α ・一	たちあがりは内傾してのび、端部はとがる。受部はほぼ水平にのびる。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡青灰色	1-4mmの 石英粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
19	高坏	・18.3 ・21.3 ・一	坏部は上外方にのび、端部は丸い。外面にはややほつきりした稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、外面中央部に2本の沈線がみられる。端部は外面に突帯がつき丸い。長台形二段のスカシが3ヶ所にみられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻	墓道と支室内 とで接合する	
20 A	坏蓋	・12.2 ・3.9 ・一	口縁部は屈曲し垂直に下がり、端部は丸い。天井部は浅く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色	1-2mm大の 石英粒を含む	良好 堅緻		外面天井部に「X」あり
20 B	坏身	・11.1 ・3.6 ・一	たちあがりは短く内傾してのび、端部はとがりきみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-3mm大の 石英粒を含む	良好 堅緻		外面底部に「X」あり。

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
21	高 坏	・12.4 ・17.8 ・—	坏部は上方にのび、端部は丸い。外面には2本の突帯が施されている。脚部は下方にのび、端部は面をなす。途中2ヶ所沈線が2条づつ施されている。長台形二段のスカシが3ヶ所に施されている。	回転ナデ シボリ裏	回転ナデ 坏部輪描列 点文	青灰色	0.5mm内外 の石英粒を 多量に含む	良好 堅緻		
22	膳	・12.1 ・残存高 ・6.3 ・—	口頸部は外反しながらのび、わずかに屈曲する。外面に2本の沈線が施されている。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 淡灰褐色 青灰色	精緻	良好 堅緻		
23	膳	・— ・— ・10.5	基部はよくしまり、胴部最大径は、やや上部にあり、そのやや上方に1本の沈線がある。穿孔も胴部最大径と同じ位置にある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡灰褐色	精緻	良好 堅緻	墓道と玄室内 で接合する	
24	増	・8 ・9.2 ・—	口頸部は短く直立してのび、端部は平ら。胴部はよくはり、最大径は上方にある。底部はやや深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡灰色	1mm以下の 石英粒を含 む	良好 堅緻		
25	提 瓶	・5.8 ・17.7 ・14.3	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は丸く外面両側に把手がつき、右側は少々欠損している。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	青灰色	精緻	良好 堅緻		
26	提 瓶	・7 ・17.1 ・15.3	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は丸く外面両側に把手がつき、右側は少々欠損している。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	青灰色	精緻	良好 堅緻		
27	提 瓶	・8.2 ・20.5 ・19.5	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 指オサエ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 部分部分に 黒色の自然 釉が付着し ている	精緻	良好 堅緻		
28	壺	・14.2 ・19.9 ・19.2	口頸部は外反しながらのび、端部は外面に三角形の突帯を有し、外傾する面を有す。胴部最大径は、やや上方にある。	回転ナデ 同心円のタ タキ	回転ナデ タタキ	青灰色	0.5-10mmの帯 粒も少量含む	良好		
29	提 瓶	・9.8 ・23.5 ・19.5	口頸部は外反しながらのび、端部付近に突帯が付き丸い。胴部は丸く、外面両側に把手がついていた痕跡がある。	回転ナデ 同心円状当 て具痕の上 から回転に よるナデ消 し	回転ナデ 回転カキ目	黄灰色	精緻 砂粒、角閃 石粒を含む	不良		
30	横 瓶	・7.9 ・23.8 ・19.4	口頸部は外反しながらのび、端部は丸みをおびた面をなす。胴部は横瓶でも、幅がせまい。	回転ナデ 指オサエ 同心円タタ キ	回転ナデ 平行タタキ の上から回 転カキ目	青灰色 灰色	精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
31	甕	・16.9 ・25.8 ・27.1	口頸部は外反しながらのび、肩部は肥厚し丸い。胴部は丸く、最大径は上方にある。	回転ナデ 同心円状当て共敷の上から、部分的にナデ直し	回転ナデ タタキの上から回転カキ目	青灰～灰色 灰黄色	精吸	良好		外面口頸部「X」
32	壺	・11.2 ・14.3 ・15	口頸部は外反しながらのび、肩部は外面に面を有し丸い。胴部は丸みをおび、最大径はやや上部にある。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ カキ目直 刷ヘラケズリ	青灰色	0.5～2mmの 白身粒をや や多量に含 む	良好 堅緻	口縁部を故意にうち欠いている。外面に鉄分の付着。支室内出土	
33	甕	・23.2 ・40.6 ・44.6	口頸部は外反しながらのび、肩部は面をなし外面に凹面をなす。胴部は、ほぼ円形を呈し、最大径は上方にある。	同心円タタキ	回転ナデ タタキ	青灰色	1mm前後の 白色砂粒を 少量含む	良好	墓道と支室内および12号横穴墓道遺物と接合	
36	丸瓦	・ー ・ー ・ー	内面（凹面）に横骨痕が若干認められるところから、横巻技法と考えられる。端部はヘラでていねいに調整されている。	布目	ナデ	褐色 赤褐色	角閃石 その他の砂 粒を少量含 む	やや不 良	古代遺物 第5層群出土	
37	旗	・6.4 ・1.6 ・9.2	高台は下方外への断面は三角形を呈す。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	内面黒褐色 外面淡赤褐色	角閃石 その他の砂 粒をやや多 量に含む	やや不 良	土師器 古代遺物、第5層群出土。	

第11表 4号横穴墓出土鉄器観察表

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刀幅	頭幅	刀部厚	頭厚	備考
33	刀子	12.3以上	6.7以上	1.5	1.1	0.4	0.3	木質残存
34	同上	8.3以上	5.9以上	1.2	0.7	0.2	0.2	

5号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

5号横穴墓は横穴墓群北よりの斜面にあり、南西方向に開口する。標高は約31mである。全長は約3.8mを測り、主軸をN-45.5°-Eにとる。その保存状態は良好であった。斜面の遺構検出作業中に本横穴墓の供獻土器群が現れ、発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込みなどは認められなかった。調査は供獻土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の検出調査、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、玄室内の調査は一旦中断した。数日後、九州大学医学部第2解剖学教室室員の参加協力の上で改めて玄室内の調査を実施した。本横穴墓が調査概報「I (1982)」で4号横穴墓としたものである。

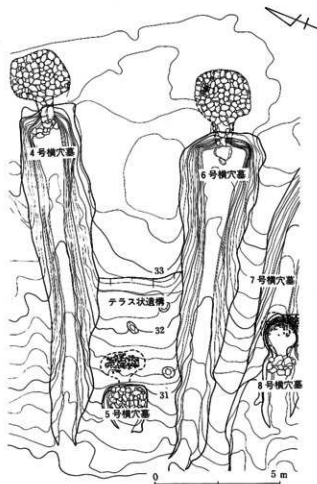
2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

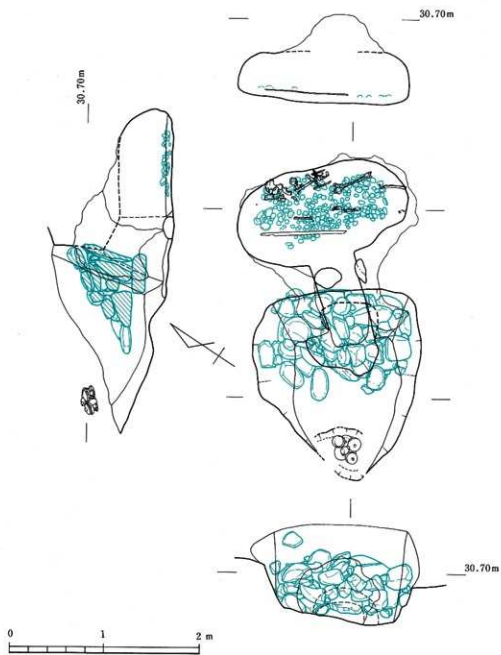
前庭部は長さ約2.0m、幅約1.7mであり羨門部に向って拡がる平面形を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面はゆるい凹凸があり、羨道部に向って約20°の傾斜で下降している。床面は羨門部前面の0.8m付近において一旦平坦となり、同0.4m付近で再度下降し羨門部に達する。側壁の傾斜は両者に差異があり、60°-65°を測る。また、羨門部壁の傾斜は約68°を測る。

羨門部は特に天井部分と側壁部分において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。側壁下部が一部残存しており、また閉塞施設との関係から復元すると、羨門部は高さ0.65m、幅0.52mと推定される。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。まず、前庭部の下部に最大厚30cmの埋め土を行い閉塞の基底部を整えている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の5行程に分けられる。第1群は幅、厚さ共20cm、長さ40cm以上の大きな円礫を3個、平坦面を上にして並列に先の埋土に埋めこむ。第2群は安山岩板石が2枚であり、第1群を根石とし羨門を覆う。第3群は平坦な河原円礫を主体とする12個からなり、第1群を根石とし、第2群を支え、隙間を覆う。第4群は幅35cm、長さ50cm、厚さ20cmという最大の円礫1個と比較的大型の円礫5個からなり、前庭部埋土を基底とし、第3群の支えとなる。第5群は幅、長さ20-30cm程度の河原および地山包含円礫25-30個からなり、第2-4群全体を覆う。以上の配石によって前庭部は面積、堆積共におおよそ半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋め土がなされている。埋土は風化の進んでいない地山の二次堆積物であり、単一層である。なお、この埋土直上にやや風化の進んだ土層が見られ、供獻遺物の配列埋置状態が確認された。



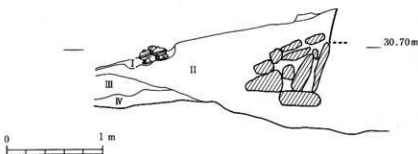
第30図 5号横穴墓テラス平面図



第31图 5号横穴墓平·断面图

5号横穴墓土層観察表

層	色調	性状
I	暗茶褐色	きめ細かい。
II	茶褐色	I層と同様な小石の混入が見られる。地山小礫を包含する。
III	黒褐色	田表土
IV	暗茶褐色	灰盤



第32図 5号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.44m、長さ0.94mを測る。床面は6°前後の緩い傾斜で玄室に向けて下降し、玄室との接続部分で最深となる。天井部は崩落によって不明であるが、25~30°の傾斜で下降すると推定される。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ1m、幅1.85mを測る。高さは天井部の崩落のために明確ではないが、約0.6mと推定される。床面は標高29.82mでほぼ平坦である。床面には5~10cm程度の埋め土を玄室全面と羨道部に行っている。玄室中央部分には長さ1.43m、幅0.7mの範囲で直径7cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。なお、礫床北側に比較的大きな円礫2個があり、石枕とした可能性がある。玄室内には天井の崩落部と閉塞施設の隙間からの流入土が西側に堆積していたが、礫床の東側半分は埋没から免れていた。

3) テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上約5m付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、ほぼ直線状となる。上場線は標高32.8mであり、約40cmの段となっている。整形に直行する土層観察が不十分なために盛土など墳丘に関する遺構の存在は不明である。また、平坦面となった標高32.2~32.4m付近に3基の小ピットが検出された。(吉留秀敏)

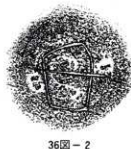
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

- 埋葬人骨 成年男性の単体埋葬で、羨門からみて左(北西)に頭位をとる仰臥伸展葬である。人骨の全体的位置関係に大きな乱れはないが、落石のため、それぞれの骨は破損し、やや動いている。(田中良之)
- 副葬品 人骨の左手付近の礫床上に鹿角装刀子1、鉄鏃6点が集中し、右腕に沿って鉄刀1振が配置されていた。鉄鏃は重なっており、上部の2点は動いているが、下部の4点と同様に本来は先端を南向きに、すなわち足方に向けて配置されていたと推定される。鉄刀も切先を南向きとし、刃部を西向きに配置されている。

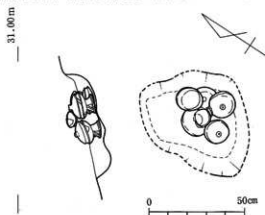
2) 前庭部内

前庭部埋土の上部では須恵器と土師器を配列埋置状態で検出した。これは埋土上に掘られた掘り方内に正置され、埋められたものである。掘方は壁の立ち上がり不明瞭であったが、平面的に長さ約

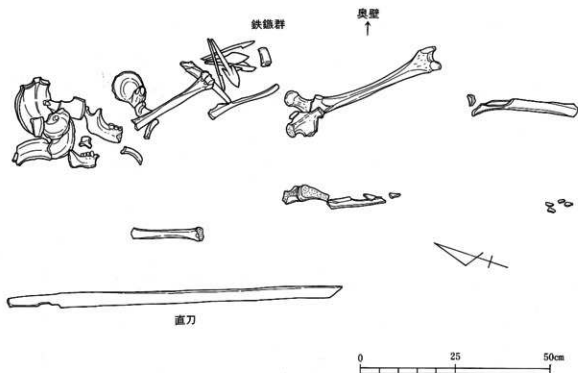


36図-2

第33図 5号横穴墓出土土器ヘラ記号



第34図 5号横穴墓前庭部遺物出土状態



第35図 5号横穴墓玄室内人骨出土状態

55cm、幅50cm以上、深さは約12cmを測る。掘方内の埋土には若干腐植土を含み、前庭部埋戻し後一定期間の後にこの遺物の埋置がなされた可能性がある。須恵器は有蓋高坏2、蓋坏1、土師器には直口壺1、埴1がある。蓋坏セットの蓋は有蓋高坏の蓋を転用したものである。配列は掘り方の南側に坏1、高坏2を蓋を被せた状態で置き、北側に直口壺、埴を置いている。(吉留秀敏)

4. 5号横穴墓出土人骨の所見

比較的良く保存された成人骨1体分が検出された。

〈保存部位〉

頭蓋骨：前頭骨、左右側頭骨、左右頭頂骨片、下顎骨（右下顎枝を欠く）、歯牙11本。顔面部は消失している。残存する歯牙は以下のとおりである。

///	///	P ¹	///	///	///	///	///	///	///	///	///
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	○	○	○	○	○	○	I ₂	C P ₁ P ₂ M ₁ ○ ○

○ 歯槽開放 · 遊離歯 / 破損・不明

体部骨：右鎖骨、左右寛骨片、左右上腕骨、左尺骨片、左大腿骨、右大腿骨片、左脛骨体部。

〈性別・年齢の推定〉

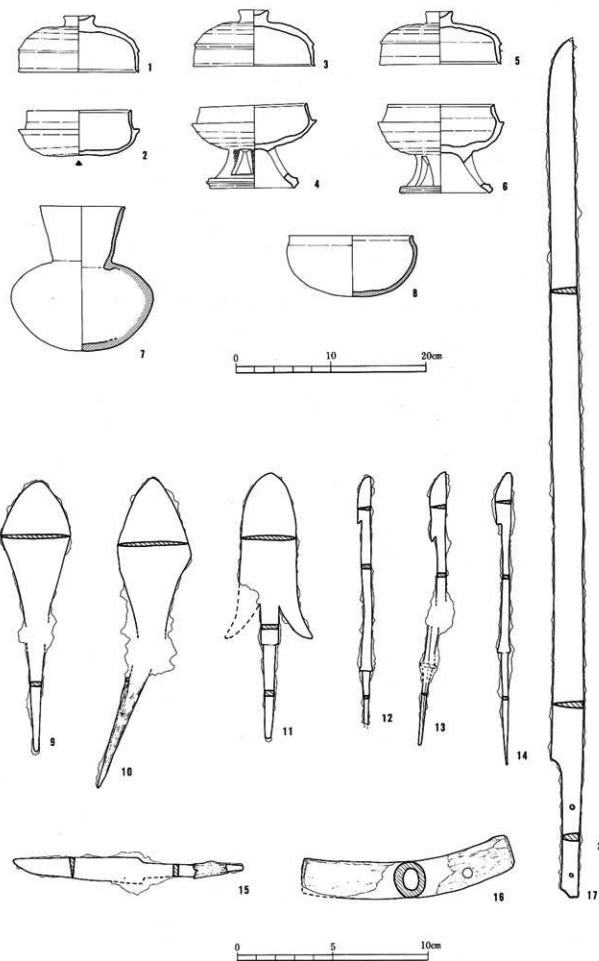
性別：乳様突起および眉弓の発達が著明であることから男性と推定した。

年齢：歯牙の咬耗度（Broca 1～2度）から、成年後半期（30代）と推定した。

〈形質〉

顔面部の特徴は不明であるが、粗線やヒラメ筋線等の筋付着部の発達は良好である。また、大腿骨最大長よりピアソンの式を用いて求めた推定身長は159.0cmであった。頭蓋非計測的形質の観察で前頭縫合が観察された。

(土肥直美)



第36图 5号横穴墓出土遺物実測図

第12表 5号横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色				備 考	へう記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土		
1	坏蓋	・12.6 ・6 ・一	口縁部はほぼ直下になり、端部は内傾する面を有す。外面は丸みをおびた棧がややはっきりとみとめられる。頂部には九いツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	淡青灰色 青灰色	精緻	良好 軟質	1、2はセットとして出土
2	坏身	・10.4 ・4.8 ・受部径 ・12.8	たちあがりはわずかに内傾してのび、端部は内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	外面底部 「白」
3	坏蓋	・13 ・6	口縁部は直下へのび、端部は内傾する段を有す。天井部は高くやや丸みをおびる。外面には、丸みをおびた棧がみとめられ、頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	精緻	やや不 良	3、4はセットとして出土
4	有蓋高坏	・11.4 ・8.8 ・受部径 ・13.3	坏部のたちあがり、わずかに内傾してのび、端部は内傾する面を有す。受部はほぼ水平へのび、端部は丸い。脚部は下外方へのび、スカシ窓あり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転カキ目	淡青灰色	1-3mmの 石英粒を含む 精緻	良好 堅緻	
5	坏蓋	・13 ・5.6	口縁部は、ほぼ直下になり、端部は内傾する段を有す。外面には棧がみとめられ、頂部にツマミがつく。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻 2mm以上の 砂粒を含む	良好 堅緻	5、6はセットとして出土
6	有蓋高坏	・11.2 ・9.4 ・受部径 ・11.3	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段を有す。受部は短くやとがりき。底部は深く丸みをおびる。脚部は下外方へのび、スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	灰色	精緻 1-2mmの 砂粒を含む	良好	
7	直口壺	・9.1 ・15.1 ・15.2	口頸部は外反しながら、端部は丸い。胴部は、よくほり、底部は丸みをおびる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色	精緻	良好 堅緻	土師器
8	柄	・13.2 ・6.5 ・13.8	口縁部は外反しながら、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	ナデ	ヘラミガキ	赤褐色	精緻	良好	土師器 1-8一括出 土

第13表 5号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

番号	器種	全 長	頸部長 (刀部)	刀 幅	頸 幅	刀部厚	頸 厚	備 考
9	鉄鏃	14.1	6.4以上	2.1	0.5	0.2	0.2	
10	同上	16.8	7.2以上	3.8	0.6	0.2	0.2	木質残存
11	同上	13.9	8.6	3.0	0.9	0.25	0.25	
12	同上	13.0以上	2.5	0.7	0.5	0.1	0.2	
13	同上	14.3	3.5	0.8	0.45	0.2	0.2	
14	同上	15.3	2.6	0.8	0.4	0.15	0.15	
15	刀子	12.1	6.9	1.2	0.6	0.2	0.25	
16	鹿角製刀子柄							15の柄
17	直刀	89.5	75.1	3.0	1.8	0.7	0.8	柄部に目釘穴

6号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

6号横穴墓は北支群の北端部、4号横穴墓の南東6mの所に位置し、4号横穴同様南西方向に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高33.7m付近に設けられている。全長は15.41mを測り、主軸をN-60°-Eにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞部および玄室内の調査等を行った。玄室内には、人骨が遺存していたため、九州大学医学部第2解剖学教室の協力を得て取り上げを行った。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長12.4m、幅は入口で上部幅0.85m、羨門部で上部幅3.2m、底面幅1.40mを測る。側壁高は羨門部で約1.6mを測る。墓道入口から約10m羨門方向へ進んだ位置までは墓道幅は狭く、その後羨門壁まで広がる逆台形状を呈し前底部をつくる。この部分の中央には玄室からの排水溝が約0.8m程掘られている。排水溝には板石を蓋石として使用している。墓道床面は若干凹凸を持ちながらも約5°のゆるやかな傾斜で羨門に向かって上る。羨門壁は85°前後の傾斜をもち、側壁とはほぼ直角に接している。側壁は70°-80°の傾斜で立ち上がる。

羨門部分は天井部分が若干崩れているがほぼ復元できる。復元すると、羨門を囲んで5cmの深さに逆U字形の額縁状の掘り込みを設ける二重門構えである。その内側に推定高約55cm前後、幅60cmの羨門が穿たれている。

閉塞施設は最終埋葬時に取り壊されている。現状では羨門下面の左右に人頭大の河原石が6個残っており、最終埋葬時の木蓋等の根石と考えられる。また、初葬時の閉塞板石は、一部を羨道部敷石に用い、最終埋葬時には閉塞床面より20-40cm上部で板石二枚（一枚は、ベンガラを塗布した面を上、一枚は同面を下にして）を焼土、炭化材とともに葬送儀礼に使用している。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で7層群12層に分層できた。以下堆積順に説明する。

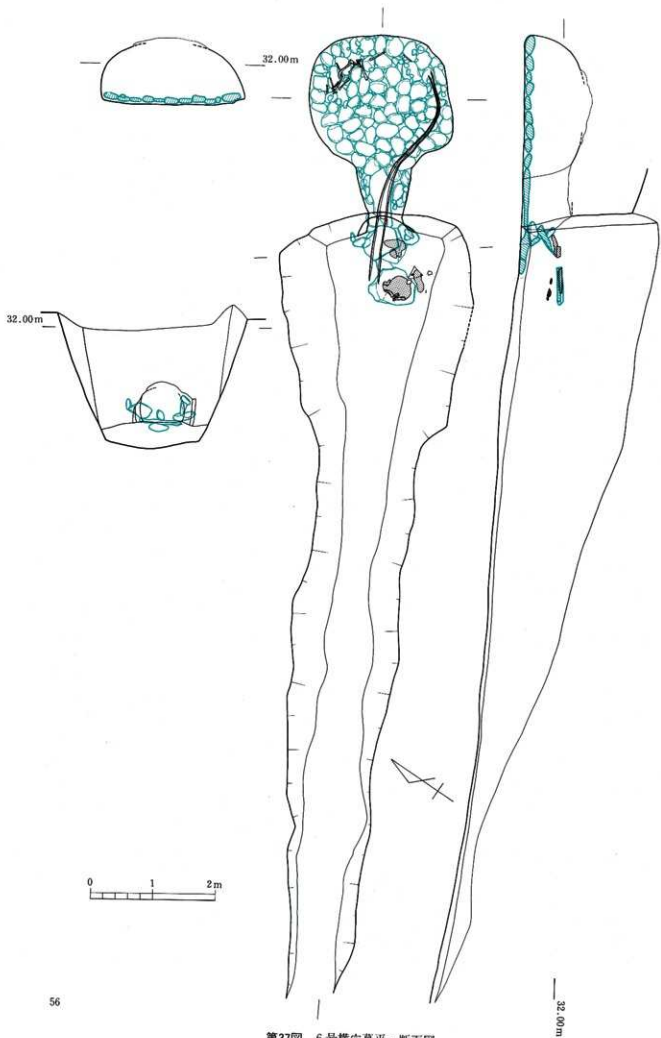
第1層群（Ⅰ層）は羨門下面から墓道入口付近までほぼ水平に50cm前後堆積している。基盤層の二次堆積土である。溝蓋石を包含する。上面は若干風化が進んでいる。中位より鉄器片が出土した。本層は初葬時の墓道埋土と考えられる。

第2層群（Ⅱ-Ⅺ層）は羨門下面から墓道入口付近まで約10mほぼ水平に50cm前後堆積している。閉塞石を包含する。本層は性状から横方向に3層に細分される。羨門方向より(1)、基盤層の2次堆積土で固く締っており上層に須恵器壺片、焼土塊を包含する。この壺片は7号横穴墓の第3層群出土の壺と接合する。(2)、(1)層と同質であるがより軟質で、やや風化が進んでいる。(1)・(2)層は閉塞部の埋土と考えられ、上面を第3層群によって削平されている。(3)、(1)・(2)層と同じく基盤層の2次堆積土であるが固く締っている。地山礫を多量に包含する。本層群は第1次追葬時の墓道内埋土と考えられる。

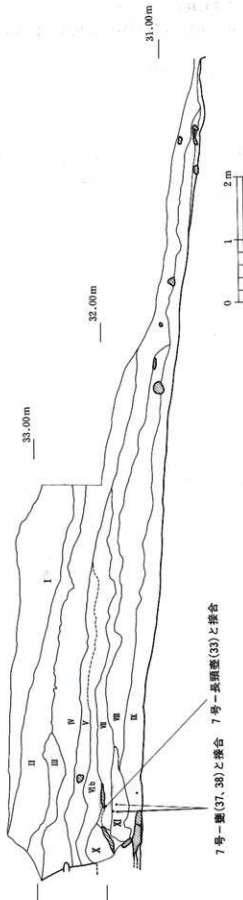
第3層群（Ⅴ-Ⅷ・Ⅹ層）は羨門壁面から墓道入口付近まで約10°前後の傾斜を持って堆積しており、最も深い所で50cm前後である。第2層群の堆積をカットしている。本層はさらに3層に細分される。下層より(1)基盤層の2次堆積土で固く締っており上面に焼土、炭化材、板石を包含する。(2)閉塞部の埋土で基盤層の2次堆積土で若干柔らかい。(3)地山の2次堆積で上層とは漸移的变化をする。下面に焼土、炭を包含する。本層群中より須恵器長頸壺片が検出された。本層群は第2次追葬時の閉塞土および墓道内埋土と考えられる。

第4層群（Ⅳ層）は羨門壁面から墓道入口付近まで、ほぼ水平に堆積したクロコ質の風化土層であり、下層に対して漸移的变化をする。旧地表面と考えられる。

第5層群（Ⅲ層）は羨門壁上面より2m程レンズ状に堆積している。基盤層の2次堆積土である。埋土の性格



第37图 6号横穴墓平·断面图

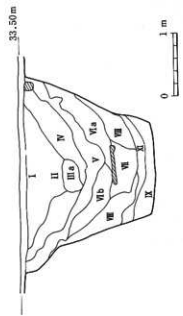


第38図 6号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

6号横穴墓土層観察表

層	色調	土の特色	層名	概	状	河瀬・層家
I	暗褐色	粘質土	ハート	褐色砂土を含む。土質・褐色の土や石灰のものを含む。土質を多量に含む。		田家土
II	暗褐色	粘質土	ハート	白色砂土を含む。多量に含む。		
III	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
IV	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
V	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
VI	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
VII	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
VIII	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
IX	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
X	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
XI	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		
XII	暗褐色	粘質土	ハート	暗褐色砂土を含む。多量に含む。		

7号一基理蓋(37, 38)と接合 7号一基理蓋(33)と接合



第39図 6号横穴墓横断土層図

については不明であるが、上部に墳丘等を想定すればその流入とも考えられる。

第6層群(Ⅱ層)は同じく羨門上面から堆積しておりクロボク質の風化土層で第4層群とは区別できない。

第7層群(Ⅰ層)は近年の造成時の流入土である。

以上の墓道内埋土の観察結果から本横穴墓では、最低3回の埋葬が行われたと考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道は長さ0.93m、羨門幅0.62m、玄門幅0.89mの逆台形状を呈す。玄室は長さ2.08m、裾部幅1.92m、奥壁幅1.7mの略隅丸方形を呈すが、コーナー部分を丸くおさめ壁間の境が明瞭でない。床面には幅5～15cm前後、深さ10cmの排水溝が玄室右側壁奥壁寄りから羨道中央を経て前庭部まで通じている。また奥壁側の溝の先端部は直径40cmの窪みとなっている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石および板石を敷きつめている。羨道から前庭部に敷かれた板石は裏面にベンガラが塗布されているところから追葬時に再利用されたものと考えられる。天井は若干崩落しているがドーム状を呈しており床面からの高さは中央付近で1.0m前後と考えられる。玄室と羨道とは段で境界を設けている。(村上久和)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 玄室の奥壁より四肢骨が散乱しており、すべて片付けられたものである。大腿骨は少なくとも2体分あり、いずれも女性らしいと推定されている。これらは後続の埋葬にあたって片付けられたと考えられるが、玄室の手前部分は落石と土砂の流入があり、人骨は全く残っていない。(田中良之)

b) 副葬品 玄室内の奥壁より裸床上に人骨2体分が検出された。遺物は、この人骨に添ってほぼ中央奥壁よりに刃先を奥壁方向にむけ刀子(第41図1)が一本検出されたのみである。

2) 墓道内

墓道部内の遺物の出土層位については、埋土の状況の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。

前庭部の右側コーナー付近において長頸蓋片1点、須恵器甕胴部片3点が出土した。周辺には、焼土、炭片が散布しており、葬送儀礼において挽火が行なわれている。なお、この甕胴部片は前述したように7号横穴墓出土甕と接合し、その大多数は7号横穴墓より出土している。また、この遺物群の上層より焼土、炭化材、閉塞石再利用の板石等が羨門周辺で検出された。これも葬送儀礼にかかる挽火等と考えられる。(村上久和)

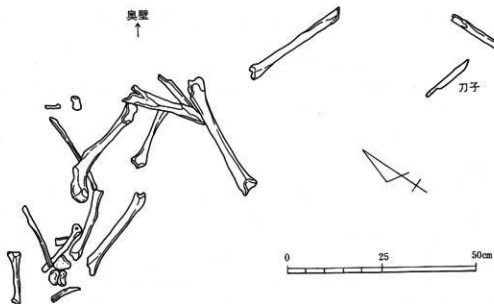
4. 6号横穴墓出土人骨の所見

四肢骨片が2体分検出されているが保存状態は非常に悪く、表面が剝離している。したがって、詳細は不明である。以下に保存部位を示す。

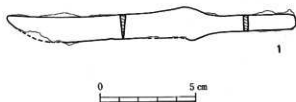
(保存部位)

上腕骨体部片(右2、左1)、右尺骨片、大腿骨(右2、左2)、脛骨片(右1、左1)、同定不能細片が少量。

(土肥直美)



第40图 6号横穴墓玄室内人骨出土状态



第41图 6号横穴墓出土器物实测图

第14表 6号横穴墓出土铁器观察表

(单位: cm)

番号	器種	全长	刃部長 (刃部)	刃幅	刃幅	刃部厚	刃厚	備考
1	刀子	15.2	9.9	1.3	0.9	0.25	0.3	

7号横穴墓

1. 立地、調査時の状況

7号横穴墓は北支群の北端部、6号横穴墓の北東5mの所に位置し南方向に開口する。墓道は築造時に8号横穴墓の玄室上を通して、さらに6号横穴墓の墓道をさけるように北東方向に湾曲している。横穴は斜面の上位、標高34m付近に設けられている。全長は16.52mを測り、玄室主軸をN-110.5°-Eにとる。墓道中央付近から南に約120°程主軸方向を変化させ弧状を呈する。横穴墓は造成時に玄室、墓道上部が削平された上、玄室内は荒らされていた。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長13m、幅は入口付近は8号横穴墓前庭部と重複して右肩部が明確でなく1.4m+ α を測り、さらに羨門付近も削平を受けており現状では上部幅1.5m、底面幅1.1mを測る。側壁高は現状で約1.5mを測る。墓道床面は凹凸を持ちながらも約5°のゆるやかな傾斜で羨門に向って上る。また、羨門付近に明確な前庭部は認められない。羨門付近中央には玄室からの排水溝が約0.8m掘られている。

羨門は天井、側壁とも崩壊が著しく、復元は困難であり、幅は床面で0.46mを測る。

閉塞施設は最終埋葬時の状況を示しており、人頭大の河原円礫が3個残るのみで他は認められない。このことから最終埋葬時には木蓋等での閉塞が考えられる。

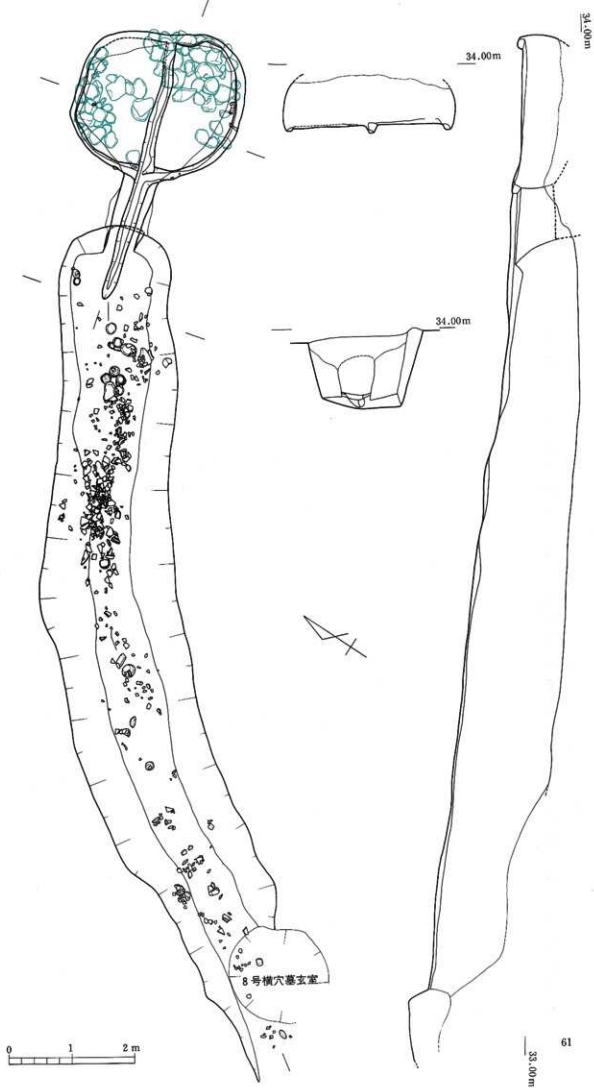
b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で5層群23層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群 (VI・VII層) は、羨門部下面から入口方向へ約11m程堆積する。入口付近は8号横穴墓の玄室上部に堆積し、最も厚い所で40cmを測る。上層とは風化土層をはさみ明瞭に区分でき、羨門付近は第4層群 (XIII層) によってカットされている。本層はさらに上下2層に区分される。(1)下層 (VII層) は基盤層の二次堆積層で硬く締っている。(2)上層 (VI層) は性状は(1)と同様であるが風化が進んでいる。本層中に坏身片が検出されたが、これは第2層群遺物と接合しており、追葬時に攪乱を受けたと考えられる。また、本層は8号横穴墓の天井陥没後、その上部に堆積している所から、9号横穴墓築造前に8号横穴墓は陥没していた可能性がある。本層群は初葬埋土と推定される。

第2層群 (IVd・Va層) は、羨門部中、下面から入口方向へ約11m程堆積する。入口付近は8号横穴墓の玄室上部に堆積し、最も厚い所で30cmを測る。上層群とは明瞭に区分できず、羨門付近は第4層群によってカットされている。本層群はさらに上下2層に区分される。(1)下層 (Va層) は基盤層の二次堆積土で硬質である。(2)上層 (IVd層) は(1)に比べきめ細かく風化が進んでいる。本層群中に遺物A群 (第44図2-11) が一括埋置状態で検出された。第1次追葬埋土と考えられる。

第3層群 (III・IVa-c層) は、羨門付近上~中面から入口方向へ12m程堆積する。入口付近は8号横穴の閉塞石上部に堆積し、最も厚い所で50cmを測る。上層とは風化土層をはさみ明瞭に区分でき、羨門付近は第4層群によってカットされている。本層はさらに3層に区分される。(1)下層 (IVb・c層) はきめ細かいクロボク質の風化土層である。(2)中層 (IVa層) は基盤層の2次堆積土であるが風化が進み、上層 (III層) とは漸移的に変化する。(3)上層 (III層) はきめ細かいクロボク質の風化土層である。本層群中には墓道中央付近を中心に甕、坏、甗、長頸壺等の破砕散布が認められた。長頸壺 (第45図33) は4号横穴墓の第4層群の遺物、6号横穴墓の第2層群遺物と、甕 (第45図37) は4号横穴墓の第4層群遺物と、甕 (第46図38) は4・6・9・10号横穴墓出土土器と接合する。本層群は上部が削平されているためにその解釈に苦しむが、他例から推定して埋葬後の墓前祭に関わる層群と理解したい。

第4層群 (IX~XIII層) は、羨門から入口方向へ約2.5m程堆積している。1~3層群をカットして埋土を行う。



第42图 7号横穴墓平·断面图

最も厚い所で約100cmを測る。本層はさらに5層に区分されるが、基盤層からなる粘質の土壌を互層にして堆積しており全て閉塞埋土と考えられる。本層群中に、遺物B群(第44図1・4・5)が一括埋置状態で検出された。本層は最終埋葬時の埋土と考えられる。

第5層群(I・II層)は基盤層の二次堆積土でコンクリート片等を包含するところから近年の造成土と考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道、玄室ともに近年の造成によって天井、側壁が削平を受けているとともに内部を攪乱されており、ほとんど旧状を留めてない。羨道部床面は長さ1.25m、玄門幅0.6mと若干長いのが特徴である。玄室は長さ2.23m、裾部幅2.25m、中央幅2.65m、奥壁幅1.9mのやや胴張りの略隅丸方形を呈し、床面には幅20cm前後、深さ10cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめていたと考えられるが、後世の攪乱によって旧状はほとんど留めてない。天井および周壁は崩落が激しく高さは不明である。奥壁の残存の形状からドーム状を呈すると推定される。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

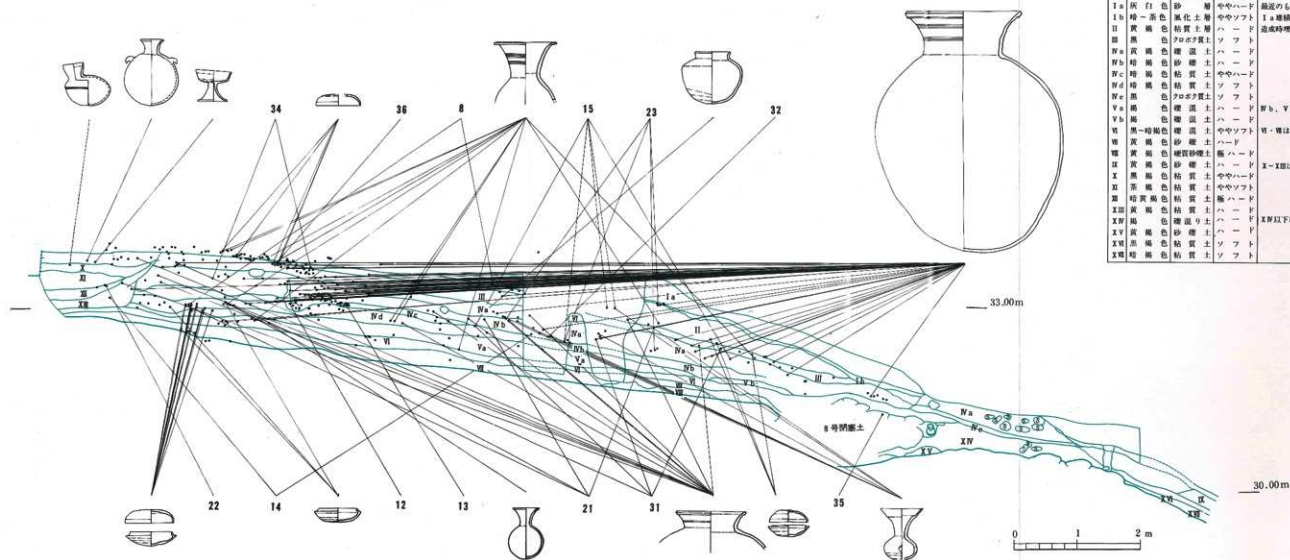
玄室内には攪乱と造成による土壌がびっしり堆積していた。清掃後に右裾部で鉄鍬片が左・右側壁ざわ中央で人骨および馬下肢骨片が検出されたが、全体に攪乱を受けており原位置は保っていない。なお、馬骨については玄室上面より検出されたところから後世に投棄されたものと推定される。

2) 墓道内

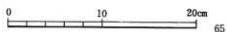
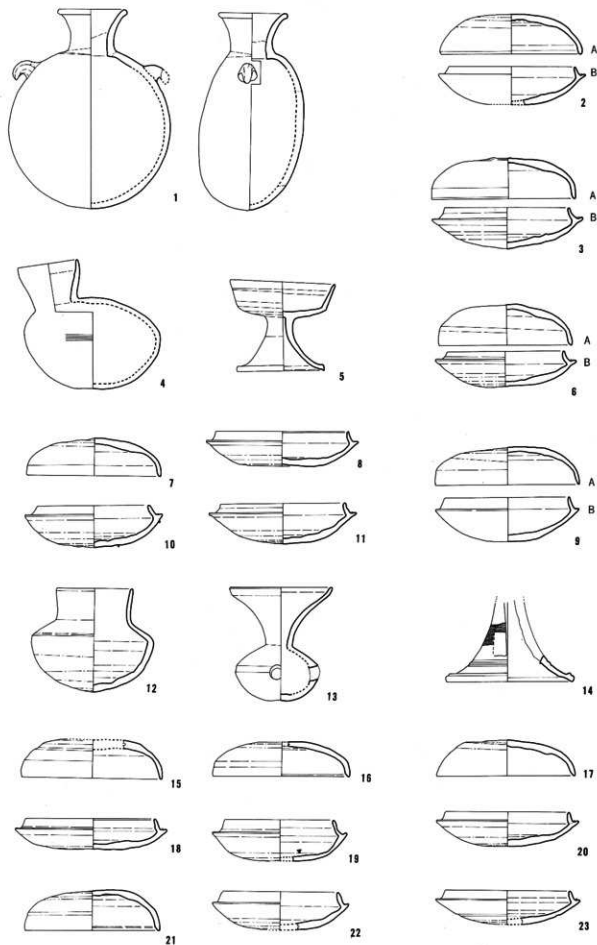
墓道内の遺物の出土層位については墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状態の特徴について述べる。まず、第2層群中では羨門より入口方向へ2m付近ほぼ中央で遺物A群(第44図2~11)が一括埋置の状態で見出された。これは須恵器坏蓋、坏身で構成され、埋置状況は上面に坏蓋・身を2セット正置し、その左側や下面に坏蓋・身を1セット正置し、1セット倒置させる。その右側に坏蓋1個を倒置し、坏身2個を正置させる。このA群上面に人頭大の河原円礫を1個置く。第3層群では須恵器坏蓋、坏身、直口壺、甗、高坏、長頸壺、甕、土師器直口壺の破砕散布状態が墓道中央を中心に認められる。また、墓道中央よりやや入口方向の地点の墓道中央に須恵器壺(第45図29)が完形で倒立した状態で置かれている。なお、遺物の接合関係については墓道内埋土の項に記した。第4層群では、羨門壁左コーナー付近で須恵器提瓶1個(第44図1)、高坏1個(第44図5)が、同右コーナー付近で須恵器平瓶(第44図4)が検出された。埋置状態は提瓶、高坏ともに斜めに正置させる。平瓶も正置させている。(村上久和)

7・8号横穴墓土層観察表

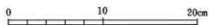
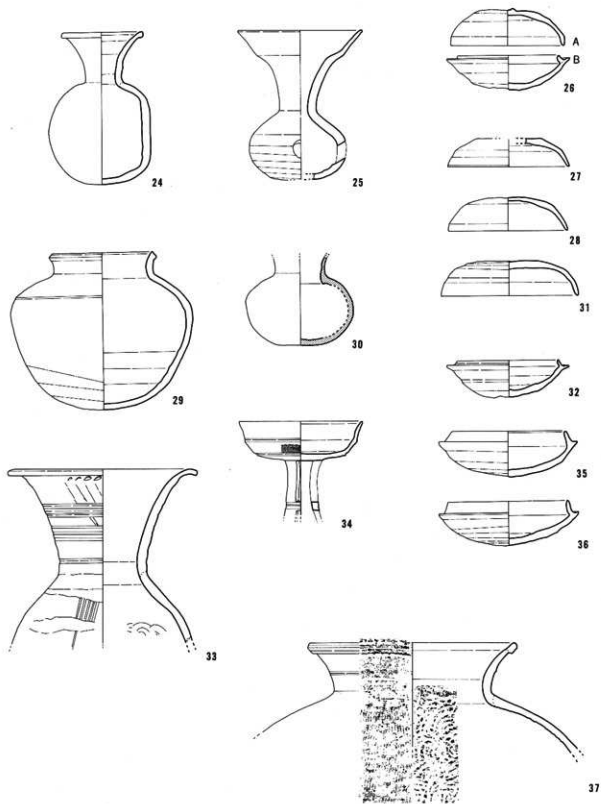
層	色調	主な特色	硬さ	厚層・解釈
Ia	灰白	砂	やや硬	最近のもの
Ib	暗赤色	風化土層	ややソフト	I a層直下の土
II	黄褐色	粘質土層	ハード	造夜時埋土
III	黒色	Proto質土	ソフト	
IVa	黄褐色	粘質土	ハード	
IVb	暗褐色	砂質土	ハード	
IVc	暗褐色	粘質土	ややハード	
IVd	暗褐色	粘質土	ソフト	
IVe	黒色	Proto質土	ソフト	
Va	褐色	雑土	ハード	IVb, Vaは造夜埋土
Vb	褐色	雑土	ハード	
Vc	黄褐色	粘質土	ややソフト	IV-Vaは河原埋土
VI	黄褐色	砂質土	ハード	
VII	黄褐色	硬質砂質土	ハード	
VIII	黄褐色	砂質土	ハード	
IX	黒褐色	粘質土	ややハード	I-XIVは最終埋土層埋土
X	赤褐色	粘質土	ややソフト	
XI	暗褐色	粘質土	ハード	
XII	黄褐色	粘質土	ハード	
XIII	黄褐色	粘質土	ハード	
XIV	黄褐色	粘質土	ソフト	
XV	黄褐色	粘質土	ソフト	
XVI	黄褐色	粘質土	ソフト	
XVII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XVIII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XIX	黄褐色	粘質土	ソフト	
XX	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXI	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXIII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXIV	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXV	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXVI	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXVII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXVIII	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXIX	黄褐色	粘質土	ソフト	
XXX	黄褐色	粘質土	ソフト	



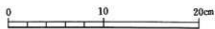
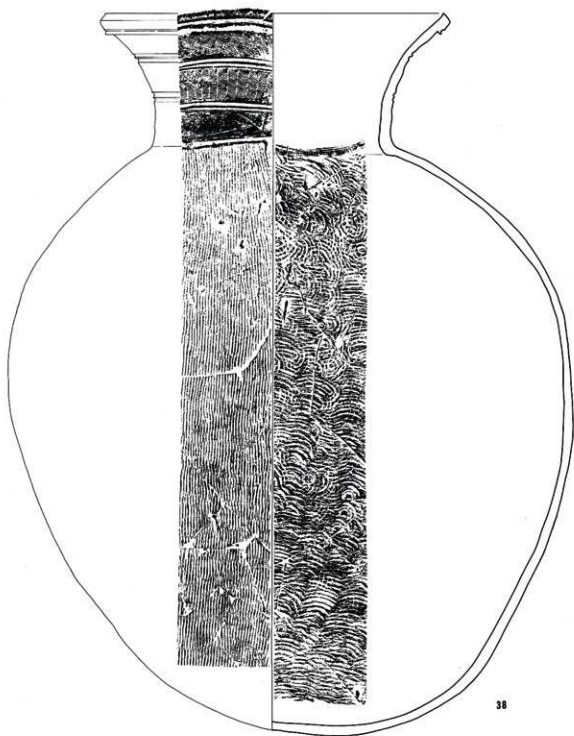
第43図 7・8号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第44图 7号横穴墓出土遗物实测图(1)



第45图 7号横穴墓出土物实测图(2)



第46圖 7号横穴墓出土遺物実測図(3)

第15表 7号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色				備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土		
1	提瓶	・7.4 ・21 ・17	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈し、外面両対にツノ状の把手がつくが、一方の半分は欠損している。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰白色	1-3mmの砂粒を含む	良好	
2 A	坏蓋	・15 ・4.3 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰褐色	細砂粒を微量含む	やや不良	
2 B	坏身	・15 ・4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰白色	2mm程度の角閃石粒を微量含む	不良	全体的に器面が磨減している
3 A	坏蓋	・15.2 ・4.3 ・一	口縁部はほぼ直下へのび、端部は丸い。外面には縁がうすくみとめられる。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	器面が磨減しているため調整不明	淡褐色	角閃石粒を微量含む	不良	
3 B	坏身	・13.2 ・4.3 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	灰褐色	1mm前後の砂粒を微量含む	良好	
4	平瓶	・6.2 ・13.5 ・14.3	口頸部は上外方へのび、端部はやや内湾するようにのび丸い。胴部最大径はやや中央にある。底部は丸みをおび、やや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	1-3mmの白色透明砂粒を少量含む	良好	
5	高坏	・11 ・8.9 ・一	坏部の口頸部は上外方へのび、端部は丸い。外面には口頸部と坏底部の縁に縁がある。脚部は下外方へのび、端部は圓をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1-4.5mmの白色砂粒を少量含む	良好	
6 A	坏蓋	・14.3 ・4.2 ・一	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	器面が磨減しているため調整不明	器面が磨減しているため調整不明	淡褐色	角閃石粒を含む	不良	
6 B	坏身	・12.3 ・3.6 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	砂粒、角閃石粒を少量含む	良好	
7	坏蓋	・14 ・4 ・一	口縁部はほぼ直下へのび、端部は丸い。天井部は低くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ後ナデ	淡灰褐色	細砂粒を少量含む	やや不良	
8	坏身	・14 ・3.7 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はわずかに上外方へのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	細砂粒を含む	良好	
9 A	坏蓋	・15 ・4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰白色	2mm程度の角閃石粒を少量含む	不良	全体的に器面が磨減しているため調整不明

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
9	坏身	・13 ・4.6 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	器面が磨減しているため調整不明	器面が磨減しているため調整不明	淡黄褐色	1mm前後の黒色砂粒を含む	良好		
10	坏身	・11.2 ・4.4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はやや浅く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗赤褐色	1-2mmの砂粒を含む	良好		
11	坏身	・13 ・4.3 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	やや不良		
12	直口罫	・8 ・11.1 ・12.8	口縁部は直立してのび、端部は丸く外面に沈線を有す。胴部最大径は全体よりも、やや上方にあり、そこに沈線がある。底部は丸く深い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-2mmの白色砂粒、黒色砂粒を少量含む	良好		
13	罫	・10.8 ・12 ・8.9	口縁部は上外方にのび、端部は丸い。胴部は、だ円形を呈し、中央部に穿孔が施されている。	回転ナデ	回転ナデ 不定方向ヘラケズリ	暗灰褐色	細砂粒を微量含む	良好		
14	高坏	・15.4 (底径) ・8.4 ・—	脚部は下外方にのび、端部は段をなした面をなす。スカシ窓がある。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	砂粒を微量含む	良好		
15	坏蓋	・14.8 ・4 ・—	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。外面には横はみとめられない。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰褐色	細砂粒を微量含む	良好		
16	坏蓋	・14.3 ・3.6 ・—	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は低く平ら。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	細砂粒を微量含む	良好	反転復元	
17	坏蓋	・14.2 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平ら。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	白灰色 黄褐色	細砂粒を多量に含む	良好		
18	坏身	・13.5 ・3.2 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平ら。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明白灰色	細砂粒を少量含む	良好		
19	坏身	・11.2 ・4.2+ ϕ ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く平ら。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰褐色	1-3mmの細砂粒を多量に含む	やや不良		内面底部「1」
20	坏身	・— ・— ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平ら。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	細砂粒を微量含む	良好		
21	坏蓋	・14 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く内傾する面を有す。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5-2mmの砂粒を含む	良好		

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色				備 考	へう記号 の有無	
				内 面	外 面	色 調	胎 土			焼 成
22	坏 身	・12.1 ・4.1 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は短く上外方にのび丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 目柱ヘラナズリ	明灰褐色	細砂粒をや や多量に含 む	良好	反転還元	
23	坏 身	・13.1 ・4.3 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平ら。	調整ナデ 回転ナデ	目柱ヘラナズリ 回転ナデ	灰褐色	細砂粒を微 量含む	良好		
24	罎 瓶	・8 ・16 ・11.1	口頸部は外反しながらのび、端部はわずかに面をなし丸い。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	灰白色～暗 灰色	細砂粒を微 量含む	良好		
25	罎	・13 ・15.8 ・10.2	口頸部は上外方にのび、端部にいくにつれて、さらに外方へ屈曲し、端部は丸い。体部はだ円形。	回転ナデ	回転ナデ 目柱ヘラナズリ	黒灰色	1～2mmの 白色砂粒を 微量に含む	良好		
26 A	坏 蓋	・12 ・3.7 ・—	口縁部はほぼ直下へのび、端部は丸い。天井部はやや高く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ	暗灰褐色 暗茶褐色	細砂粒を微 量含む	良好		
26 B	坏 身	・10.6 ・3.5 ・—	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 調整ナデ	暗灰褐色 暗茶褐色	細砂粒を微 量含む	良好		
27	坏 蓋	・12.8 ・2.9 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	明灰褐色	細砂粒を微 量含む	良好	反転還元	
28	坏 蓋	・12.6 ・3.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平ら。	器面が磨減 しているため 調整不明	器面が磨減 しているため 調整不明	淡黄褐色	0.5mm 前後 の黒色砂粒 を含む	不良		
29	壺	・10.5 ・16.4 ・18.9	口頸部は、わずかに外反しながらのび、端部は外傾する面を有す。胴部最大径は全体の上方にある。底部は深くやや丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 目柱ヘラナズリ カキ目	明灰色	1～5mmの 砂粒を微量 含む	良好		
30	直口 壺	・— ・9.2+ ϕ ・11.3	口頸部はほぼ直立してのびる。胴部は全体的に、だ円形で底部は平ら。	器面が磨減 しているため 調整不明	回転ナデ 胴部中間部 5位にかけ、 ヘラミガキ 痕がみられる	赤褐色	1～3mmの 白色透明砂 粒を微量含 む	不良	土師器	
31	坏 蓋	・14.5 ・3.6 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がうすくみとめられる。天井部は低く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 目柱ヘラナズリ	明灰褐色	細砂粒を微 量含む	良好		
32	坏 身	・10.6 ・3.9 ・—	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平へのび、端部は丸い。底部はやや深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ	暗灰褐色	1～3mmの 砂粒を微量 含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
33	長頸壺	・20 ・— ・—	口頸部は上外方にのび、肩部は面をなすが、丸みをおびる。胴部は下外方にのびる。	回転ナデ へら 同心円タタキ	へら状工具による押圧後、斜方向条線、回転ナデ 平行タタキ	明灰褐色	細砂粒を含む	良好	4号墓道出土遺物と接合	
34	高坏	・13 ・— ・—	口頸部は外反しながらのび、肩部は丸い。外面には2ヶ所、稜がみとめられる。胴部は下方へのび二段のスカシ窓がある。	回転ナデ	回転ナデ 櫛掻波状文	黒灰色 灰褐色	砂粒を含む	良好		
35	坏身	・11.9 ・4.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部はほぼ水平にのび、底部は丸い。底部は深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転へらケズリ	灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好		
36	坏身	・12.6 ・4.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は上外方にのび、底部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転へらケズリ	灰褐色	1～3mmの細砂粒を含む	良好		
37	壺	・21.8 ・7+ ・—	口頸部は外反しながらのび、肩部は段をなし丸い。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 櫛掻波状文 タタキの後 カキ目	灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	4号、10号墓道出土遺物と接合	
38	壺	・35.8 ・75.2 ・48.6	口頸部は外反しながらのび、肩部は段をなし、その下方に沈線あり。外面に2ヶ所2条の沈線あり。胴部は長円形で底部は丸い。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ 波状文	灰色	石英粒を含む	良好	4号、6号、9号墓道出土壺片と接合	



44図-19

第47図 7号横穴墓出土土器へら記号

8号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

8号横穴墓は、北支群北寄りの斜面にあり7号横穴墓築造時に天井部等が破壊されている。横穴主軸をN-56.5°-Eにとり西方向に開口する。標高は31m前後で斜面の下位に立地する。全長は4.35mを測る。保存状態は7号横穴墓築造時に若干の破壊を受けた以外は良好である。調査は7号横穴墓の調査中に新たに検出された関係上7号横穴墓埋土との関係、前庭部プランの確認、閉塞施設の調査、支室内流入土の除去、支室内の構造確認、横穴上部の「テラス状遺構」の確認等を行なった。

本横穴墓は、調査概報「Ⅱ（1983）」で7号横穴墓としたものである。

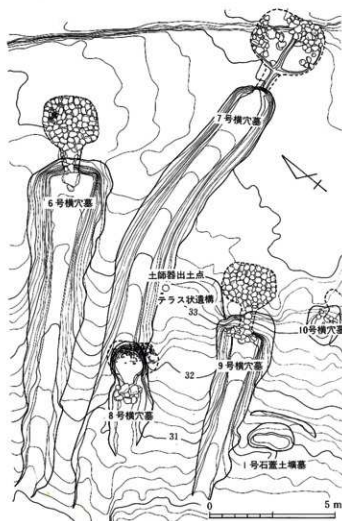
2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

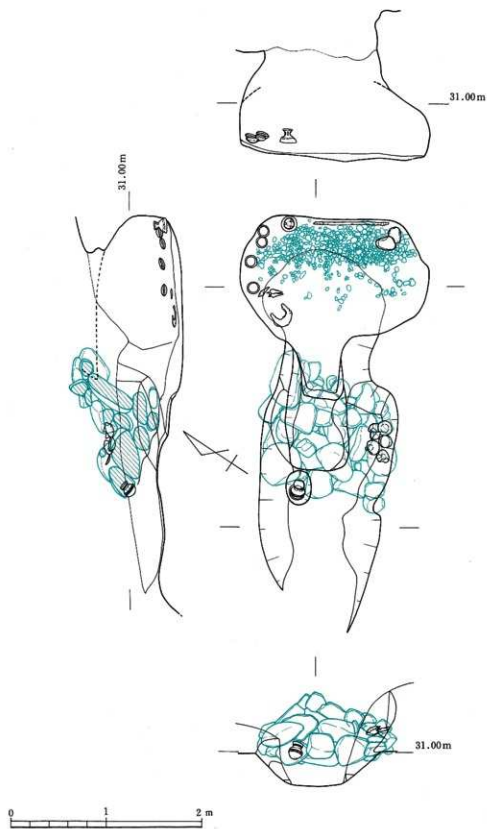
a) 規模、構造 前庭部は、長さ約2.38m、下幅は先端で0.75m、羨門付近で1.02mを測るやや長めの逆台形を呈している。斜面下位に立地する関係上、旧表土は流失しており前庭部先端の切り込み面は明瞭でない。しかしながら地山礫を多量に含んだ基盤層からの切り込みは推定ながら認められ、切り込み部分から前庭部床面までの深さは約0.2mを測る。前庭部床面は凹凸が若干あるがほぼ水平に羨門へ続き先端より1.45m付近で10cm程段落ちして羨門部に達する。側壁の傾斜は左右で若干違うが50~70°前後を測る。

羨門部分は天井、側壁部分とも崩壊が著しく旧状を留めてない。側壁下部と閉塞施設の状況から復元される羨門は幅0.62m、高さ0.8m前後と推定される。また床面は約40°の傾斜で支室に向けて10cm程段落ちしている。

閉塞施設は河原および地山円礫を使用し入念に構築されているが、これは最終埋葬時の状態を示している。まず前庭部下部に初葬時の埋土が20cm程堆積しその上に基底部をつくる。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の5工程に分けられる。第1工程は幅、厚さとも20cm、長さ40cm前後の扁平な円礫3個を先の埋土に埋め込む。第2工程は幅、厚さとも20~30cm程度の石9~10個で第1工程の石を根石として平坦面をつくる。これが、追葬時の最下面と考えられる。第3工程は50cm以上の大型の地山円礫を2個で第2工程の石を根石として羨門を覆う。第4工程は10~20cm程度の円礫を20個程度で第2工程の石を根石として第3工程の石を支え、隙間を覆う。第5工程は幅、厚さとも40~50cm前後の大型の円礫を10数個と人頭大円礫10数個を使用して1~4工程までの石を支える状態で全体を覆う。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。



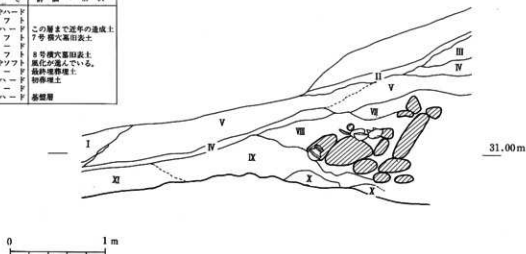
第48図 8号横穴墓テラス平面図



第49图 8号横穴墓平·断面图

8号横穴墓土層観察表

層色調	主な特色	硬さ	詳細・解説
I	灰白色	ややハード	
II	暗茶色	ソフト	
III	黄褐色	硬くクラック	この層まで近年の造成土
IV	黒色	クロボク質	7号横穴墓田表土
V	暗褐色	硬く含む	ハード
VI	暗褐色	硬く含む	ソフト
VII	暗褐色	硬く含む	8号横穴墓田表土
VIII	暗褐色	硬く含む	風化の進んでいる、最終埋土
IX	暗褐色	硬く含む	ハード
X	暗褐色	硬く含む	ハード
XI	暗褐色	硬く含む	基礎層
XII	暗褐色	硬く含む	ハード



第50図 8号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土は、その性状から比較的明瞭な層区分が可能であり全体で6層群11層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群 (XI層) は横穴墓形成時の基盤層で、急斜面の為か上部にあったと考えられる旧表土は流失している。横穴墓はこの基盤層上面から掘り込まれている。

第2層群 (IX層) は閉塞石下面約1m前後の範囲でほぼ水平に約10cm前後堆積している。性状は基盤層の二次堆積で上面は固く締っており初葬時の埋土と考えられる。

第3層群 (VIII層) は羨門から約1.8mの範囲に約15°の傾斜を持ち、最も厚い部分で約50cmの堆積が認められる。性状は基盤層の二次堆積土でピット内埋土として層に分離される。本層が閉塞埋土の中心をなす。また、本層の上面に土器の配列埋置を検出した。第1次追葬埋土と考えられる。

第4層群 (V～VI層) は羨門上部約1.0mの範囲に15°の傾斜を持ち、最も厚い部分で約15cmの堆積が認められる。性状は基盤層の二次堆積で閉塞上面を覆う層である。

第5層群 (II～IV層) は3～4層全体を覆っている。約3mの範囲に15°の傾斜を持ち最も厚い部分で約10cmの堆積が認められる。性状は風化の著しいクロボク質土層で下位層とは漸移的な変化を示す。本層が8号横穴墓築造時の地表面である。風化の度合により上面に築造された7号横穴墓との間には、時期差があることがわかる。

第6層群 (I層) は本横穴墓全体を覆っており、約15°の傾斜で堆積する。性状は基盤層の2次堆積土である。下位層とは明瞭に分けられる。7号横穴墓前庭部内埋土と考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道は玄室に向って広がり、羨門部床面で幅0.4m、玄門部床面で幅0.72m、長さ0.66mを測る。床面は、羨門付近で幅10cm、高さ10cm、約40°の傾斜で玄室に向って段落し、その後約10°の傾斜で玄室に向って下降している。天井部は崩落して不明であるが閉塞施設等から推定して0.8m前後と考えられる。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ1.25m、幅1.98mを測る。高さは天井部が大部分崩落しているため明確でないが、約0.9m前後と推定される。床面は標高30.55mでほぼ平坦である。床面には羨道部から玄室全面に5cm程度基盤層起源の粘質土による埋土を行っている。玄室やや奥壁よりには南北に長さ1.7m、幅0.6mの範囲で、直径7cm以下の河原円礫を散布し礫床としている。なお、礫床南側端に径20cm前後の扁平な河原円礫2個を置き石枕としていたと考えられる。羨道、玄室内の天井および壁部には部分的にペンガラが認められるところから、当初は全面に塗布されていたと推定される。

3) テラス状遺構

本横穴墓の羨門壁頂部の東斜面上約5.0m付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、北側部分は7号横穴墓道によって削られているが隅丸方形を呈し南北長約2.9mを測る。上端線は現状では標高33.5mであり約20cmの段差を持つ。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には人骨は全く遺存していなかったが、遺物の配置状況より若干の手がかりはつかめる。鉄器は、玄室内礫床上奥壁ぎわに鉄刀一振が奥壁と並行して刃先を南向き、刃部を西向きに置かれている。南頭位とした人骨（推定1号人骨）の右腕に沿って置かれたものと考えられる。同礫床上中央付近に刃先を南向きにした鹿角装刀子1点が置かれている。これも推定1号人骨の胸部に置かれたものと推定される。また、玄室ほぼ中央の左側壁付近に細根鎌3本、広根鎌2本が刃先を北方向に向け置かれている。推定1号人骨の左足方に配置されていたと考えられる。さらにこの鉄鎌群より羨道方向へ約10cmの位置に、鉄製U字鋤先が刃先を羨道方向に向けて検出された。これはレベル的には基盤直上に置かれ、上部に粘質埋土が覆う。刃先周辺にはベンガラが集中が見られた。埋置された位置から推定して柄部は装着されていない可能性が高い。なお、本鋤先については、副葬した人骨を特定できない。

玄室左側奥壁に接して須恵器高坏1個体が、それより北奥壁と側壁のコーナー付近に須恵器坏身2個体が並列して、その約10cm東側側壁ぎわにも同じく一各体、その約15cm東側に同じく一各体がそれぞれ正置して埋置されていた。

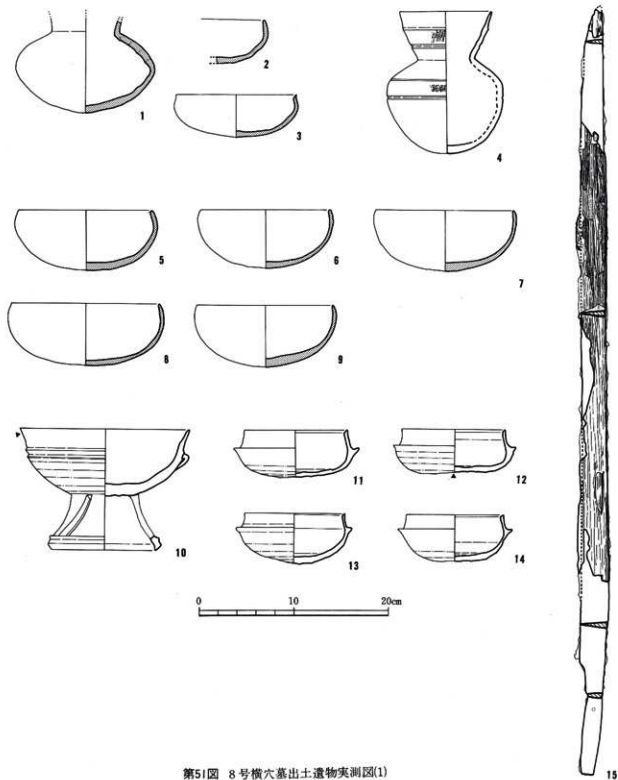
なお、前庭部土層観察から追葬が認められた。追葬時の埋葬人骨の位置等は確定できないが、左側壁中央の土器間に若干の空間があり周辺にやや大型の円礫が認められることから、この周辺に頭位のあった可能性は大きい。

2) 前庭部内

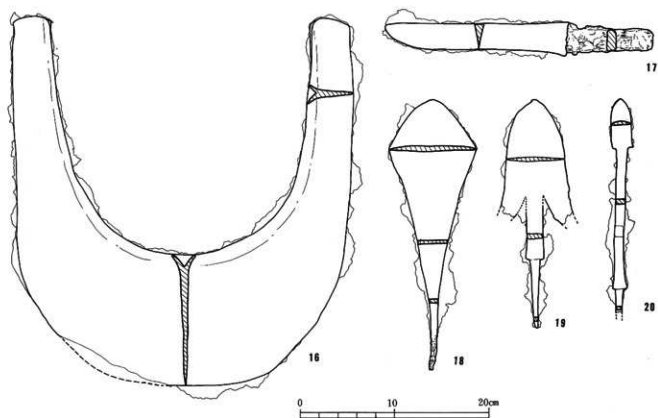
前庭部右肩部閉塞石上および同左先端部の埋土最上層中に、土師器埴5個体と須恵器長頸壺1個体がそれぞれ検出された。土師器埴は羨門方向から前庭部先端に向けて5個体正置されており、ピットを掘って埋められたと考えられるが、掘り方等は埋土の状態が近似していた上に調査時が夏場で乾燥が激しかったため検出できなかった。須恵器長頸壺は直径20cm、深さ20cmのピットを掘りそこに口縁部を若干羨門方向に傾けた状態で正置されていた。

3) テラス状遺構内

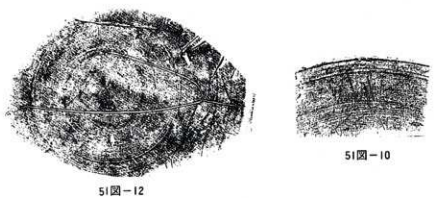
テラス状遺構の段落ち中央付近で土師器直口壺1個体、埴2個体を検出したが、ともに木根等により原位置より遊離していた。(村上久和)



第51图 8号横穴墓出土遗物实测图(1)



第52図 8号横穴墓出土遺物実測図(2)



51図-12

51図-10

第53図 8号横穴墓出土土器へラ記号

第16表 8号横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	直口壺	・一 ・5+ π ・14.5	胴部最大径は、やや中央部にある。底部は、深くとがりぎみで丸い。	ナデ	ナデ	褐色	2-3mmの砂粒を含む	やや不良	土師器	
2	罎	・一 ・一 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。	ヘラケズリの後指ナデ	ナデ ヘラケズリ	褐色	1-2mmの石英粒を含む	不良	土師器	
3	罎	・12.6 ・4.5 ・13	口縁部は、外湾しなごらのび、端部は外へ屈曲し、細くなり丸い。底部は、やや深く丸い。	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	黄褐色 淡褐色	1-2mmの石英粒を含む	やや不良	土師器	
4	長頸壺	・9.6 ・14.8 ・12.2	口頸部は、短く外方へのび、沈線と凸帯をもち端部は丸い。胴部最大径は、上半にあり底部は、深く丸みをおびる。	波状文	波状文	青灰色	石英粒を多量に含む	良好		
5	罎	・14.2 ・6.3 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	細いヘラミガキ	細いヘラミガキ	淡褐色 淡黒褐色	精緻	やや不良	土師器	
6	罎	・13.8 ・6.1 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヘラミガキ	ヨコナデ	淡黄褐色	精緻	不良	土師器	
7	罎	・14.6 ・6.4 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヘラミガキ	横方向の巾のせまいヘラミガキ後ナデ 巾広のヘラミガキ ヨコナデ	赤褐色	精緻	良好 堅緻	土師器 (部分的にスス付着)	
8	罎	・15.6 ・6.4 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヘラミガキ	ヨコナデ 細いヘラミガキ 幅広のヘラミガキ	淡褐色	精緻	良好	土師器	
9	罎	・14.3 ・6.5 ・一	口縁部は、内湾しなごらのび、端部は丸い。底部は、深くややとがりぎみで丸い。	細いヘラミガキ	細いヘラミガキ	淡褐色	精緻	良好	土師器	
10	高坏	・18 ・12.7 ・一	坏部は上外方へのび、端部は丸い。外面には断面三角形の稜が、2本みられる。底部は深くやや平ら。脚部は下外方へのび、端部近くに凸帯をめぐらし段をなす。脚部三方向に台形(長方形)スカシ窓あり。	回転ナデ 細いヨコナデ 細いカキ目	ヨコナデ 回転ヘラケズリ 細いカキ目	青灰色	石英粒を多量に含む	やや不良		外面坏部口縁部に「V」のへら記号有
11	坏身	・10.9 ・4.9 ・一	たちあがりは、内傾しでのび、端部は、うすい段をなす。受部は、上外方へのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヨコナデ 調整ナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3mmの石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
12	坏身	・11.1 ・4.5 ・一	たちあがりは、内傾しでのび、端部は内傾する面をなす。受部は、ほぼ水平へのび、端部は丸い。底部は深くやや平ら。	ヨコナデ 調整ナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3mm大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		外面底部「V」

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
13	坏身	・10.7 ・5.2 ・—	たちあがりは、わずかに内傾しながらのび、端部は面をなす。受部は、ほぼ水平にのび端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヨコナデ調整ナデ	・ヨコナデ ・回転ヘラケズリ	青灰色	1～3mmの石英粒を多量に含む			
14	坏身	・10.4 ・4.8 ・—	たちあがりは、内傾してのび、端部は内傾する面をなし、その中にわずかに凹面をなす。受部は、細く上外方にのび、端部は丸い。底部は、深く丸い。	ヨコナデ調整ナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色 青灰色	1～3mmの石英粒を多量に含む			

第17表 8号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器 種	全 長	頸部長 (刀部)	刀 幅	頸 幅	刃部厚	頸 厚	備 考
15	直刀	81.2	69.0	2.8	1.6	0.6	0.5	木質鞘の一部残存
16	鏃先	20.0		6.9		0.5		
17	刀子	14.1	9.6	1.4	1.1	0.5	0.45	鹿角製鞘の残存
18	鉄鏃	14.1	10.4	4.5	0.5	0.25	0.2	木質残存
19	同上	12.0	5.1	3.1	0.8	0.2	0.25	
20	同上	11.2以上	2.5	1.0	0.5	0.2	0.25	

9号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

9号横穴墓は北支群の北端部、8号横穴墓の北東5mの所に位置し南西方向に開口する。横穴は、斜面の中位、標高33.1m付近に設けられている。全長は9.02mを測り、主軸をN-56.5°-Eにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。閉塞施設除去後、玄室内に人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第2解剖学教室の協力を得て玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長6.4m、幅は入口で上部幅2.0m、羨門部で上部幅1.9m、底面幅1.1mを測る。側壁高は羨門部で約1.4mを測る。墓道床面は凹凸を持ちながらも約5°のゆるやかな傾斜で羨門に向かって上る。なお、墓道入口から約4.5m羨門方向へ寄った位置までは墓道幅が狭く、その後羨門まで拡がる逆台形状を呈し、いわゆる前庭部をつくる。この部分の中央には玄室からの排水溝が約1.1m掘られており、その溝の端部付近が床面上で約20cmのゆるい段となっている。排水溝には人頭大の河原円礫を2個蓋石として使用している。羨門壁は南側上部が若干崩れているが、60°前後の傾斜をもち、側壁とはほぼ直角に接している。側壁は70~80°前後の傾斜で立ち上がる。

羨門部分は崩落しているが、断続的に残っている部分から復元すると羨門左側のみに深さ5cmの額縁状の掘り込みを設け、その内側に高さ0.7m、幅0.49mの羨門が穿たれている。

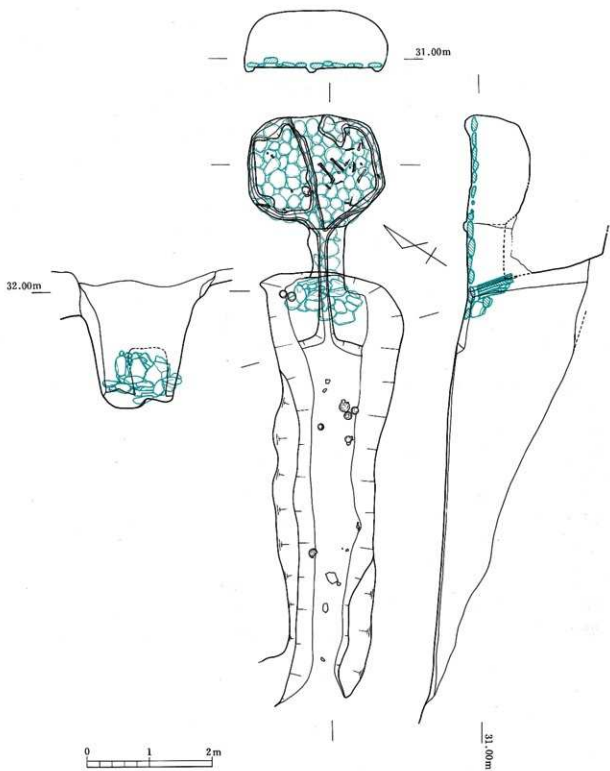
閉塞施設は板石と河原円礫および地山包含円礫を使用して追葬が行われたにもかかわらず、この種の横穴墓としては稀に入念な構築をしている。まず、前庭部下部に初葬時の埋土が約20cm程堆積し、その上に長さ50cm、幅20cm、厚さ10cmの扁平な河原石を1個置き基底部をつくる。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の5工程に分けられる。第1工程は縦40cm、横30cm前後の板石を河原石を根石とし羨門の両端に立て隙間を塞ぐ。第2工程は羨門中央に残った隙間を40×30cm前後の板石を立て隙間を塞ぐとともに第1工程の石の支えとする。第3工程は40×30cm前後の板石からなり、河原石を根石として第2工程の板石の全面支えとして左方から石を重ねて立てかける。以上が板石を使用した工程であるが、これらの板石には表表面ともベンガラ等は認められない。第4工程は人頭大の河原円礫10個前後からなり、埋土を基底部として第1~3工程の板石の下面を支え隙間を覆う。第5工程は拳大の地山円礫5個前後を板石が動かないように板石頂部に置く。この配石後に閉塞石全体が隠れるように羨門壁中程まで埋土がなされる。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で5層群13層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群(Ⅴ・Ⅵ層)は羨門下面から墓道入口付近まではほぼ水平に30cm前後堆積している。溝蓋石、閉塞基底部石を包含する。本層は上下2層に分離される。下層より(1)基盤層の2次堆積土で固く締っている。上層とは漸移的に変化する。(2)クロボク質の風化の進んだ層で、羨門より3m入口方向へ行った所より墓道入口付近まで堆積する。羨門付近は第2層群によって削平されている。本層群は初葬時の墓道埋土と考えられる。

第2層群(Ⅶ層)は羨門部分から墓道入口付近まで堆積している。羨門付近では30°の傾斜をもち、その他では、ほぼ水平に堆積している。本層は性状からさらに3層に細分される。下層より(1)基盤層の2次堆積土で固く締っている。上層とは漸移的に変化する。遺物B群を包含する。(2)基盤層の2次堆積土で固く締っているが若干風化が進んでいる。上層とは漸移的に変化する。閉塞石全体を覆い、遺物C群を包含する。(3)基盤層の2次堆積土であるが、礫をほとんど含まず固く締っている。本層群は追葬時の閉塞および墓道埋土と考えられる。

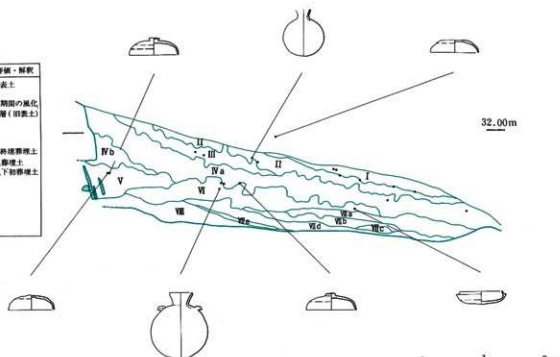
第3層群(Ⅷa層)は羨門壁上面から墓道入口まで約20°の傾斜で20~50cm前後堆積している。クロボク質の



第54图 9号横穴墓平·断面图

9号横穴墓土層観察表

層	色	調	主な特色	硬さ	詳細・解釈
I	黄	褐色	クロボク質土	ややハード	墳表土
II	黒	色	クロボク質土	ソフト	長期間の腐化土層(墳表土)
III	明	褐色	ローム質土	ハード	
IVa	暗	褐色	クロボク質土	ソフト	
IVb	暗	褐色	硬直り土層	ハード	城外遺葬埋土
V	暗	褐色	硬直り土層	ハード	追葬埋土
VI	暗	褐色	クロボク質土	ソフト	以下初葬埋土
VII	暗	褐色	硬直り土層	ハード	
VIII	暗	褐色	硬直り土層	ハード	
IX	暗	褐色	硬直り土層	ハード	
X	暗	褐色	硬直り土層	ハード	
XI	暗	褐色	硬直り土層	ハード	



第55図 9号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

軟質な層である。本層が日表土と考えられる。

第4層群(III層)は羨門壁上面から0.5m墓道入口方向へ行った位置から2.5mの範囲に約20°の傾斜をもち30cm前後堆積している。上層とは漸移的に変化する。上面に遺物A群(須恵器提瓶、甕片)を包含する。本層は埋葬後の葬送儀礼に係わる墓道埋土と考えられる。なお、遺物A群中に含まれる甕片が8号横穴墓墓道遺物と接合する。

第5層群(I・II層)は羨門壁上面から1m墓道入口方向へ行った位置から墓道入口まで約20°の傾斜を持ち20cm前後堆積したクロボク質の日表土である。

以上の墓道埋土の観察結果から本横穴墓では、最低2回の埋葬と最低一回の埋葬に関わらない祭祀儀礼が行われている。

2) 羨道、玄室

羨門は長さ0.9m、幅は玄門で0.63mと羨門とはほぼ同じである。玄室は長さ1.6m、裾部幅2.2m、奥壁幅1.95mの平入り略隅丸長方形を呈す。壁のコーナー部分が丸くおさめられ壁間の境が明瞭でない。床面には幅20cm前後、深さ10cm前後の排水溝が両壁および中央に設けられているが、奥壁右側は明瞭でない。中央の溝は羨道中央を経て前底部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行っている。

3. 遺物の出土状態

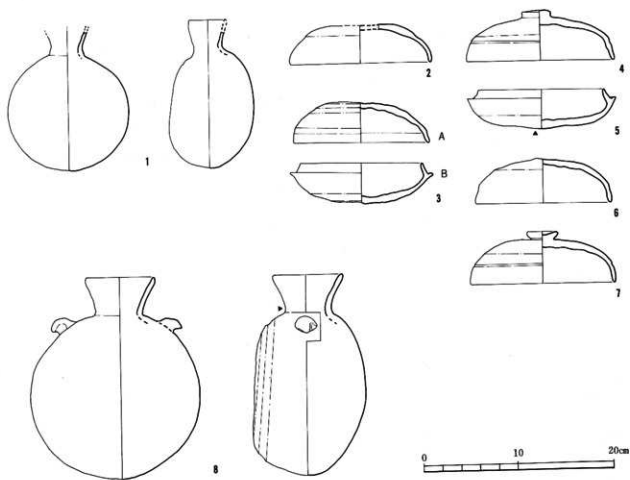
1) 玄室内

玄室内には若干の落盤が見られたがほぼ原位置で遺物が検出された。まず、玄室は中央西側にある石枕下に耳環2点、中央東側の大腿骨下に羨道方向に先端を向けた鉄鏃5点、刀子1点、奥壁に添って右側壁方向に先端を向けた鉄鏃1点、右側壁ぎわの右裾部コーナーより鉄鏃3点、右裾部中央に馬具および、その周辺に炭化物が、中央羨道寄りにも縁部を羨門方向に向けた提瓶(第56図8)が1点それぞれ検出された。

2) 墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道埋土の項で示した。ここでは出土状況について述べる。

墓道において、羨道より入口方向へ約1.6m付近で須恵器提瓶、坏蓋身、高坏蓋、坏蓋、坏身(遺物B群、第56図3~7)が一括埋置の状態、同じく約2m付近で須恵器提瓶、坏蓋片、甕片(遺物A群、第56図1・2)が散布状態で検出された。(村上久和)



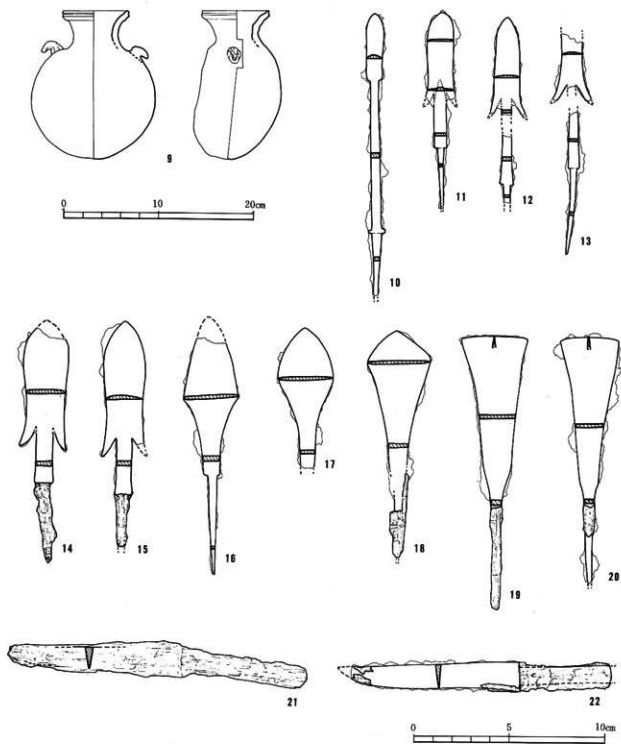
第56図 9号横穴墓出土物実測図(1)



56図-5

56図-8

第57図 9号横穴墓出土土器へラ記号



第58図 9号横穴墓出土遺物実測図(2)

第18表 9号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	提瓶	・3.8+ α ・15.6 ・12.6	口頸部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 胴部は、円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	暗青灰色	精緻 1mm前後の 石英粒を含む	良好 堅緻		
2	坏蓋	・14.8 ・4 ・—	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 褐色	精緻 石英粒を少量含む	良好 堅緻	反転復元	
3 A	坏蓋	・15.6 ・5.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 外面には、稜がみられ、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色	石英粒を含む	不良		
3 B	坏身	・13.2 ・4.1 ・15.7	たちあがりは内傾してのび端部 は丸い。 受部は上外方にのび端部は、丸 い。 底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	精緻 石英粒を少 量含む	良好 堅緻		
4	坏蓋	・15.6 ・5.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 外面には、うすい稜がみられる。 天井部は、やや高く平ら。外面 頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色	石英粒を微 量含む	不良		
5	坏部	・13.2 ・4.1+ α ・15.8	たちあがりは、内傾してのび、 端部は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は 丸い。 底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	精緻 石英粒を微 量含む	良好 堅緻		外面坏部底 面「1」
6	坏蓋	・14.4 ・4.6 ・—	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 紫褐色	精緻 石英粒を微 量含む	良好 堅緻		
7	坏蓋	・15.3 ・5.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび端 部は丸い。 外面には、稜がうすくみられる。 天井部は、低く平らで外面頂部 にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英粒を微 量含む	良好 堅緻		
8	提瓶	・7 ・21.1 ・17.6	口頸部は、外反しながらのび、 端部は丸い。胴部は、円形を呈 す。外面両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラナズリ	青灰色 明青灰色	1-3mmの 石英粒を少 量含む	良好		外面胴部 「2」
9	提瓶	・6.7 ・15.5 ・12.9	口頸部は、外反しながらのび、 端部は、面をなすが、その中央 に凹面をなす。 胴部は、円形を呈し、外面両肩 に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色 暗青灰色	精緻	良好 堅緻		

第19表 9号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刀部)	刀幅	頸幅	刀部厚	頸厚	備考
10	鉄鏃	14.9以上	3.5	0.9	0.4	0.2	0.3	
11	同上	10.2以上	4.8	1.4	0.6	0.1	0.1	
12	同上	9.7以上	5.1	1.4	0.5	0.1	0.2	
13	同上	11.5以上	3.3	1.4	0.5	0.1	0.2	
14	同上	12.7	6.2	2.4	0.8	0.2	0.25	木質残存
15	同上	11.8以上	7.0	2.2	0.7	0.2	0.25	同上
16	同上	13.5	6.0	2.9	0.8	0.2	0.3	
17	同上	6.5以上	4.5	2.9	0.8	0.2	0.2	
18	同上	11.8	9.0	3.3	0.4	0.2	0.2	木質残存
19	同上	14.4	8.6	3.5	0.5	0.2	0.25	同上
20	同上	13.0	7.7	3.0	0.5	0.2	0.25	同上
21	刀子	15.8	9.3	1.4	不明	0.4	不明	木質鞘、木質柄の残存
22	同上	14.5	9.6	1.5	0.9	0.3	不明	同上